RI*WAC
Research Institute for Women and Careers
日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0005
調査タイトル	昭和前期の本学卒業生に対する調査
論文／雑誌名	「昭和前期の日本女子大学卒業生に対する調査報告」 『昭和前期の女子教育』
著者	山本和代・落合孝子・真橋美智子・河合慶子
掲載ページ	pp.169-293.
発行年	1984.07
出版社	国土社

昭和57年度科学研究費補助金
一般研究(B)

昭和前期の女子教育報告書

昭和58年3月

日本女子大学女子教育研究所

序にかえて……青木生子 1

第一部　昭和前期の女子教育 7

昭和前期における女子教育政策の展開……中嶌　邦 8
——学校教育を中心に——

昭和前期の社会教育……中村　幸・村上雍子 31
女子青年団の教化教育
婦選獲得同盟の活動と政治教育
体制内婦人団体と地域婦人
——教化活動との関連で——

植民地における女子教育……中井良子・玉木尚子 83
——朝鮮・台湾の初等教育と社会教育を中心として——

女子教育の諸相 …… 98
家庭教育 吉沢千恵子
——倉橋惣三を中心に——
市川源三の女子中等教育 亀田春枝
公民科教育への期待 高橋富子
——小泉郁子——
井上秀と大学拡張運動 遠藤玲子
紡績工場における「女工」教育 山内陽子
昭和前期の「女教員」問題 …… 一番ヶ瀬康子 152

第二部　昭和前期の日本女子大学卒業生に対する調査報告 169

はじめに …… 山本和代・落合孝子 170
調査の概況 …… 真橋美智子・河合慶子 171

日本女子大学の教育……178
卒業後の生活……235
本学教育に対する評価……277
おわりに……283

第三部　教育統計　295

付　戦後女子教育研究文献目録(5)……真橋美智子　301

第二部　昭和前期の日本女子大学卒業生に対する調査報告

はじめに

本研究所はさきに、『明治の女子教育』に引き続き、『大正の女子教育』を刊行した。その中で、大正期の女子高等教育の側面を、被教育者の側から実証的にとらえることを目的として、大正期に本学に学び巣立った人たちを対象に調査を実施し、その結果を「大正期の本学卒業生に対する調査報告」として発表している。

本研究はこれに続くものであり、同様の趣旨で、昭和前期の日本女子大学卒業生に行った追跡調査をまとめたものである。

この時期は、満州事変の勃発より敗戦に至るまで、十五年間にわたる長い戦時期を含んでいる。教育も当然この過中にあったのであり、特に戦争末期は国家総力戦争の中に組みこまれ厳しい状況が展開する。このような中で本学の教育がどのように変遷し、また本学に学んだ者たちが当時の教育をどのように受け止め、その後の生活に反映させてきたか、これらの諸点を明らかにすることに留意している。

本調査は、日本女子大学の卒業生に限られたものであり、昭和前期といった制約の中にあるが、時代が大きく変転する夜明前の一時期、日本の女子高等教育がどのような状況にあり、どのような役割を果し得たかの一端を、教育の受け手の側からとらえたものとして、一つの意味をもつものであると思う。

したがって、記述に当っては被教育者の側からのなまの声をできるだけ忠実に記述することに努めている。

また、大正期との比較検討の資料として、随所に「大正期の本学卒業生に対する調査」（日本女子大学女子教育研究所編、女子教育研究双書五『大正の女子教育』国土社、昭和五十年）を引用しているので参照していただければ幸である。

調査の概況

一　調査期日

調査期日は、昭和五十七年一月十三日～二月二十八日である。

当初、二月初めを回収期限としていたが、その時点での回収数が発送数の½にみたなかったため、二月九日に催促状を発送し、回収有効期限も二月二十八日まで延期した。

二　調査対象

調査対象者は二、二一六名である。

本調査では、昭和前期に日本女子大学の教育をうけた者のうち、桜楓会名簿により½の抽出（高等学部および大学本科については全数）で行った。

回生でみると、二六回生（大正十四年入学、昭和四年卒業）から四三回生（昭和十七年入学、同二十年九月卒業）までが該当する。

表-1　調査対象者数

回生＼学部		合計	家政	師範家政	社会事業	国文	英文	高等	本科
前期	26	103	46	16	11	17	13	—	—
	27	112	41	16	9	20	14	12	—
	28	99	27	26	5	19	15	7	—
	29	113	41	26	3	18	14	11	—
	30	135	29	33	2	20	16	9	26
	31	108	35	36	3	19	10	—	5
	32	96	14	38	2	18	15	—	9
	33	92	20	36	6	17	13	—	—
中期	34	88	21	36	5	17	9	—	—
	35	76	16	30	3	15	12	—	—
	36	90	13	41	7	18	11	—	—
	37	79	14	39	4	14	8	—	—
	38	105	15	51	9	18	12	—	—
	39	122	23	47	14	25	13	—	—
後期	40	165	31	63	20	33	18	—	—
	41	204	53	76	25	38	12	—	—
	42	247	72	94	26	42	13	—	—
	43	182	59	64	12	34	13	—	—
合計		2,216	570	768	166	402	231	39	40

表-2　学部別・時期別卒業者数

	家政	師範家政	社会事業	国文	英文	高等	本科	合　計
前　期	741	647	123	437	325	67	53	2,393
中　期	288	646	137	279	191	—	—	1,541
後　期	515	715	199	382	156	—	—	1,967
合　計	1,544	2,008	459	1,098	672	67	53	5,901

（資料）　桜楓会名簿より作成

（注）　但し，高等学部修了後大学本科に進み，卒業した者については大学本科卒業者として扱い，高等学部卒業者には含まれていない。

専攻学部別・回生別対象者数は表-1の通りである。

調査時の年齢は五十五歳から七十四歳までである。

(一) 卒業者

昭和前期を通じて、女子の進学率の上昇にはめざましいものがあり、女子の高等教育修了者数も大幅に増加している。

本調査の対象者数は、前述のように二、二一六名であるが、既に故人となった者もあり、昭和前期の本学卒業者総数は五、九〇一名で、大正期の本学卒業者総数二、三七七名の二倍以上になっている。学部別・時期別（後述の「三　調査方法」の項参照）の卒業者数は表-2の通りである。学部別では師範家政学部（家政学部第二類を含む）が最も多く、次いで家政学部（家政学部第一類を含む）・国文学部・英文学部・社会事業学部（家政学部第三類を含む）の順である。時期別では後期の四〇回生以降で卒業者が急増している。こうした傾向は戦局が一層厳しさを増し、女子の勤労動員が強化されたことと密接に関わっているものと考えられる。即ち、苛酷な動員から逃れるために入学者が急増し、卒業者数の増加をもたらしたものと推察される。

(二) 退学者

昭和前期の中途退学者は大正期同様にかなりの数にのぼっている（表-3参照）。学部別にみると、家政学部では中途退学者が約四〇%と最も高い比率を占めているが、大正期には同程度に中途退学者が多かった国文学部・英文学部では定着状況がかなり良くなっている。最も中途退学者が少ないのは師範家政学部である。その理由としては、後述の「入学の動機」および「学科選択の理由」として、師範家政学部に「資格・免許の取得」をあげる者が全学部を通

表-3　中途退学者　(%)

	入学者	退学者	除名者	死亡者
	9,627	30.8	4.6	0.7
家政	2,897	39.9	4.3	0.6
師範家政	2,919	22.5	4.2	0.8
社会事業	711	30.1	7.5	0.8
国文	1,685	29.1	5.0	1.0
英文	1,091	32.4	2.3	0.6
高等	230	29.6	10.4	0.4
本科	94	26.6	7.4	1.1
前期	4,224	32.7	5.5	0.7
中期	2,565	35.0	4.8	0.5
後期	2,838	24.1	3.1	1.0

(資料)　学籍簿

表-4　退学理由　(%)

	退学者総数	家事	結婚	病気	事故	その他	不明
計	2,964	76.3	1.5	18.0	2.5	0.7	1.0
家政	1,157	79.1	1.5	15.2	2.4	1.0	0.9
師範家政	657	73.4	2.3	19.8	1.4	0.8	2.4
社会事業	214	75.7	1.4	19.6	2.8	—	0.5
国文	490	78.0	1.4	18.0	2.0	0.4	0.2
英文	353	74.8	0.6	21.5	2.0	0.6	0.6
高等	68	60.3	—	27.9	10.3	1.5	—
本科	25	60.0	—	8.0	32.0	—	—
前期	1,380	72.8	0.7	21.2	4.3	0.8	0.3
中期	899	82.0	0.3	13.9	1.1	0.7	2.0
後期	685	75.8	4.7	16.9	0.9	0.6	1.2

(資料)　学籍簿

じて最も多いことにもうかがえるように、大正期の家政理学部の場合と同様、この学部を卒業すると中等教員の無試験検定資格が得られたため、明確な目的意識を抱いて入学した者が多かったためと考えられる。時期別にみると、前期と中期に中途退学者が多く、学生数の急増する後期には中途退学者の数は逆にかなり減少している。その背景には、前述の後期における学生数の急増をもたらしたところの動員の問題があったと考えられる。即ち日毎に厳しさを増す動員から逃れるために退学者も減少したと推察される。

退学の時期としては、入学後一、二年以内の比較的早い時期に退学する者が多い。とりわけ後期には入学一年以内の退学者が多い。

退学の理由は表-4の通りである。「家事（家庭の事情）」が七六％で最も多く、次いで「病気」八％で、その他の理由は少ない。「家事」を理由とする者は家政学部や国文学部に若干多くみられ、逆に高等学部および大学本科ではかなり低率になっている。また「事故」を理由とする者は全体では少数であるが、大学本科だけは三〇％強で、退学理由の第二位を占めている。

除名者についてみると、時期別では前期が最も多く、中期から後期にかけて徐々に減少している。しかし、敗戦の混乱の中で卒業を迎えた四三回生においては戦後様々な理由で本学に戻ることができず、後に長期欠席で除名になった者が少なくない。とりわけ中国や朝鮮の出身者に多く、戦争の影響が外地出身者に特に大きかったことがうかがわれる。学部別では高等学部・大学本科・社会事業学部に比較的多くみられた。

三　調査方法

調査方法は、質問紙法により調査対象者に直接郵送し、配布二十日後を回収日と定めた。

回収状況は次の通りである。

調査票発送部数	二、二一六
有効回収部数	一、五三七
返却部数	二八
未回答および無効回答部数	六五一
回収率	六九・四%

集計・製表については、コーディング作業後、自由記述式の回答部分は手集計を行い、その他の部分は機械集計（単純集計・項目間のクロス集計）によった。

調査結果は時期（回生）別、専攻学部別に検討している。時期については、昭和前期をさらに次の三期に区分した。

①前期　二六回生（昭和四年卒業）～三三回生（昭和十一年卒業）

②中期　三四回生（昭和十二年卒業）～三九回生（昭和十六年十二月卒業）

③後期　四〇回生（昭和十七年卒業）～四三回生（昭和二十年九月卒業）

この区分は、日中戦争が始まった昭和十二年、および太平洋戦争に突入した昭和十六年がともに時代の大きな節目となっていることなどの理由による。

専攻学部については次の七学部（科）に分類した。

①家政学部（二六～三一回生）・家政学部第一類（三二～四三回生）

②師範家政学部（二六～三一回生）・家政学部第二類（三二～四三回生）

③社会事業学部（二六～三三回生）・家政学部第三類（三三～四三回生）

④国文学部（二六～四三回生）

⑤英文学部（二六～四三回生）
⑥高等学部（二七～三〇回生）
⑦大学本科（三〇～三三回生）

学部の分類は本学の学部の開設状況に基づくが、本学の学部系統図（『図説日本女子大学の八十年』）等を参照した。分類の結果、学部の併記されているものについては、時期的に早い学部の名称をもって統一して報告している。

専攻学部別・時期別回答者数は表-5の通りである。

表-5　学部別・時期別回答者数

学部＼時期	前期	中期	後期	合計 実数	合計 %
家政	165	66	133	364	23.4
師範家政	167	185	213	565	36.8
社会事業	25	27	59	111	7.2
国文	109	73	102	284	18.5
英文	81	45	35	161	10.5
高等	26	—	—	26	1.7
本科	26	—	—	26	1.7
合計	599	396	542	1,537	100.0

四　調査項目

本調査は二部から成っている。「第一部　日本女子大学の教育」では、昭和前期の入学者の概況および学園生活の諸相について回答を求めている。「第二部　卒業後の生活」では卒業後の進路・家庭生活・職業生活・社会活動・生きがい等についてたずね、最後に今後の女子教育の方向について意見を求めている。

日本女子大学の教育

本章では、昭和前期の日本女子大学の教育について述べる。

一　昭和前期の入学者

まず入学者の概況・背景について「入学時の年齢」「出身地」「両親の職業及び学歴」「入学の動機」「学科選択の理由」「入学に際しての両親の意見」等からみてみよう。

(一)　入学時の年齢

入学時の年齢は表-6に示すように、全体としては十七歳で入学した者が四二・九%と最も多く、次いで十八歳二六・〇%、十六歳未満二二・四%となっている。このように十六歳から十八歳で入学した者が全体の九一・三%を占め、大多数の者が女学校卒業後直ちに本学に入学したと思われる。

学部別にみると、本科・師範家政学部・家政学部において、十七歳未満で入学した者が多く、約七割に達している。社会事業学部の場合は、二十歳を越えて入学した者が他の学部に比べて多い。

時期別にみると、十七歳未満で入学した者は、前期五七・八%、中期六二・六%、後期七五・六%と時期が進むに

表-6　入学時の年齢　(%)

		総数	～16歳	17歳	18歳	19歳	20歳以上	不明	無答
計		1,537	22.4	42.9	26.0	4.0	1.9	0.3	2.4
学部別	家政	364	26.1	39.6	25.3	4.1	0.8	—	4.1
	師範家政	565	27.8	45.0	22.8	1.2	1.4	—	1.8
	社会事業	111	15.3	45.9	25.2	5.4	6.3	0.9	0.9
	国文	284	18.7	40.5	29.2	5.6	3.2	1.1	1.8
	英文	161	7.5	43.5	36.6	8.7	1.2	0.6	1.9
	高等	26	11.5	50.0	19.2	11.5	—	—	7.7
	本科	26	30.8	46.2	15.4	3.8	—	—	3.8
時期別	前期	599	20.4	37.4	28.4	6.3	3.2	0.7	3.7
	中期	396	17.9	44.7	30.1	3.8	1.5	0.3	1.8
	後期	542	28.0	47.6	20.5	1.7	0.7	—	1.5

つれて増加し、特に後期においては世相を反映し、女学校卒業後直ちに入学した者が多くなっている。これに対し、二十歳を越えて入学した者は前期に多く、学部別では社会事業学部・国文学部に多い。

当研究所が昭和四十五年に実施した「大正期の本学卒業生に対する調査報告書」(『大正の女子教育』女子教育研究双書五(国土社)以下「大正期」と略す)と比較すると、二十歳を越えて本学に入学した者が「大正期」の場合は九・五%と約一割であるのに比べ、「昭和前期」の場合は一・九%と少なく、しかも前述のように大正期に時期的に近い前期に多くみられる。

(二)　出身地

昭和前期の本学卒業生の出身地は、表-7の通りである。戦時期にもかかわらず、出身地は北は北海道・樺太から、南は九州・沖縄、遠くは中国・朝鮮にも及んでいる。また中国や朝鮮からの留学生もかなりの数にのぼっている。

全学部を通じて東京出身者が最も多く、全体のほぼ三三%を占め、次いで中国・北海道・福岡・朝鮮・神奈川の順である。学部別にみると、家政学部や師範家政学部に比較的地方出身者が多い。これに対し英文学部や大学本科では東京出身者が多く、その過半数を占めている。特に英文学部の場合、東京および近県のミッション系の女学校出身者が多くみられる。ま

表-7 出身地

		家政	師範家政	社会事業	国文	英文	高等	本科	前期	中期	後期	合計
関東	東京	417	539	137	399	384	47	26	722	541	686	1949
	神奈川	48	50	10	25	25	3	1	64	37	61	162
	千葉	37	41	4	29	3	1	—	54	22	39	115
	茨城	14	25	7	14	2	1	1	31	17	16	64
	栃木	26	38	7	12	6	5	1	47	27	21	95
	埼玉	25	22	6	12	5	3	3	33	15	28	76
	群馬	31	32	2	6	9	2	—	37	22	23	82
中部	長野	57	43	7	13	9	2	2	69	20	44	133
	山梨	16	36	3	10	8	—	—	25	21	27	73
	静岡	41	53	13	22	11	2	—	64	38	40	142
	愛知	24	25	5	15	3	1	—	29	18	26	73
	岐阜	9	7	4	7	—	1	1	14	6	9	29
近畿	三重	9	12	6	11	—	1	1	22	9	9	40
	滋賀	5	3	3	2	1	—	—	7	2	5	14
	大阪	25	31	12	18	12	2	—	38	24	38	100
	京都	10	12	1	6	5	1	1	15	8	13	36
	奈良	2	6	1	3	—	1	—	5	4	4	13
	和歌山	10	13	3	10	1	1	1	18	8	13	39
中国	兵庫	31	43	9	21	8	3	—	48	20	47	115
	鳥取	15	6	4	7	1	1	1	13	8	14	35
	島根	8	8	3	—	3	1	1	14	4	6	24
	岡山	34	41	10	23	4	1	1	58	28	28	114
	広島	20	30	4	17	10	2	—	42	16	25	83
	山口	19	35	11	16	3	2	1	40	25	22	87
四国	香川	8	13	5	2	6	—	—	18	8	8	34
	徳島	5	6	2	2	2	—	—	8	2	7	17
	高知	6	6	3	4	1	—	—	11	4	5	20
	愛媛	16	27	2	8	2	2	—	24	18	15	57
九州	福岡	60	70	21	39	21	1	—	84	59	69	212
	佐賀	8	8	7	3	—	—	—	10	6	10	26
	長崎	11	22	2	10	3	1	1	20	14	16	50
	熊本	17	37	8	12	4	—	—	32	20	26	78
	大分	6	11	1	9	1	—	—	15	5	8	28
	宮崎	9	10	—	4	—	—	—	10	7	6	23
	鹿児島	12	22	6	8	4	—	—	33	10	9	52
	沖縄	1	12	—	3	1	—	—	7	4	6	17
北陸	福井	9	11	3	5	2	—	—	19	4	7	30
	石川	8	7	1	2	2	1	1	13	—	9	22
	富山	15	17	5	9	4	—	—	32	8	10	50
	新潟	39	50	3	14	5	3	1	60	28	27	115
東北	福島	34	35	8	18	10	1	—	46	30	30	106
	宮城	16	28	2	18	3	—	—	25	21	21	67
	山形	17	21	3	13	1	1	—	32	14	10	56
	秋田	26	24	3	11	3	—	—	28	17	22	67
	岩手	17	32	2	8	3	1	1	30	15	19	64
	青森	12	21	4	17	4	—	—	35	14	9	58
北海道		70	73	5	46	16	2	2	102	44	68	214
中国		104	157	20	77	24	5	1	91	116	181	388
朝鮮		42	70	8	32	8	4	1	71	37	57	165
樺太		3	7	—	4	—	—	—	4	6	4	14
その他の外国		8	7	1	3	23	—	—	9	20	13	42
不明		1	—	1	—	—	—	—	1	1	—	2
留学生	中国	9	11	46	6	1	2	—	18	37	20	75
	朝鮮	11	34	9	6	5	1	—	21	25	20	66
	その他	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
合計		1,534	2,000	453	1,091	672	109	50	2,418	1,535	1,956	5,909

(資料) 学籍簿

表-8　入学時の父親の職業　(%)

父親の職業	計	学部別							時期別		
		家政	師範家政	社会事業	国文	英文	高等	本科	前期	中期	後期
総数	1,537	364	565	111	284	161	26	26	599	396	542
経営・管理	16.3	25.3	12.2	15.3	15.1	13.7	15.4	15.4	13.7	14.1	20.8
公務関係	13.3	12.4	13.1	11.7	16.5	12.4	11.5	11.5	16.0	12.6	10.9
自由・専門的	18.5	20.9	16.8	19.8	18.7	14.9	30.8	26.9	18.0	20.5	17.7
芸術・芸能	0.8	0.3	0.5	—	1.1	3.1	—	—	0.7	1.0	0.7
書記的・技能的	15.0	12.4	14.7	18.0	12.3	24.8	15.4	11.5	13.0	15.9	16.4
教育関係	5.3	1.9	8.5	3.6	4.2	5.0	—	7.7	5.7	5.6	4.6
福祉・保健	0.7	0.3	0.9	1.8	0.4	0.6	—	—	0.5	1.0	0.6
その他専門的	0.1	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	0.2
各種自営業	17.0	14.6	20.2	12.6	17.6	13.7	15.4	15.4	18.4	13.4	18.1
その他	3.1	4.7	2.8	3.6	3.2	1.2	—	—	4.0	3.0	2.2
無職	9.9	7.1	10.3	12.6	10.9	10.6	11.5	11.5	9.8	12.9	7.8
不明	0.1	—	—	0.9	—	—	—	—	0.2	—	—

た、社会事業学部では中国や朝鮮からの留学生が最も多く、特に家政学部第三類への移行後増加している。これは課程が三年であり、しかも社会事業の理論と知識の修得と同時に、家政学の素養と技術を獲得できるという点が歓迎されたためであったようだ（『日本女子大学社会福祉学科五十年史』参照）。

時期別にみると、中期から後期にかけて、我が国の大陸政策に伴い、中国出身者が急増している。

昭和前期の本学卒業者の出身地を大正期の場合と比較してみると、昭和前期では東京出身者の占める割合が大正期の二倍以上に高まり、しかも中国・朝鮮出身者が大幅に増加している点が注目される。東京出身者の割合が高まった点については、後述の入学者の父親（家）の職業の変化とも関連しよう。

〈注〉出身地および前述の中途退学者の状況を把握するにあたっては、当時の学籍簿によった。出身地については今回の調査対象者に限らず、昭和前期の卒業者全員のものである。なおここでは、本学入学時の父兄の現住所をもって出身地とした。

(三) 両親の職業及び学歴

次に、入学時の父親と母親の職業・最終学歴についてみよう。

。父親について

入学時の父親の職業をみると、全般的傾向として、自由・専門的職業一八・五%、経営・管理的職業一六・三%、書記的・技能的職業一五・〇%、公務関係一三・三%が多く、これらで全体の六三・一%を占めている。職域としては、事務的業務（書記的・技能的職業）、医師（自由・専門的職業）、重役等の管理的職業（経営・管理的職業）、官吏（公務関係）、会社経営（経営・管理的職業）等が目立っている。

他方、各種自営業一七・〇%も多く、その中では、商業が五八・二%と半数以上を占めている（表-8）。

これを、「大正期」の家の職業と比較してみよう（『大正の女子教育』一六一頁参照）。「大正期」では「商業・農業・工業・鉱業・水産業」等の自営業四一・六%が最も多く、次いで「公務・管理・自由業」三五・二九%となっている。これに対し、「昭和前期」の場合は、前述のように各種自営業よりも「自由・専門・管理・公務関係」の方が多い。

表-9　SSM職業分類および職業威信スコア

SSM職業分類		職業威信スコア
専門的職業	裁判官，検察官，弁護士	87.3
	医師	82.7
	大学教員	83.5
	教師	62.9
	建築技師	62.7
	編集者	64.6
	看護婦	52.8
管理的職業	管理的公務員	70.5
	会社役員	73.3
事務的職業	一般事務員	51.6
	タイピスト	47.4
	警察官	54.2
	職業軍人	54.2
販売的職業	小売店主	48.9
	サービス業従事者	31.7
熟練的職業	洋服仕立職	42.9
	大工	45.3
	美容師	45.0
半熟練的職業	運転手	40.6
	旋盤工	37.3
	紡績工	32.6
非熟練的職業	家政婦	31.4
	道路工夫	26.7
農林的職業	農耕・養蚕作業者	39.5
	漁ろう作業者	35.9

（資料）『日本社会の階層構造』1975年

しかし、「昭和前期」においても大正期に時期的に近い前期では各種自営業の父親が多く、第一位に挙げられている。

自由・専門・管理・公務関係の職域については、両時期ともに大きな違いはみられず、事務的業務・医師・官吏等が目立っている。各種自営業については、「大正期」では商業と農業、「昭和前期」の場

表-10　父親の最終学歴　(%)

最終学歴	計	学部別							時期別		
		家政	師範家政	社会事業	国文	英文	高等	本科	前期	中期	後期
総数	1,537	364	565	111	284	161	26	26	599	396	542
大学院	0.3	0.3	—	0.9	0.4	0.6	—	—	0.2	0.3	0.4
大学	34.0	37.4	29.9	38.7	31.7	44.1	30.8	19.2	24.4	41.9	38.7
陸・海軍大学	0.7	0.8	0.7	0.9	0.7	0.6	—	—	0.7	0.3	1.1
旧制高等学校	0.5	0.3	1.1	—	0.4	—	—	—	0.5	0.3	0.7
専門学校	26.0	26.9	28.1	24.3	25.4	19.3	15.4	30.8	27.2	21.2	28.0
陸軍士官学校・海軍兵学校	2.3	3.3	2.1	0.9	1.8	2.5	—	7.7	1.8	2.8	2.6
師範学校	3.8	1.6	6.0	5.4	2.1	2.5	3.8	3.8	4.2	4.5	2.8
中等学校	11.0	11.5	12.4	11.7	9.2	8.1	11.5	7.7	9.7	12.4	11.4
商・工業学校	2.7	3.6	2.1	0.9	3.2	2.5	3.8	3.8	3.0	1.8	3.0
小学校	10.5	8.2	10.8	5.4	15.1	9.3	15.4	7.7	15.4	6.6	7.9
寺小屋・塾	1.3	0.8	0.4	0.9	3.2	1.9	3.8	3.8	2.2	1.3	0.4
不明	7.0	5.2	6.4	9.9	7.0	8.7	15.4	15.4	10.9	6.8	3.0

表-11　父親の最終学歴と職業　(%)

父親の最終学歴	総数	父親の職業											
		経営・管理	公務関係	自由・専門	芸術・芸能	書記・技能	教育関係	福祉・厚生・福利	その他専門	各種自営	その他	無職	不明
計	1,537	16.3	13.3	18.5	0.8	15.0	5.3	0.7	0.1	17.0	3.1	9.9	0.1
大学院	4	25.0	—	75.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大学	522	17.4	16.3	32.8	0.8	18.6	3.3	0.8	—	3.3	1.3	5.6	—
陸・海軍大学	11	9.1	90.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
旧制高校	8	12.5	25.0	—	12.5	12.5	—	—	—	12.5	12.5	12.5	—
専門学校	399	22.3	8.5	23.1	1.0	18.3	7.0	0.8	—	11.3	2.3	5.3	0.3
陸軍士官学校 海軍兵学校	36	5.6	69.4	—	—	8.3	—	—	—	—	—	16.7	—
師範学校	58	6.9	12.1	—	1.7	5.2	51.7	3.4	—	6.9	1.7	10.3	—
中等学校	169	18.3	13.0	1.8	0.6	8.9	1.2	—	—	37.3	9.5	9.5	—
商・工業学校	41	17.1	12.2	2.4	2.4	19.5	4.9	—	2.4	31.7	2.4	4.9	—
小学校	161	11.8	2.5	2.5	—	12.4	—	0.6	—	59.6	6.2	4.3	—
寺小屋・塾	20	10.0	10.0	5.0	—	10.0	—	—	—	35.0	10.0	20.0	—
不明	108	2.8	8.3	9.3	—	7.4	1.9	—	—	13.9	0.9	55.6	—

合は商業が多い。

「昭和前期」の父親の職業を時期的にみると、前述のように、前期では各種自営業が最も多く、時期が進むにつれて、経営・管理的職業の大幅な増加がみられる。

日本社会学会の職業威信スコア（一九七五年）によれば（表-9）、父親の職業として多く挙げられている医師の職業威信スコアは八二・七、また重役等の管理的職業は七三・三等威信スコアの高いものが挙げられている。

このことからもわかるように、本調査対象者はかなり高い社会階層の出身者であることが推察される。

次に、父親の最終学歴をみると(表-10)、全般的傾向として、大学三四・〇%、専門学校二六・〇%が多く、この二つの高等教育修了者で全体の六〇・〇%を占めている。次いで中等学校一一・〇%、小学校一〇・五%である。また、外国の学校を卒業した者も二・四%あり、そのほとんどが大学である。このように調査対象者の父親が学んだ時代は明治末から大正にかけてと思われるが、当時の教育状況から推察して、高い学歴の父親であるといえよう。

時期別にみると、前期には専門学校を挙げる者二七・二%が最も多く、中期になって大学が大幅に増加し、第一位である。専門学校以上の高等教育修了者は時期が進むにつれて増加傾向を示しており（前期五二・五%、中期六三・七%、後期六八・二%）、他方、小学校や寺小屋は減少傾向にあり、父親の高学歴化の傾向がみられる。また、陸軍士官学校や陸・海軍大学を挙げる者が増加しており、当時の社会状況がうかがえる。

次に、父親の最終学歴と職業との関連をみると（表-11）、大学院・大学・専門学校卒業者は、自由・専門的職業や経営・管理的職業に、また中等学校、商・工業学校、小学校、寺小屋等を卒業した者は各種自営業に多い。

。母親について

母親の最終学歴についてみると（表-12）、全般的傾向として、高等女学校が最も多く、五〇・二%と半数に達している。次いで小学校一五・九%、大学九・三%、専門学校七・八%の順であり、大学・専門学校等の高等教育を受け

表-12　母親の最終学歴　(%)

最終学歴	計	学部別							時期別		
		家政	師範家政	社会事業	国文	英文	高等	本科	前期	中期	後期
総数	1,537	364	565	111	284	161	26	26	599	396	542
大学院	0.1	—	0.2	—	—	—	—	—	—	0.3	—
大学	0.3	—	0.5	—	—	1.2	—	—	—	0.5	0.6
日本女子大学	9.0	11.5	8.0	6.3	7.4	13.0	11.5	—	9.8	8.1	8.9
専門学校	7.8	5.5	10.1	3.6	8.5	6.8	11.5	3.8	5.7	7.6	10.3
師範学校	4.5	2.5	6.7	4.5	2.5	5.0	—	7.7	3.7	5.6	4.6
高等女学校	50.2	56.6	48.8	61.3	47.9	44.7	19.2	30.8	38.7	54.0	60.0
実科女学校	4.0	4.4	4.4	2.7	4.9	0.6	7.7	3.8	5.0	3.3	3.5
小学校	15.9	12.6	14.5	12.6	21.8	16.1	26.9	30.8	22.7	13.9	10.0
寺小屋・塾	1.1	1.4	0.5	—	0.7	3.1	3.8	3.8	2.5	0.5	—
不明	7.0	5.5	6.2	9.0	6.3	9.3	19.2	19.2	11.9	6.3	2.2

表-13　入学時までの母親の職業　(%)

母親の職業	計	学部別							時期別		
		家政	師範家政	社会事業	国文	英文	高等	本科	前期	中期	後期
総数	1,537	364	565	111	284	161	26	26	599	396	542
経営・管理	0.3	0.3	0.4	0.9	—	0.6	—	—	0.2	0.3	0.6
公務関係	0.2	—	0.2	—	0.7	—	—	—	0.2	0.5	—
自由・専門的	0.6	0.3	0.7	1.8	—	1.2	—	—	0.5	1.0	0.4
芸術・芸能	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
書記的・技能的	0.6	0.3	0.9	—	0.7	—	3.8	—	0.3	1.0	0.6
教育関係	13.7	10.7	17.9	14.4	9.9	13.0	7.7	15.4	13.0	13.4	14.8
福祉・保健	0.9	1.1	0.9	—	0.7	—	7.7	3.8	1.5	0.3	0.7
その他専門的	0.3	—	—	—	0.4	1.2	3.8	—	0.5	0.3	—
各種自営業	1.4	1.9	0.9	1.8	2.5	—	—	3.8	2.3	1.0	0.7
その他	0.4	1.1	0.2	—	0.4	—	—	—	0.5	0.5	0.2
無職	81.3	84.3	77.7	80.2	84.2	83.9	76.9	76.9	81.0	81.3	81.5
不明	0.3	—	0.4	0.9	0.7	—	—	—	—	0.5	0.6

た母親は一七・二%を占めている。このうち九・〇%が日本女子大学の卒業であり、全体の約一割である。なかには、日本女子大学卒業後、コロラド大学大学院修士課程を修了した者もある。当時の教育状況からみて、父親と同様に母親の学歴はかなり高いことが推察されよう。

また、父親と同様に、母親においても、時期に正比例して高学歴化の傾向がみられる。

職業経験については（表-13）、職業経験のない者が八一・三%と大部分を占め、職業を持った経験のある人は一八・四%にすぎない。職業経験のある者について、その職種をみると、教育関係が最も多く、全体の七四・六%を占めている。中でも女学校教員と小学校教員が多い。母親と本調査対象者の職業経験の有無について関連をみると、現在まで職業を継続している者の母親に職業経験のある者が多いことは興味深い点である。

㈣ 入学の動機

次に、入学の動機をみると、全般的傾向としては、表-14に示すように、「女学校だけではもの足りない」三八・五%が多く、次いで「専門の勉強をしたかったので」二五・二%、「両親のすすめによる」二五・二%、「親せき・知人や先輩に本学で学んだ人がいたので」二四・五%と続いている。

これを学部別にみると、家政・師範家政・社会事業の各学部では、「女学校だけではもの足りない」を挙げる者が順に四八・六%、三六・六%、三七・八%と最も多く、これに対し、国文・英文の両学部では、「専門の勉強をしたかったので」が入学動機の第一位に挙げられ、その選択率も四四・四%、四八・四%と四割を越えている。特に、学部別の傾向では、家政学部の場合、この他に「両親のすすめ」「親せき・先輩に本学で学んだ人がいた」等が多く、両親や周囲の影響がみられる。師範家政学部においては、「資格・免許を取りたいと思って」を挙げる者が多く、また「何か将来、社会の役に立ちたいと思って」「卒業後経済的に自立したいと思って」等が他の学部に比べて多く選択さ

表-14　入学の動機

(%)

	計	学部別							時期別		
		家政	師範家政	社会事業	国文	英文	高等	本科	前期	中期	後期
総数	1,537	364	565	111	284	161	26	26	599	396	542
専門の勉強をしたかった	25.2	10.4	17.5	25.2	44.4	48.4	34.6	34.6	26.0	24.2	24.9
女学校だけではもの足りなかった	38.5	48.6	36.6	37.8	33.8	32.3	46.2	23.1	37.1	41.7	37.8
日本女子大にあこがれて	7.5	12.4	6.5	9.0	4.9	3.7	7.7	3.8	7.8	5.3	8.7
上京したかった	1.2	1.9	0.9	2.7	0.7	0.6	—	—	1.0	1.3	1.3
よい先生の教えを受けたかった	8.1	8.2	6.2	7.2	12.0	5.6	19.2	15.4	8.5	7.8	7.9
精神教育を受けたい	3.6	6.3	2.7	3.6	1.4	4.3	7.7	—	5.3	3.0	2.0
精神的自立を得たい	7.4	8.5	5.0	5.4	10.2	7.5	15.4	11.5	6.3	7.3	8.5
何か将来、社会の役に立ちたい	10.5	5.9	11.2	28.8	8.5	9.3	11.5	11.5	10.7	9.8	10.7
卒業後経済的に自立したい	5.9	1.6	7.6	3.6	6.7	9.3	3.8	11.5	8.2	5.1	4.1
資格・免許を取りたい	14.4	0.8	28.0	—	10.9	15.5	—	15.4	14.5	15.9	13.1
両親のすすめ	25.2	35.7	25.5	25.2	16.9	19.3	3.8	19.2	20.5	29.0	27.5
教師のすすめ	7.4	5.2	11.0	2.7	5.3	5.6	7.7	11.5	7.8	5.3	8.3
親せき・知人・先輩に本学の卒業生	24.5	31.3	25.8	27.9	19.4	13.0	15.4	23.1	22.5	25.5	26.0
特になし	2.5	2.5	1.8	3.6	3.2	3.1	3.8	3.8	2.8	3.5	1.5
その他	5.9	7.1	5.0	5.4	5.6	6.8	11.5	3.8	7.0	4.3	5.9
不明	1.4	1.9	1.4	1.8	1.1	0.6	—	—	1.8	0.8	1.3
無答	0.1	0.3	—	—	—	—	—	—	0.2	—	—

（注）　多答式のため合計は100%を越える。

表-15 「入学の動機」と「職業経験」

(%)

	計	職業経験の有無					不明	無答
		現在まで就業	中断したことあり	過去に持っていた	アルバイト・内職をしたことあり	職業に就いたことはない		
総数	1,537	86	223	663	84	300	15	166
専門の勉強をしたかった	25.2	40.7	30.5	27.8	33.3	14.3	20.0	15.7
女学校だけではものたりなかった	38.5	16.3	30.0	35.0	45.2	50.0	26.7	52.4
日本女子大にあこがれて	7.5	7.0	7.2	7.8	2.4	8.3	—	8.4
上京したかった	1.2	2.3	0.4	1.2	3.6	0.7	—	1.2
よい先生の教えを受けたかった	8.1	5.8	6.3	6.9	9.5	10.7	13.3	10.8
精神教育を受けたい	3.6	3.5	4.5	2.7	3.6	2.7	13.3	6.6
精神的自立を得たい	7.4	9.3	8.5	7.5	8.3	4.7	6.7	8.4
何か将来、社会の役に立ちたい	10.5	22.1	14.3	10.7	8.3	4.0	20.0	10.2
卒業後経済的に自立したい	5.9	19.8	4.0	8.7	1.2	0.7	—	2.4
資格・免許を取りたい	14.4	14.0	13.9	17.0	10.7	13.0	20.0	8.4
両親のすすめ	25.2	12.8	28.7	24.1	22.6	32.3	13.3	20.5
教師のすすめ	7.4	7.0	7.6	8.0	4.8	6.7	6.7	7.2
親せき・知人・先輩に本学の卒業生	24.5	19.8	21.1	22.8	28.6	28.3	33.3	28.9
特になし	2.5	—	3.6	2.0	4.8	3.0	—	3.0
その他	5.9	2.3	4.9	6.5	9.5	5.7	—	6.0
不明	1.4	2.3	1.8	1.1	—	2.0	6.7	0.6
無答	0.1	—	—	0.2	—	—	—	—

(注) 多答式のため合計は100%を越える。

れており、入学当初から、かなりはっきりした目標を持ち、積極的な意図を持って入学してきた者が多いことがうかがえる。社会事業学部の場合では、「何か将来、社会の役に立ちたいと思って」と答えている者が多く、社会に目を向け、積極的に対応していこうとする姿勢が推察される。

次に、時期的にみると、「卒業後経済的に自立したいと思って」「精神教育を受けたい」と答えている者は前期に多く、「両親のすすめ」「親せき・先輩に本学で学んだ人がいた」等の理由を挙げる者は時期が進むにつれて増加する傾向がみられる。

本調査対象者の職業経験の有無と入学の動機との関連をみると（表-15）、現在まで職業に就いている者は、「専門の勉強をしたかったので」四〇・七%、「何か将来、社会の役に立ちたいと思って」二二・一%、「卒業後経済的に自立したいと思って」一九・八%等を選択している者が多く、入学当初からかなりはっきりとした目標を持っていたことがうかがえる。

表-16 「大正期」の入学の動機　(%)

入学動機	計
専門の勉強をしたかった	21.1
女学校だけではもの足りなかった	58.2
日本女子大にあこがれて	11.9
上京したかった	2.0
よい先生の教えを受けたかった	9.6
精神教育を受けたい	12.7
精神的独立を得たい	5.7
何か将来，社会の役に立ちたい	19.4
卒業後経済的に自立したい	9.0
資格を取りたい	9.9
両親のすすめ	16.5
教師のすすめ	9.1
特になし	2.5
その他	5.1
無答	1.1

（資料）前掲『大正の女子教育』

次に、入学動機を「大正期」と比較すると（表-16）、「大正期」では「女学校だけではもの足りない」と答えている者が多いのに対し、「昭和前期」では、「両親のすすめ」「親せき・先輩に本学で学んだ人がいた」を挙げる者が多くなってきており、また「家族（親・姉妹）が卒業したので」という記述もみられる。このことは、本学創立後二十七年（昭和二年現在）を経て、卒業生も増加し、次第に「日本女子大学」が世間に理解され、評価を得てきたことの一つの現われとみられる。

また、「大正期」の場合「何か将来、社会の役に立ちたいと

表-17　学科選択の理由　(%)

		総数	その分野が好き	両親がすすめてくれた	資格・免許	家庭に役立つ	自分の適性にあう	その他	不明	無答
計		1,537	23.9	20.0	10.4	18.2	20.0	4.2	2.5	0.7
学部別	家政	364	5.2	32.7	0.3	38.7	17.6	3.6	1.4	0.5
	師範家政	565	5.1	24.8	24.1	22.1	16.8	2.3	4.4	0.4
	社会事業	111	34.2	14.4	—	5.4	27.0	16.2	1.8	0.9
	国文	284	56.7	8.5	2.5	0.4	25.7	3.9	1.8	0.7
	英文	161	59.0	3.7	8.1	3.7	18.0	4.3	1.2	1.9
	高等	26	42.3	3.8	3.8	3.8	42.3	3.8	—	—
	本科	26	57.7	3.8	7.7	—	23.1	7.7	—	—
時期別	前期	599	27.7	19.0	9.5	19.5	17.5	3.3	2.3	1.0
	中期	396	23.5	18.2	9.6	20.7	18.9	6.3	2.5	0.3
	後期	542	20.1	22.3	12.0	14.9	23.6	3.7	2.8	0.6

思って」一九・四%、「卒業後、経済的に自立したいと思って」九・〇%が挙げられ、全般的傾向として、前述の向学心と同様に社会への意欲は「大正期」の方が若干上まわっているように思われる。このことは、後述する卒業後の進路（卒業後の生活「一　卒業後の進路」参照）において、卒業後も勉学を続けた者、就職した者、社会活動に参加した者のいずれも「大正期」の方が多いことと関連があるだろう。

(五)　学科選択の理由

次に学科選択の理由についてみると（表-17）、「その分野が好きで専攻したかった」二三・九%が最も多く、次いで「両親・その他がその分野なら許してくれた」と「その学科が自分の適性に合っていると思った」がともに二〇・〇%で並び、続いて「将来の家庭生活に役立つと思った」一八・二%、「資格・免許を取得したかった」一〇・四%の順になっている。学科を選択する際に、「その分野が好き」「自分の適性」等の個人による選択理由とともに、「両親がその分野なら許してくれた」が挙げられていることは、前述の入学の動機と同様に、当時女子が高等教育を受ける際に、両親の理解と同意も一つの大きな理由とされていたことがうかがえる。

これを学部別にみると、家政・師範家政の両学部の場合「その分野が好き」を挙げる者は五%前後と少ない。家政学部では、「将来の家庭生活に

役立つ」三八・七%、「両親がその分野なら許してくれた」三二・七%を挙げる者が多い。前述のように、「両親」や「先輩」等の周囲の環境が入学動機としてみられたが、学科選択の際にも将来の家庭生活に役立つという見通しや両親の同意が大きく影響する傾向がみられる。

師範家政学部の場合は、「両親がその分野なら許してくれた」と同時に「資格・免許を取得したかった」という学部の特徴がいかされた選択理由が多い。師範家政学部では、中等教員の無試験検定資格が取得でき、前述の入学動機として、「資格・免許」が多く挙げられていたが、学科選択理由としても、「資格・免許」は他の学部に比べ、高率になっている。特に後期においては、師範家政学部選択理由の第一位が「資格・免許」である。

家政・師範家政の両学部に対し、社会事業・国文・英文の各学部では、「その分野が好き」を挙げる者が多く、次いで「その学科が自分の適性に合っている」が挙げられ、本人による主体的な学科選択の傾向がみられる。特に、国文・英文の両学部の場合は、「その分野が好き」を挙げる者が過半数を越えており、前述の「専門の勉強がしたかった」という入学動機とも関連する。

(六)　入学に際しての両親の意見

次に、入学に際しての父母の意見をみてみよう。

父親の場合、賛成している者が七六・〇%と大部分を占め（このうち積極的に賛成している者三九・三%）、反対している者は五・九%と極めて少ない（表-18）。

母親においても、賛成している者が八二・四%（このうち積極的に賛成している者四二・一%）と圧倒的に多く、反対している者は四・五%にすぎない（表-19）。

これを「大正期」と比較すると（表-20）父親では両時期とも、賛成している者が七割強と多数を占め、しかも共通

表-18　入学時の父親の意見　(%)

		総数	積極的に賛成	賛成	賛成も反対もしない	どちらかと言えば反対	強く反対	不明	無答
計		1,537	39.3	36.7	9.2	5.3	0.6	7.9	0.9
学部別	家政	364	44.2	34.3	7.4	5.5	0.3	7.4	0.8
	師範家政	565	38.2	40.2	9.2	4.1	0.4	7.4	0.5
	社会事業	111	32.4	35.1	11.7	9.9	0.9	9.0	0.9
	国文	284	37.3	36.3	9.2	6.7	1.1	7.7	1.8
	英文	161	39.1	32.9	12.4	3.7	1.2	9.3	1.2
	高等	26	42.3	30.8	11.5	3.8	—	11.5	—
	本科	26	42.3	34.6	3.8	7.7	—	11.5	—
時期別	前期	599	39.2	34.6	9.5	5.7	0.7	9.3	1.0
	中期	396	36.4	36.9	9.8	6.3	0.8	8.6	1.3
	後期	542	41.5	38.9	8.5	4.2	0.4	5.9	0.6

表-19　入学時の母親の意見　(%)

		総数	積極的に賛成	賛成	賛成も反対もしない	どちらかと言えば反対	強く反対	不明	無答
計		1,537	42.1	40.3	7.5	4.3	0.2	3.1	2.5
学部別	家政	364	44.5	39.6	4.9	2.7	0.5	3.6	4.1
	師範家政	565	45.1	41.2	6.4	3.5	—	2.1	1.6
	社会事業	111	34.2	37.8	11.7	7.2	—	5.4	3.6
	国文	284	38.0	39.1	10.2	7.4	—	3.5	1.8
	英文	161	39.1	41.0	9.9	3.7	0.6	2.5	3.1
	高等	26	30.8	50.0	15.4	—	—	3.8	—
	本科	26	50.0	38.5	—	3.8	—	3.8	3.8
時期別	前期	599	41.6	39.6	8.8	4.2	—	2.2	3.7
	中期	396	41.4	39.6	8.1	4.0	0.5	3.8	2.5
	後期	542	43.2	41.5	5.7	4.6	0.2	3.5	1.3

して積極的に賛成している者の方が多い。母親の場合も、賛成している者が両時期とも八割であるが、「昭和前期」では積極的に賛成する者、「大正期」では消極的に賛成する者が多い。このように「大正期」の場合、父の「積極的賛成」、母の「消極的賛成」と父親主導型がみられるのに対し、「昭和前期」においては、父よりも母の方に賛成する者が若干多くみられることは興味深い。

学部別では、家政学部と師範家政学部において、父母ともに賛成する者が多い。このことは、前述の入学動機や学科目選択理由の項で、「両親のすすめ」や「両親がその分野なら許してくれた」といった回答が多いことと一致する。また、時期別では、後期に、両親とも、賛成意見の増加がみられる。

次に賛成・反対の理由をみると、積極的賛成意見としては(表-21)、父母ともに「高等教育を受けさせたい」が圧倒的に多い。次いで、「日本女子大学に行かせたい」が挙げられ、「日本女子大学は寮舎教育で人間作りが大事な方針と聞くので、寮生活をさせたい」(二六回、家政)「成瀬先生の教育方針を知り是

表-20 「大正期」の入学に際しての父母の意見　(%)

		父の意見 小計	父の意見	母の意見 小計	母の意見
積極的賛成	高等教育期待型	42.3	10.2	38.3	7.3
	教養期待型		2.0		2.0
	専門的学問および技能期待型		2.5		2.6
	精神教育修養期待型		2.5		1.7
	成瀬教育期待型		1.1		1.1
	良妻賢母教育期待型		1.2		0.3
	精神的独立期待型		2.2		1.9
	経済的自立期待型		2.5		4.2
	社会活動期待型		0.8		0.5
	家名発揮期待型		0.2		—
	特に理由なし		8.3		8.3
	その他		9.0		8.5
消極的賛成	本人の意志尊重型	35.8	11.6	42.3	10.8
	配偶者が賛成するから		1.7		6.9
	特に理由なし		18.7		20.5
	その他		3.6		4.0
反対	学問不要型	9.4	2.9	6.9	1.5
	婚期心配型		1.7		2.2
	別居反対型		1.1		0.9
	特に理由なし		2.6		1.2
	その他		1.1		1.1
無答			2.6		6.9
死去			9.9		5.6
計			100.0		100.0

(資料)　前掲『大正の女子教育』

表-21　入学に際しての父母の「賛成」意見内容　（実数）

意見内容＼時期別	積極的賛成						賛成					
	父親			母親			父親			母親		
	前期	中期	後期	前期	中期	後期	前期	中期	後期	前期	中期	後期
高等教育を受けさせたい	55	42	59	48	29	44	21	28	32	16	17	26
専門的な学問、技能を身につけさせたい	4	5	9	5	5	4	2	—	4	2	1	1
高い教養を身につけさせたい	17	12	16	15	11	15	13	8	19	7	10	14
資格をとらせたい	9	1	10	6	3	9	10	4	6	12	8	9
経済的に自立させたい	17	13	21	22	17	26	11	6	11	13	6	18
将来の家庭生活を充実させたい	11	2	7	9	4	10	8	8	13	5	5	17
日本女子大学に行かせたい	19	9	20	13	13	23	5	4	12	7	6	7
精神教育を受けさせたい	4	3	5	5	4	1	1	3	—	3	3	—
親・姉妹が卒業したので	3	6	3	17	17	19	3	1	6	6	6	10
卒業生に接して	1	2	3	—	1	5	1	—	2	2	3	4
社会的活動ができるようにさせたい	5	—	1	1	—	1	1	1	—	1	—	—
社会勉強・遊学をさせたい	3	3	5	1	4	5	1	1	5	—	3	3
本人の意志を尊重	19	5	13	17	3	7	26	17	15	23	18	22
自分にできなかったので、娘に	9	—	—	20	13	16	3	—	1	4	3	11
男女とも同じ教育を受けさせる	2	1	3	—	1	3	—	1	—	4	—	—
大学に進むのは当然である	1	4	2	2	4	4	3	—	1	5	1	1
配偶者が賛成	3	1	6	3	2	2	3	1	4	15	8	6
その他	13	9	11	5	8	4	6	3	16	5	3	12

表-22　入学に際しての父母の「反対」意見内容　（実数）

		意見内容／時期別	婚期が遅れる	女子に学問は不要	手元におきたい	その他
どちらかと言えば反対	父親	前期	10	7	7	3
		中期	7	5	3	1
		後期	3	9	3	2
	母親	前期	8	4	3	3
		中期	5	5	3	—
		後期	8	6	6	1
強く反対	父親	前期	1	1	—	1
		中期	2	1	—	—
		後期	—	2	—	—
	母親	前期	—	—	—	—
		中期	1	1	—	—
		後期	—	—	—	—

非学ばせたい」（三三回、二類）、「成瀬先生の教えに心酔し、娘にも同じ教育を受けさせたかった」（四〇回、二類）、「井上秀先生を敬愛している」（四三回、一類）等、具体的記述もみられる。この他に「経済的に自立させたい」「高い教養を身につけさせたい」という理由も挙げられている。特に母親の場合は、「親・姉妹が卒業したので」や「上級学校へ進みたかったが許されなかったので、娘には好きな道を進ませたい」（三九回、二類）等に代表される意見がかなりみられ、娘の教育に対する積極的な姿勢がうかがえる。

次に、賛成意見の場合は、父母ともに「本人の意志を尊重し、希望を叶えさせてやりたい」等の理由が目立っている。特に母親の場合、「配偶者が賛成するから」といった理由を挙げる者もみられる。

時期別には、後期に、「女性も高等教育を受け経済的に自立する力をもつべきだ」（四二回、一類）に代表されるように、女性の「経済的自立」を強調する傾向がみられる。

また、「家庭にいると徴用されるかもしれない。他日、家庭の主婦となることを忘れなければ学問をすることはよい」（四〇回、三類）、「戦時下の不安定な時代なので、身につけた学問が一番の財産である」（四二回、二類）、「戦争中だったので、結婚しても未亡人になるといけないので勉強させておくのが無難」（四三回、一類）、というように、

戦時下の影響が後期に多くみられる。

このような賛成意見に対し、反対意見では（表-22）、父母ともに「婚期が遅れる」を挙げる者が最も多く、この他、「女子に学問はいらない」「手元においておきたい」等である。

以上にみてきたように、大多数の昭和前期の両親は娘の入学に際して賛成している。「大正期」と比較すると、特に母親の場合「大正期」では、「本人の意志尊重」や「配偶者が賛成するから」といった消極的賛成の方が多いのに対し、「昭和前期」では、積極的に賛成する者の方が多く、女子の高等教育に対する理解の高まり、特に、娘の教育に対する母親の積極的な態度がうかがわれる。

二　昭和前期の学園生活

では、これらの者たちは当時の学園生活で何を学び、またその教育をどのように受けとめてきたのであろうか。

この時期は、満州事変（昭和六年）から日中戦争（昭和十二年）を経て、太平洋戦争終結に至るまでの時期に当っており、教育政策の面でも戦時色が濃厚に打ち出されていた。

本学においても、創立者成瀬仁蔵のあとを受けて、第二代校長に就任した麻生正蔵の辞任（昭和六年四月）、第三代校長渋沢栄一の逝去（同年十一月）にともなう井上秀第四代校長就任、創立四十周年を記念し、女子総合大学の実現を目ざして西生田校舎の落成（昭和十七年―家政学部一・二類、国文・英文学部の一部移転）といった変動期に当っている。

また、太平洋戦争勃発後、国を挙げて戦時態勢下で、昭和十八年には、「日本女子大学生徒満州国開拓農家生活建設協力隊」が組織され、満州開拓村で勤労奉仕（家政学部一・二類学生参加）が行われたのをはじめ、十九年四月からは、「学徒動員命令」によって、海軍技術研究所・陸軍第一造兵廠・日本赤十字社・航空機関係の軍需工場等への動員が

行われた。この年から新学制により、女子専門学校も道義・人文・家政・体錬の四科目が共通科目として設定され、修業年限も四年から三年に短縮されている。

本調査の対象者である後期の卒業生（四〇回生～四三回生―昭和十七年卒業～二十年九月繰り上げ卒業）の大部分は、この渦中にあったのであり、学園生活にもその反映がみられる。しかし同時に、このような特殊な状況下においても、前・中・後期を通して〝日本女子大学〟に学んだ者としての共通の感想・意見を見出すことができる。

以下、「実践倫理」「講義」「愛読書」「自治生活」「寮教育」「学校行事」等の各面からみていくことにする。

(一) 実践倫理

実践倫理は、日本女子大学における教育の中心として、初代校長成瀬仁蔵が明治三十四年の開校当初から最も力を注ぎ、その死に至るまで担当したものである。その後、麻生正蔵（二代校長）、井上秀（四代校長）に受け継がれていく。

。麻生校長時代（大正八年～昭和六年）

「高等女学校の時、日本女子大卒の若い英語の先生から、他の学校ではあなたが考えているようなことに満足に答えてはくれないから、ぜひ日本女子大学に行きなさいとすすめられた。それで入学後麻生先生の講義をまじめにきいた。人生上の考え方、生き方・哲学あり、宗教あり、倫理学あり、日本女子大学に学んだ最大の収穫であったと心から感謝している」（二六回、師範家政）

「『物事を実践するに当って、理性のみですることは完全なものではなく、理性と同時に感情も並行するものでなければ完成するものではない』というお言葉が今もって日々あらたに胸によみがえってまいります」（二六回、家政）

「先生が『至純な母性愛こそ、宗教の心に通じるもので女子教育の根底をなすものである』と強調されたことや、天職、使命について長期にわたり話されたこと等、印象深く今なお鮮明に心に残っている。私にとって実践倫理で受け

た教えは学生生活の指針であり、その後の人生行路の尊い灯となった」（二七回、師範家政）

「先生はいつも成瀬先生をたたえられ、先生の遺訓、『信念徹底』『自発創生』『共同奉仕』を学校行事や、学生生活、国内外の時局問題に結んで、さまざまな角度から熱心に説かれました」（二七回、英文）

「田舎の女学校を出たばかりの何も知らない私は初めて広く深い世界のあることを教えられました。自分も何かを得たい。そして少しでも社会に役立つ人間になりたい。そのために力一杯努力したいと思ったものでした」（二八回、家政）

「麻生校長の訓話〝厨の窓から世界を見よ〟、家庭にあっても社会・世界をみてどうあるべきかを考えるようにとの意と思い、いつも実践したいと心がけている」（二九回、高等学部）

「時にねむくなったり、ノートの穴うめに苦労したこともあったが、今日に至るまでの家庭生活、子どもの教育、職業生活、社会生活の節を曲げることなく一つの筋を通してこられたのも実践倫理のおかげと思っている」（二九回、国文）

「学生時代はそれほど深く考えなかった信念・自発性・創造性・協同性が、家庭生活・社会生活をしていく上でいかに大切であるかを知り、創立者の未来への展望の確かさに敬意を持つと同時に、学生時代にあのような精神経験を得たことを常に感謝している」（三〇回、本科）

「麻生・渋沢・井上と三代学長が替わられましたが、先生方が、成瀬先生の教育理念を私どもに引き継がせるべく努力されたお姿は今もあざやかに蘇ってまいります」（三一回、家政）

。井上校長時代（昭和六年〜昭和二十一年）

「卒業間近に井上先生から、これからの女性は『母である前後は一人の女性として社会の為に尽しなさい』と教えられ、この言葉が今も強く身にしみて、市の民生委員とか、ボランティア活動に明け暮れております」（三〇回、師範家

政）

「先生の講義は熱弁で具体性があり、若者の心を捕え楽しかった。人間いかに生くべきかの課題を四年間の学生生活を通して与えられたことは有意義であった」（三一回、国文）

「『国内の事ばかりでなく、世界に目を向け、どこでどのような事が起っているか、世界の政治・経済に注意する必要がある』と言われたことなど、当時代の女性に対して誠に先見の目があることであったと懐古している」（三二回、国文）

「卒業後の私の生活の基盤は、すべて実践倫理で知らず知らずのうちにたたき込まれた精神教育であったと思います」（三三回、二類）

「卒業年には、軽井沢で臨済宗の間宮老師の講話をうかがったり、座禅をした。仏教と帰一教についての話など、自分自身をみつめ、人間性について考えるよい機会となった」（三三回、社会事業）

「戦中・戦後の混乱期にいろいろの出来ごとに遭ぐうしながら、価値判断を間違えることが少なかったと自負できるのも、この時間に培ちかわれた賜物であると感謝している」（三四回、二類）

「『コモン・マン（普通の人）になるのでなく、世のリーダーになれ』と言われたことが印象に残っていますが、私自身はまず〝普通の人〟になるために学び努力したいと、幼いながらに考えたように思います。それは人生にとって、私が大切にと思う謙虚さにつながっていたのかも知れません」（三五回、英文）

「禅を通してのお話が印象的。瞑想から坐禅へと実践生活、行へと関心が動き、宗教に対する芽が培われた」（三六回、一類）

「母校の三大綱領についての講話が多かった。当時はその本当の意味がよくわからなかったように思うが、今の年齢になってようやく講義の本質が理解でき、やはり感謝することが多い」（三七回、英文）

「成瀬先生に直接教えを受けられた井上先生の熱のこもった講義は、主として日本女子大学創立の意義、教育方針、女性として生涯如何に生くべきかを説かれ、他の学科の講義時間とは全く異った真剣な雰囲気があった」（三八回、国文）

「実践倫理に関する論文作成に当り、真剣に思考し内省し、文章表現にも苦心するなど、自分が内面的に高められ、豊かに成長したように思う」（三九回、国文）

「精神的な面で現在の私の人生を築いてくれたと思っております。戦後、農地開放や財産税で殆んど無一文になったとき、力強く立ち直り現在の生活までがんばってくることが出来たのも、その基盤は実践倫理で勉強させていただいたおかげと思っております」（三九回、二類）

「あの重々しい感じの講堂の壇上から、女性の自立をと説かれる先生の、常に熱気を帯びた講義は、北陸の小都市で、女子は常に控え目にと抑えられていたような高女の教育を受けてきた身に新鮮で、目を見開かされる思いがした」（四〇回、二類）

「田舎の女学校から女子大に入学し、井上先生の講義を受け、女の人でもこのように広い角度から物を見ることが出来るのかと、今までの自分の周りの人たちと比べて大変驚いた。頭の中に薄い膜がかかっていたのが、少しずつはがされていくような感じを持ちました」（四一回、一類）

「入学当初、二時間の実践倫理の時間は一寸苦痛であり、興味も湧かなかった。しかし回を重ねるごとに私の心の中に宗教に対する渇仰の思いをふるいたたせていただいた。明治天皇御製〝目に見えぬ神の心に通うこそ…〟で始まるこの時間は、私の生涯にくさびを打ちこまれたように、人生そのものに対する見方を根底からゆさぶられ、やがてキリスト信仰へと導かれていったのだと思います」（四二回、英文）

「既製宗教によらない広義の宗教心、宗教知識をさずかり大変興味深く、広い講堂の前の方に席をとる為、朝早く登校したのを覚えている」（四二回、二類）

「井上先生が、『これからの女性は今までのような良妻賢母だけでは駄目で、自分はこれだけは誰にも負けないという専門的なものを持つように』と、今風に言えば、心身の自立の教えとも思われるお話を再三してくださったことが印象に深い」（四二回、二類）

「学生時代よりも、卒業・終戦・引き揚げという生活の中で、〝生きる〟ことを考える時、実践倫理の講義が支えになっていることを感じた」（四三回、三類）

「実践倫理の講義で現在に至るまで、絶えず忘れなかったのは、井上先生が度々力説された〝明鏡止水の境地〟であり、また、『私は、いたずらにほめそやされても動じない。自分の力を知っているから』という講話であった」（四三回、二類）

「この時間に学んだ『信念徹底』『自発創生』の教えは、自分個人の人間形成に役立つ精神教育だったと思います。また『共同奉仕』という事で、他者との交わりの中で如何に自分自身が生きていくかということについて、若い時代に多く学んだことは、自分のことしか考えないで生きて来た私の生涯に大きな影響を与え、今に至っています」（四三回、二類）

「学生時代は、余り積極的な態度で学習しなかったが、社会に出て結婚し、子どもを育てる段階で、今更のように成瀬先生の〝三つの教え〟の偉大さを痛感し、母校の教育方針が現代においても変わらない真理であると誇りに思っている」（四三回、二類）

「週一回の実践倫理の時間が、人間について、人生について、その後の自分の生き方について、また社会的な視野を広げる点について決定的な土壌となったことは否めない。私の人生の出発点であり、その後の社会生活の中で転機に立った時、いつもあの時に帰納して考え直す判断の基礎になっていると今になって思う。特に井上先生のお姿が思い出される」（四三回、二類）

「男性優位の世に、女子教育の必要を説き、女子を人間として自覚せしめる教育がなされたことはすばらしいことであった。時にかたくるしい、難解な言葉もあったが、やっと少しわかりかけてきたように思う。高い理想にはなかなか到達できないが、一生涯学びつづける心を育てられたことは限りない感謝である」（四三回、二類）

この時期、麻生・井上校長とともに実践倫理を担当された方に渡辺英一・大橋広氏がある。渡辺英一教授については、「先生の講義は人間及び人生について深く考えさせられ、教えられるところが多くあった」「先生が話された道元禅師の葉がくれの精神に深く感銘した。この時間、月曜日の一時間目は身の引きしまる思いで講堂の入口から入った事を今でも覚えている」「先生がとつとつと心の問題・信仰・宗教等についてお教えくださいましたことが、後々の生活で、あんな話もあった、こんなことも言われていたと思いあたる事が多く、授業中は時にむずかしく思ったこともありましたが、年を経るにつれて思い至ることが一杯あり、先生のお顔を思い出しております」

「人対象の生活をせず、神仏対象の生活をするようにとのお教えは、対人関係で苦境に陥った時に心のより所となっています。親鸞上人の〝善人往生す、まして悪人においておや〟との教えの深い意味を問い続け探り続けております」

また大橋広（第五代学長）氏については、「印象、構成、発表――見たこと、聞いたこと、読んだこと（印象）は頭の中でまとめて（構成）発表してはじめて自分自身のものとなる――という講話が後々まで心に残り、自分のいましめとしています」「先生が身を乗り出して語られた体験からにじみ出る熱意ある講義が印象深い。何もわからなかった自分も、哲学的なものの考え方・人間観・人生観・人間らしい在り方等々、内面生活への眼を開かせていただいた。単なる専門科目の注入に終わらなかった学生生活をふりかえり、日本女子大に入学できたことを喜んでいる」「先生から婦人の使命について、婦人の人格を認め、その独立を助けるための教育の必要性について、また経済生活の大切さについて教えられたことが、今日の自分を支えている」といった声が寄せられている。

反面、「漠然としてとりとめがなく、学問的な系統性に欠けているように感じられた」「正直にいって退屈、若い躍動する心に応えてもらえないといったもどかしさを感じたこともあった」「今では日本女子大の教育の一つの特色をなすものと評価しているが、当時は修身の延長のように受けとり、ただ聞くという程度であったことを残念に思う」「冬は寒く暗く、夏は暑い講堂、けんめいにノートを取ろうとしても先生のお声がよくききとれず、内容が書けないこともあった」「講義が観念的で、生活と直結したものではなく、〝実践〟という命題からは少々かけ離れていたように思う。もしあの時間、種々の方面で実際に活躍している方々のお話を聞くような機会があったら、もっと身近なものに感じられたのではなかろうか」「成瀬先生に直接教えを受けた先生方から、感動をもって伝えられたことは大きな影響力があったと思う反面、成瀬先生へのお気持がほとんど信仰に近く、そのことが逆に、私どもが成瀬先生を直に理解する妨げになっていた面もあったと思う」「創立者を偶像視されていたのが残念であった」といった声もきかれる。

特に、講義方法については、「全学の一せいの講義でなく、もっと小人数で話し合える形式の方がよかったと思う」「全員がはつらつと参加する方法を考えるべきだったと、当時の自分の力のなさを反省している」「ゼミナール形式でもっと身近に先生を思い、こちらの質問がじかに投げかけることが許されたらどんなにすばらしかったかと思う」「大切な時間だったと思いますが、更に興味深い時間にするために学内の先生方のみならず、学外のそれぞれの道の先達・宗教家・芸術家・社会事業家等にお話をしていただき、また卒業生の中からも自分の体験を語っていただくようなことができたらよかったと思います」という感想が出されている。

また後期になると、「卒業の年、昭和十六年十二月に太平洋戦争が始まり、その月に卒業、その頃になると、〝海ゆかば〟等の合唱指導が多くなった」「学業半ばで学徒動員となり、学校工場や工場へ出かけ、ある面では好むと好まざるとにかかわらず戦争へ協力するという形で青春を過した。戦争中であり、〝生きる〟とはどういうことかに悩み、

入学時より自分の生というものを深く考えるようになった」「戦局が次第に苛烈になり、工場等に出るようになってからは、週一度のあるかないかの講義の時間がとても待ち遠しく、一分一秒ももったいないような気がし、先生方のお話も今まで以上に身にしみて拝聴した。長い時間も気にならず、ひとときの安らぎを得る思いであった。井上先生が『今は非常時で貴女方に満足のいくような学問をさせることができない。知識に飢えている皆さんを見るのはしのびない』と言われたことがいまも心に残っている」といった雰囲気の中で、「国家総動員のもと、自然、実践倫理においてもその影響を受け、内容もその方向に進んでいったように思われる」「戦時中であり、小我を捨てて大我に就くということを強く教えられた」「自己を捨て、国家のために奉仕することに意義を見出した」「聖戦の意義についての講義が多かったと思う」「戦争が激化し、国家の為に生命を捧げるという方向に進んでいったと思う」「次第に言論・表現の自由が許されなくなり、重苦しい雰囲気がただよい始めていた」といった状況がみられるようになる。

しかし、このような中にあっても、なおそこには、「個人としての使命観に目覚め、女性として、社会人として、日本人として、信念を持って、役割を果せるよう、各自の能力を開発し、個性を持つようにと教えられた」「戦時カラー一色の地方の女学校を出た者にとって、女子大の教育というよりも、個人を束縛しない大学の雰囲気に何となくなじみ切れず、実践倫理の講義がピンとこなくて困ったことがはっきり想い出されます」といった感想にみられるように、〝個〟を尊重していこうとする努力があったことがうかがわれる。

(二) 講　義

昭和前期の本学の講義をとりあげるについては、昭和六年の学制改革以前は大正期の延長と考えられるので、ここでは改革以降の講義を中心にみていきたい。

〈注〉 昭和六年の四月より実施された新学制は、従来の専門学部と高等学部および大学本科との二系列を排して、再び専門学部に一本化され、家

政学部第一類（従来の家政学部）、家政学部第二類（従来の師範家政学部）、国文学部、英文学部、社会事業学部の五学部で構成された。

当時は、まず各科共通の必修科目として、実践倫理・体操・心理学・倫理学・哲学・宗教哲学・公民学（ただし社会事業学部は、演習で公民学が課された）が開講されていた。そして各学部ごとに主専攻科目及び基礎科目があり、さらに副専攻科目及び自由選択科目は他学部の科目並びに次の科目中から選択履修できた。

教育学概論・教育史・教授法・児童研究・哲学概論・哲学史・美術史・宗教学概論・宗教哲学・現代哲学思潮・文学原理論・言語学概論・近代文芸思潮・本邦史・東洋史・西洋史・経済学概論・本邦法制・社会学概論・人類学・代数学・幾何学・三角術・解析幾何・微分積分・物理学・化学・生物学概論・生理学・家庭博物学・園芸・裁縫・礼法・手芸・料理・英語・独逸語・仏蘭西語

科目選択制度は、大正六年実施のものとほぼ同様であるが、各科共通の必修科目では大正期にあった国語と英語が昭和前期ではなくなり、新しく哲学・宗教哲学・公民学が開講されている。

各学部の主専攻科目及び基礎科目は次の通りである。

。家政学部第一類

英語・経済学・憲法民法大意・美術史・家庭物理学・家庭化学・家庭生物学・家庭黴菌学・衛生学・生理学・児童心理・家庭教育・家政学（衣服研究・住居研究・食物研究・育児・養老及看護・経済及管理・家庭管理演習）・料理

。家政学部第二類

国語・英語・経済学・数学・物理学・化学・植物学・動物学・家庭黴菌学・生理学・家政学（衣服研究・住居研究・育児・食物研究・養老及看護・経済及管理）・料理

。社会事業学部

英語・社会学・経済学・憲法民法大意・統計学・日本思想史・経済思想史・近世産業史・社会事業・社会政策・社

会心理・社会衛生・社会問題・選択専攻（児童心理・育児学・家庭教育・家庭管理・変態心理・児童保全・産業福利・労働法制・職業指導・家族研究・近世文化史・美術史・教育思想史・教育学・教授法他）・演習・実習

しかし、昭和八年に改組されて家政学部第三類になり、課程が三年に短縮されたのに伴い、講義では経済思想史・近世産業史がなくなり、新たに家政学（衣服研究・住居研究・食物研究・育児看護・経済管理・料理）および児童研究が加わった。また従来の選択専攻科目はなくなり、専攻選択科目として、社会事業見学・社会事業実習、自由選択科目として、宗教哲学・哲学史・教育学・家庭教育・美術史・英語等があげられている。

。国文学部

英語・国語学概論・国文学概論・作文修辞・国文法・現代国文学・近世国文学・中世国文学・上代国文学・国文学史・漢文・支那文学史・有職故実・本邦思想史等

。英文学部

国語・英語読解・英語文典・英語作文・英語発音・英語読方書取・英語会話・英文学・英文学史・英文学評論等

では、これらの講義を受けた者たちの講義に関する全般的な印象や感想・思い出などについてみてみよう。

「各界のオーソリティでいらっしゃる教授より、直に講義をうかがうことができました」（二六回、家政）、「東大・慶応・早稲田などの先生の講義が多く高い水準であった」（三七回、一類）「講師陣にずいぶん立派な教授が揃っており、いい講義が受講できました」（四二回、三類）、「各学科の講義はすばらしい先生揃いで充実していた」（二九回、国文）、「それぞれの分野の第一級の先生方の教育が受けられまして、感銘深い講義が沢山ございました」（三五回、国文）などのように、すぐれた講師陣、あるいは講義の水準の高さを評価した感想が綴られている。

また、「どの講義も知識欲に燃えた私には興味深く、また先生一人一人のお人柄が伝わってきて楽しかった」（三九回、一類）、「諸先生方が学科以外にも人間としてのあり方について有益なお話をしてくださり、それが今日でも大変

役に立っている」（四三回、一類）、「どの科目も造詣深い先生方の講義で、学ぶことの喜びと、講義を通してにじみ出る人柄にふれられ学生として最高の幸せだった」（二七回、師範家政）、「講義の合い間合い間にさりげなく話された含蓄あるお言葉に哲学的な匂いを感じとり、それが人間教育につながり得たことを幸に思います」（二八回、師範家政）、「教授の先生方が一流の方々ばかりでしたので講義は勿論完璧なものであり、人柄からの人間的感化も素晴らしいものがあったと思っております」（三七回、国文）、「よい先生方に接し得、戦争中でも進歩的思考を持ち得て楽しかった。学者として誠実に生きておられる諸先生方から多くのものを学び得た」（三九回、国文）、「専門の一流の先生のなさる講義に、学問に対する情熱をかきたてられた」（三八回、英文）、「単に講義だけでなく、それぞれの先生方がそれぞれの人格からにじみ出る話を折にふれてしてくださいましたので大変楽しい授業が多く、一時間一時間が大変貴重なものだったと思います」（三九回、英文）といった講師を通して学ぶ喜びを知り、人格的な感化を受けた感動が記されている。

さらに「どれも最高の先生方の講義で、衣・食・住に関してその後家庭を持って非常に役に立っている」（四二回、一類）、「家政学部の講義により、実際、主婦として考え方の根本に論理の裏づけを持つことを教えられた」（四三回、一類）、「専門的な講義は程度も高く、充分に理解されなかったところもあるが、併しそういうものの総ての漠然とした積み重ねが長い人生の人格形成に役立ったと思う」（三〇回、師範家政）、「家庭科という広範な学科を基礎から教育されたので勤めてからも何とかやれました」（三三回、二類）、「一流の講師による講義は立派なものだった。その自信が現在の自分を支えているのだと感謝し、誇りに思っている」（三八回、二類）、「社会事業学部の新しい学問により、急に社会を見る目が広くなった。現在の私の仕事は学生時代に学んだ事が原点になっている」（二六回、社会事業）、「日本古代史の講義でそれまで小学校・女学校で習った神がかり式な説でなく科学的な説明を受け、戦時下の当時としては深く感銘を受けた。以後私の思想的な基盤となった」（三八回、国文）などのように、諸講義が卒業後の家庭生活や

職業生活・社会活動の面で役立ったこと、さらには精神的な面でも影響を受けるなど、卒業後の生活に様々な形で役に立っているという感想や思い出が数多くみられた。

その他には「自由選択が専門科目の外にかなり幅広く取れたので良かった」(二九回、家政)、「学科の自由選択ができ学びたいもの、教えを請いたい教授に接する事ができたのが一層講義への興味を深め得たと思います」(三九回、一類)といった学科目の自由選択制度を評価する意見、「つめこみ主義でなく、自主的な勉強を重んずる教育だった」(三二回、二類)、「目白特有のものではなかったか、時々講義からそれては本校の精神教育にふれておられたように思う。人間形成を非常に大切に導いて頂いた」(二七回、家政)などの感想・意見がみられた。

このような本学の講義に対する肯定的な意見・感想に対して次のような印象を抱いた者も一部に認められる。「家政科という大まかな学部で、専門的に分割されていなかったので講義が浅く、物足りなかった」(二八回、家政)、「私共の時代は広く浅く教えて頂いた様に思います。もう少し専門的に学びたかった」(三二回、二類)、「専門的に充実した内容に欠け、中途半端なことは残念でした」(三七回、三類)、「専門教育としては貧しかったと記憶しています」(三九回、国文)などの意見のように、専門教育の不足、学問のレベルに対する不満、あるいは「女子の学校だというので、講師の先生が程度を下げて講義なさるので憤慨したものです」(三三回、二類)、「いったいに先生方がいわゆる〝お嬢さん〟として扱っておられて、学問をする者としては期待していらっしゃらないのは不満であった」(三九回、国文)などといった外部の講師の女子に対する教育姿勢への反発がみられる。その他には、ゼミ形式の少人数講義が少ないことへの不満、とりわけ後期の学生数急増に伴うマンモス講義への批判などがあげられる。

こうした講義の受け止め方は、大正期の卒業生の場合と似た傾向にあり、少なくとも、昭和前期の戦争の影響がそれほど強くない前期・中期においては大正期とそれほど大きな違いはみられない。

このような全般的な傾向に対して、学部別では社会事業学部や英文学部、さらには高等学部、大学本科などに他の

学部とは多少異なった感想・意見がみられた。

社会事業学部（家政学部第三類）では、本学部に学んで全く新しい分野の学問に目が開かれ、その驚きや感動を「当時の家政学部三類の科目は女学校ポーッと出の者にとって聞くことすべて新しく、とまどいさえ感じました」（三七回）、「日本でも有数の先生方の御講義が興味深くうかがえ、また学問の全く新しい分野に目が開かれたことが印象深く残っています」（三九回）などと綴る者が多い。また「社会学・経済学・社会問題などの講義により、閉鎖的だった日本の社会の現状と問題を勉強できたことが、将来社会活動をするうえで大変役立った」（二六回）などの感想にみられるように、そうした諸講義が職業や社会活動の面で役立ったとする者、あるいは人生を充実させたと述懐する者、さらには本学部の講義を「根底をなすものは人間性重視であった」（四二回）と高く評価する者もある。その他には「三年の社会見学は非常に有意義だった、〝百聞一見にしかず〟で精神病院・貧民街の見学やお話等が強烈な印象として残っている」（四二回）といった感想のように、本学部独特の見学や実習を通して直接社会に接し、そこで得た貴重な体験あるいはその感動を深く心に刻んでいる者もみられる。

こうした感想や意見に対して、家政学部第三類になって、専門教育としての総合性・一貫性に欠けたのではないかと指摘する意見や社会科学の科目と家政学の混合に疑問を投げかける声も一部にきかれた。

英文学部では、他学部に比べて学生数が少なかったことが講師と学生との間のコミニケーションのよさ、学習環境のよさを生み出しており、「英文科の授業及び講義は少人数の為か大変明るく楽しかった」（三二回）、「予習に追われ学習が忙しかったが、各々の個性的な授業で向学心を覚え、学問の世界の深さと広さに興味を感じた」（三三回）等と述懐する者がみられる。また中期以降は学園生活にも徐々に戦争の影響が強まるが、そうした状況の中でも「英語は敵国語というので学ぶ事に批判の目のある時でしたが、いつも将来に目を向けて大らかな気持で勉強できましたのは、当時の先生方の正しいお考えによるところのものと思い、今でも感謝しております」（三九回）などの記述のように、

戦時下であっても悲観的あるいは消極的な意見・感想は極めて少ない。そこには前述の思い出の中にも綴られていたように、広い視野に立ち、将来に目を向けて学生を指導された講師たちの識見・態度が学生たちに大きな影響を及ぼしたものと推察される。

昭和二年五月、成瀬校長以来の強い意向であった女子総合大学設立の期待の中に、まず高等学部が開設された。高等学部は文科・理科の二部からなり、修養年限はともに三年で大学本科に続く課程として発足した。さらに昭和五年高等学部の課程を終えた者たちを中心に大学本科が発足した。大学本科は文科（国文学部・英文学部）及び理科（家政学部・化学部）より成った。

しかし、高等学部及び大学本科の募集は、女子総合大学に対する理解が一般的にみて未だ熟さず、時期尚早であったことによる様々な理由から、四回生で打ち切られた。

「片田舎の高等女学校四年修了だったため、男子高等学校一年の教科書は二段階位高度で、脱落しなかったことが不思議に思われます」、「高等学部第一回生にて、よき教授陣に恵まれ、どの学科も素晴らしかった」、「知識欲に燃えておりましたから、極めて熱心に学びました」、「高等学部で基礎学力をつけ、大学本科で専門科目への関心を深めた」などのように、新しく開設された学部に学び、専門教育への強い関心と意欲に満ちた感想が多くみられる。

しかし同時に、「大学部（大学本科）に進むころから、大学内が二元的になるという理由で学内の意見がわかれ、学部廃止の方向が決定した。当然の結果として軽視されがちであった」、「大学本科一年生の時、学部廃止に抗議して一週間授業を拒否した」などの思い出にみられるように、学部廃止が学生たちに与えた影響の大きさがうかがわれる。

次に、時期別にみると、特に後期に戦時下の教育の影響が強くうかがわれる。

「例えば〝住居〟大変に魅力のある楽しい講義でしたが、戦時色が濃くなるにつれ、三学期は戦時統一規格のパンフレットを写すなどということになってしまいました」（四〇回、一類）

「料理実習など材料がなく、いずれも代用品でそれらしく勉強させていただきました。先生方の情熱は身にひしひしと感じました」（四二回、一類）

「入学時一年間は割合に時間通りに授業が受けられましたが、その後は軍事教練や防空演習のため満足な講義は受けられなかった。講義内容もあまり戦時下という名に左右されない生物とか理科系は教科書通りでしたが、その他はその時々によって違った内容だった」（四二回、一類）

「三年の時から戦争が激しくなり、半年で三年の講義、後の半年で四年の講義、四年は学徒動員で学外に勤務せざるを得なくなった。何かどれも中途半端な勉強しかしていない間に、卒業証書と教員免許状だけ与えられたという気がする」（四二回、二類）

「戦争が激しくなり、学校工場や動員で落着いて勉学した期間が余りに短かった。しかし、英語がだんだん排斥される社会情勢の中にあっても英語の授業数が多く、その事が後に社会に出て仕事を持った時に大変役に立ち感謝している」（四三回、一類）

「家政科として料理実習なども充分でなく、唯単なる講義に終った事も多く、いろいろな面で専門学校らしい学びが充分にできなかった」（四三回、二類）

このように戦争の激化と学園の戦時体制化の中で、回生を追うごとに戦争の影響を強く受け、防空演習や勤労奉仕さらには軍需工場等への勤労動員の徹底強化により、ついには学業よりも動員生活が中心となっていく様子がうかがわれる。同時に、講義時間の短縮、教材の欠乏、講義内容自体も戦争の影響をまぬがれなかった異常な教育状況の中に在学した者たちの、無念さ、嘆き等が感じとれる。

しかし、こうした苛酷な状況の中にあっても、講師たちの学問、あるいは教育に対する熱意・信念を学生たちが強く受け止めていった点も注目すべきであろう。

「戦時中であったが、佐藤武夫・大岡蔦枝の両先生ともほとんど戦争に関係なく独自の講義をされた」（四二回、一類）

「戦時中で教材も不自由な中、先生方が苦心して教材を集め、戦前並の教育を努力して下さったが、後には防空訓練・消火訓練・西生田開発で授業も成り立たず、反米思想一色の世相の中で堂々と〝良いものは良い〟と指導された事は本当に良い思い出であり、お陰で戦後海外に出て遜色無い生活・活動ができたと感謝している」（四一回、二類）

「専門科目の講義では戦時下とかかわりなく正規の講義が受けられた。漢文で長恨歌など、また源氏物語の中には戦時下にふさわしくない部分もあったが、担当の先生はあえて当局の指示にもかかわらず講義を続けられた」（四一回、国文）

「歴史が好きで入った国文学部でしたが、すべてが伏せられていた戦時下に学ぶ者として矛盾と葛藤の中に、西岡虎之助・中村孝也先生の講義に没入していった自分を覚えている」（四二回、国文）

「動員で工場に通っている時、週に一度（後には月に一度）帰校日があり、福原麟太郎教授の英文学史の講義を受けました。この次再び一同顔を揃えることができるかどうかわからない時の先生の講義は熱がこもり忘れることができない」（四三回、英文）

このように戦時下にあっても、いや戦時下であったが故に、良き師との出会いがより一層深く心に刻まれ、卒業後の生活にも反映していった様子がうかがわれる。

ところが昭和十七年に、家政学部第三類で「社会政策」を担当されていた永井享教授が突然退任された。その理由は、戦時下に敢然と民主主義を講義されたためであったという。

「忘れられないのは、戦争の為か日本帝国主義の為かは存じませんが、社会政策を担当されていた永井教授の授業が途中から無くなり皆をがっかりさせた事でした。私共は学問として学びたいと思ったので、善悪は別として講義がなくなったのは残念でした」（四一回、三類）

「当時は例えば労働法はドイツ法というように限られた範囲の講義であったため、自由主義について講義された永井先生の授業に反発し、授業を中止させるということがあった。卒業後省み、閉ざされた時代の恐しさを感じるとともに自戒にもしている」（四一回、三類）

このように、学生の心に深い痛みを残した悲しい出来事もあった。

〈講師について〉

講義の思い出は講師の思い出でもある。既に講義のところで、良き師との出会いが戦時期をも含めて生き生きと綴られていた。昭和前期の本学の講師陣の顔ぶれをみると、第四代校長井上秀をはじめとする本学出身の講師が大幅に増加している点が注目される。

では、印象に残った講師として比較的多くの者があげた講師について、枚数の許す範囲でその思い出や感想をひろってみよう。

。井上　秀

「新しい時代の家庭生活のあり方、特に家庭管理と人間関係について興味深く伺った。後年農家の生活指導の仕事についた私にとって大きな支えとなった」（二六回、家政）

「先生の講義には御気力が満ちあふれ、空論でないが故に大きな引っぱる力と魅力があった」（二七回、家政）

「食物講義が印象的で、長い一生のうち食に対する前向きの研究心を培われたように思います」（二八回、家政）

「昭和の初めから女子の家事労働を高く評価していらしたので、最近になり色々な面から認められてきたことを嬉しく思っております」（二九回、家政）

「先生の家政学で〝一坪の台所〟についての講義が珍しくて印象的であった」（二九回、師範家政）

。大橋　広

「先生の生物の講義は学究心についての決意を起させ、集中力の必要性を痛感させた」（三二回、二類）

「先生の講義がとても熱っぽかったことで勉強に意欲がわいた」（四〇回、二類）

「厳しい態度で学生に対されましたが、通り一辺の授業でなく〝ほとばしり出る〟といった熱が感じられ、勉強しているという実感に包まれてうれしかったことが忘れられません」（四二回、二類）

○氏家　寿子

「家庭管理は家庭の主婦であられた先生の最も具体的・現実的なお話でよく理解できました」（三八回、二類）

「先生の歌うような美しい講義が楽しかった」（三九回、二類）

「先生の美しいお声と人をひきつける名講義が印象深い。今若者の前に立って指導する場合にも大いに参考にさせていただいています」（四一回、二類）

○丹下　梅

「小さな体で教壇を歩きながら、〝学ぶことはまた楽しからずや〟とおっしゃった言葉は、生涯を学問に捧げた先生の崇高な人格をそのまま表現していて心を打たれた」（三八回、二類）

「先生のひたむきな化学に対する愛情ある講義が印象に残っている。理化学研究所での発表を伺いに行ったことなども思い出される」（四一回、二類）

「先生の学問が、勉強することが大変好きでたまらぬという心から発するテレパシーのようなものを強く受け感動しました」（四二回、二類）

○東　佐誉子

「フランスで伝統の料理を研究され帰朝されたばかりの先生の講義と実習は私の将来（料理研究）を決定づけた。先生からはよく叱咤されましたが、その愛情により今日を結実したと思います」（四〇回、二類）

「料理の心構えを身をもって教えて頂き、料理をすることを通して精神教育も受けた。洗練された味、盛りつけ等も私を現在の仕事に就かせた原動力となった」（四〇回、二類）

「開戦の頃の物資不足の中で、あれだけの高い料理文化を身を以て教示してくださった先生に深い尊敬の念を覚えます」（四〇回、二類）

「先生のフランス料理はこわいこわい授業でしたが、人の道を料理を通してたたき込まれました」（四一回、三類）

「先生のフランス料理は本物志向と周囲に迎合しない一本筋の通った講義だった。料理よりも女とは、人間とは如何にあるべきかを学んだことが印象深い」（四二回、国文）

。高橋誠一郎

「講義で一番印象に残っているのは経済学の高橋誠一郎先生の講義で、難しかったのですが理解しようと一生懸命でした」（三九回、二類）

「先生の経済学概論の講義が面白く、余談としてのギリシャ神話や美術論が今も心に残っています」（四一回、二類）

「経済学の高橋誠一郎先生の講義の面白さは今でも忘れられません。芸人のような正確さで、よどみなく話される講義には今までの先生にはみられない魅力があり、目をみはる思いでした」（四二回、二類）

。綿貫　哲雄

「先生の社会学は本当に素晴らしうございました。〝生きる指標〟をこの講義で得たように思います」（四一回、三類）

「先生の社会学の講義で〝一隅を照らす、これ人生なり〟の言葉が今もなお心に残っています」（四二回、三類）

。生江　孝之

「社会事業研究で日本と諸外国を比べ、まだ戦時中の日本の社会福祉・社会事業の貧困と矛盾を声をつまらせて訴えられた様子が今も脳裏に残っている」（四一回、三類）

「社会事業でその時その時の講義が生徒に訴えるように、ある時は涙を流され社会の歪みを憤り、心を痛められ、切々とお話しくださいました。社会事業教育への強い信念のもとにこの教育を支えてこられた先生に深い感銘を受けた」（四三回、三類）

。茅野儀太郎

「先生の文芸思潮の講義には大学生になったという自覚を持った」（二八回、国文）

「文芸思潮では、日本文学のみでなく広く世界の文芸思潮についても目を開かせていただいた。同じく先生の文学演習では戯曲を通して人間をいろいろの角度からみるという方法を学び、これはその後の生活にも大変役に立ちました」（三八回、国文）

「文学作品の観賞についてのお講義では、小説の読み方、見方、考え方について初めて教えていただいた様に感じ、人生への指標を与えられたような気が致しました」（四〇回、国文）

「先生の選択科目は四〇年の昔と思えぬ程内容が充実していた。如何にも大学に学んだという雰囲気が鮮明に思い出される」（四一回、国文）

。上代　たの

「アメリカから帰られて三年からアメリカ文学を教えて頂きましたが、熱がこもり今でもその頃の心のおどったのを思い出します」（二七回、英文）

「お講義は潑溂としていて、新しい知識を次々に注ぎこまれた。時には少々怖いと思ったこともありましたが感激でした」（三二回、英文）

「アメリカ詩の時間が印象に深い。先生ご自身が編さんされたテキストでアメリカの最新の詩人とその作品を知ることができ、しかも授業は、アメリカのカレッジの方式で学生の自主的な研究に重点を置かれた授業であった。ポー・

フロスト・ロングフェローなどの詩は、その一行一行のラインが今でも鮮明にうかんでくる」（三二回、英文）

「先生の時間の緊張感はさわやかであり、自分の頭で物を考えるようにという先生の教育とその姿勢から深い感銘をうけた」（四〇回、英文）

㈢　愛読書

次に、昭和前期に本学に学んだ者たちが学生時代にどのような本や雑誌を手にしたか、特に愛読したものについてみてみよう。

書物では、現代日本文学全集と世界文学全集が最もよく読まれている。このなかには、夏目漱石（坊ちゃん・虞美人草・こころ）、島崎藤村（破戒・詩集）、森鷗外、芥川龍之介、倉田百三（出家とその弟子・愛と認識との出発）、トルストイ（戦争と平和・アンナ＝カレーニナ・復活）、ドストエフスキー（罪と罰・カラマーゾフの兄弟）、パール・バック（大地）、モーパッサン（女の一生）、ジッド（狭き門）などが多い。次いで、石川啄木、横光利一、山本有三、菊地寛、国木田独歩、西田幾太郎（善の研究）、阿部次郎（三太郎日記）、ツルゲーネフ、ゲーテ（若きウェルテルの悩み）、ロマン・ローラン、バルザック、ヘッセ、ショーロホフ（静かなドン）、マルタン・デュ・ガール（チボー家の人々）、スタンダール（赤と黒）などがあり、その他哲学書・宗教書等が挙がっている。

国文学部の場合には、この他、戯曲（イプセン・近松もの）、万葉集、源氏物語、平家物語、新古今和歌集なども挙げられ、また、樋口一葉、有島武郎、泉鏡花、志賀直哉、梶井基次郎、堀辰雄など他の学部に比べ多種類に及んでいる。

書物に比べ、雑誌を挙げる者は少なく、特に後期は、その傾向が強い。これは、昭和十九年に『婦人公論』『婦人新報』等が廃刊となり、婦人誌は『主婦の友』『婦人倶楽部』『女苑』の三誌となったことも影響していると思われ

る。雑誌名では、『中央公論』『婦人公論』『婦人の友』『文芸春秋』『改造』等が挙げられている。「大正期」と比較すると、両者に特に大きな相違はみられない。戦争という特殊な社会状況のもとでも、学生時代の読書の傾向には大きな変化が現われていないように思われる。

㈣ 自治生活

自治生活は日本女子大学の教育の一大特色をなすものである。成瀬仁蔵の「自学自習主義の教育」の具体化として「自ら為し、自ら治むる生活」、他者との「共同生活を円満にし且つ共同関係の中に独自の生活を保持する」（成瀬仁蔵『新時代の教育』大正三年刊）教育方針に基づき、創立当初から学生自身の手によって、自治組織が設けられ、次第に全校的組織となり、最上級生が全責任をもって統率する自治生活が形作られていった。学年始めの自治計画発表会・学年末の自治生活結論会・毎週木曜日の午後のクラス会及び修養会・係の会・学部ごとの縦の会・学年別の横の会・毎週一回の瞑想会などの会合から、運動会・研究発表会・展覧会・音楽会・遠足などの行事まですべて学生の手に委ねられていた。学生は四年間の自治生活を通して、「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の三大綱領を身をもって経験していったのである。

自治組織は大正十二年に設けられた連絡機関としての委員制度により、各学部・学年・学級の連絡が円滑になされるようになり、また、瞑想会・修養会・夏期修養会などの修養機関も整備され、信念涵養に資すべく各種の会合が活発にもたれていた。各係（研究・経済・編集・体育・整理・趣味・隣保事業・国際連盟協会学生支部係等）の会も活発になり三年生が中心となって、各種の学校行事の計画を立案し、諸機関の検討・決定を経て、新学期に自治計画発表会を開き、全校に展開されていった。このような係の活動の一例を挙げれば、「編集係」は、昭和六年度からハンドブック（自治活動のための学生手帳）を作成し、昭和八年度からは卒業アルバムの編集にあたり、自治生活記録に携わり、また

家庭週報の学生欄をも担当した。「研究係」は成瀬仁蔵の自学自習主義に則り、研究的生活の充実をはかるために研究発表会を開催し、各学科での研究活動が盛んに行われた。国文学研究会（昭和十一年）等この時期に成立した研究会の数は多い。「趣味係」は、和歌の会・音楽会・絵画展覧会等を開催し、また昭和十年度に校章を制定し、合唱団を結成した。「隣保事業係」（昭和十四年以降は隣保係）は社会事業学部（二六回から三二回）・家政学部三類（三三回以降）の学生が主体となって、近隣社会に働きかける係であり、子ども会・母の会の開催・桜楓会託児所の手伝い等を行った。

昭和十二年の日中戦争を契機として、十三年の国家総動員法公布など、満州事変（昭和六年）以来、戦争遂行のため国家をあげての組織化がすすめられるなかで、本学においては、昭和十五年十一月に「日本女子大学校報国団」が新たに組織され、翌十六年二月に結団式が行われ、ここに従来の自治組織は大きく変容を遂げることになった。報国団は、大政翼賛機構の組織に基づいて、従来の係制度を改めて班組織とし、教職員と生徒が一体となって集団活動を行うよう組織され、六部（総務・文化・生活・鍛練・国防訓練・奉仕）に分かれている。「鍛練部」は勤労奉仕作業の他、各種体育運動による身心鍛練・保健・衛生の企画・指導を行った。「国防訓練部」は、防空・防火・救急・看護・炊爨（炊き出し）等の諸種の集団訓練を行い、国防的訓練の企画指導の他、本校特設防護団の常務をつとめた。各部において会合がもたれ、学年末に次年度の計画立案のための協議会を開き、新学年のはじめに計画発表会を行い、毎週木曜日の午後は報国団の計画の実行や修養会にあてられ、年度末の総会で一年間の反省を行った。

このような報国団体制をとることで、学生生活は国家総力戦態勢に即応するものとなっていった。昭和十六年一月井上秀校長は、大日本青少年団の副団長に就任し、今後「女子大学校の教育はさらに社会に拡大して全国青少年に及ぼす」と述べ、社会に対する奉仕活動が報国団活動に組み込まれ、盛んに行われた。一例を挙げれば、西生田地区で、農繁期に託児所を開設したり、共同炊事の指導・協力を行い、銃後農村に対して積極的に援護活動を行った。当時の

農村の労働力不足は甚しく、共同炊事や託児の必要は生産確保の上からも重要であった。このような状況下にあっても、援護活動と同時に総合的な児童研究を行うなど研究体制は、辛うじて維持されていた。昭和十八年には国内態勢強化方策が出され、女子の動員が強化され、学校工場の先駆けとなる戦闘配置が本学にでき、作業が開始された。十九年に入ると四年生の勤労動員が始まり（四月）、九月には一年生の動員も開始されるなど、全学生皆働態勢となった。

この報国団体制に組み入れられた者たちは、本調査対象者の場合、後期（四〇回（昭和十七年卒業）～四三回）が該当している。

以上のように、昭和前期の学園生活の特色として、創立当初からの自治組織は、前・中期と後期とでは組織自体も活動内容も大きく変容を迫られている。このような自治生活に対して、当時の学生たちはそれをどのように受けとめてきたであろうか。前・中期の全般的傾向としては、「大正期」の場合と同様に肯定的に捉えている者が多い。

肯定的意見としては、

「クラス会をもとに各自が係に属し、更に横（学年）、縦（学部）と組織的な広がりで計画・実践・反省・結論づけた自治生活は自他の人間関係を深め、創造と奉仕の喜びを体験できた場であった」（二七回、家政）

「自分なりの人生哲学をぶっつけ合う事は、若者が生きるための方向づけをするのに大変有意義であったと思う。自分を知る人格的成長・成熟のために日本女子大学の教育としての特徴は大事にしてほしい」（三五回、二類）

「学生生活は自治により学生が運営し、三年生になると各係別に、各部門の一年計画を立て、それを責任をもって実行した。これらの経験は自分の生活においても主体性を持つようになり、よかったと思う」（三五回、二類）

「常に自己を反省し、また他人を尊重することができるようになったのも修養会のお陰と思います」（三五回、国文）

「共同で物事を考え、自分より他の人々の事を先に考える心、学問を修得する事と共に大切な心を培ちかわれた場所であった」（三九回、二類）

「いろいろな会に発言の場をつくって意見を発表させ、また友達同志のきずなを作る教育はよかったと思う。人前で意見を言えるということは婦人の地位の向上のためにも役立っていると思います」（三三回、二類）

「これらの会で委員として討議し、共に行動したが、戦前に既に民主的な活動を体験していたため、民主社会となった戦後において、どこの職場でもたやすく適応できた」（三二回、二類）

「係の仕事を通じて、奉仕の心を学びました」（三八回、国文）

等が挙げられ、その反面、

「勉強より、会、会と沢山の会合ばかりで、そのために勉強の時間（講義・実験・研究等）が少ないのではないかと思った」（三〇回、師範家政）

「当時真剣に議論し、会をもちましたが、今考えますと計画的な積み重ねがなかったような気がします。記録をとりそれをもとに前の段階から展開していけば、幼くとも何らかの方向づけが出来たでしょう」（三五回、二類）

「自分のその時々の気持なり感じている事を、自分が聞いてもらいたいと思っている相手でもない不特定多数の人を相手とする発表会ということには、反抗的気持にさせられました」（三八回、一類）

といった問題点を感じている者もあった。しかし、

「クラス会・縦の会・修養会等があって、余り好きではなかったが、家庭を持ち特に苦しい立場に立った時など、学生時代の討議の内容等が実感として思い出され、もっともだと感心させられる点が多かった」（二八回、社会事業）

「修養会は自己反省が多く、気が滅入るばかりの時もあったが、そこでの嫌応のない発言は、社会人としていつ、いかなる時でも臨機応変に対処出来る発言力の基礎であったと思われ、感謝している」（三〇回、師範家政）

「会にまた会、厄介の言葉が出る程酷しい修養会が続き苦しかったが、自分を凝視できたこと、〝我いかに生くべきか〟の問題に取り組めたことは意義があった」（三五回、国文）

等のように、学生時代、自治生活のあり方を評価していなかった者たちでも、卒業後の生活の中でその価値を認識した者も多い。

昭和十六年以降、報国団体制を経験した、後期の人の中には、

「入学当時は瞑想会、クラス会等あったが、西生田に移るようになってから空襲も度々あり、学部の人も目白と分散してクラス会が主になり、縦の会のつながりは余りもてなかったように思う」（四〇回、一類）

「保育係として農繁期保育等の折、紙芝居を作って下手な芝居をしたり、思い出が多い」（四〇回、一類）

「日毎に戦時色を増している社会の中で、個人を大切にする会の運営に目をみはった」（四〇回、二類）

「女子大時代の後半は戦時色が濃厚になり、自治組織も改められ、自由が奪われ、『自治』は禁句になり、上からの命令通り仕事をさせられた。国際部で満州からの留学生と交流したことが印象に残っている」（四〇回、国文）

「戦時中でしたから毎週木曜日に行なわれたクラス会は、愛国心について、戦時体制下の学生のあり方、家庭生活のあり方等皆真剣に討論しました」（四一回、二類）

「女子が活発に意見を述べることに啓発された」（四一回、国文）

「主として戦争遂行のための精神涵養・鼓舞するような発言が喜ばれる傾向にあって、本来ならば自己をみつめ成長させてゆく最高の場であったろうに、時代的制限・統制のための機関のようになりあまり興味はなかった」（四二回、一類）

「在学中（昭和十六年から十九年九月）はちょうど大東亜戦争の始まりから敗戦への過程で、反省反省で自由濶達にものを言えるムードでない不幸な時代でした」（四二回、英文）

「国防係で、土嚢を作り（ほんのすこし）、また竹の先にワラをつけた火消し道具を作り、バケツを揃えておいた。こんな子どもだましのことで戦争に勝てるわけがないと敗戦を予感しておりました」（四三回、二類）

等、否応無しに戦争の影響がみられる。

これらの他に、毎夏、三・四年生を対象に軽井沢三泉寮で夏期修養会が開催されている。目白の地を離れて自然の環境に恵まれた夏期修養会は、当時の学生たちに深い感銘を与え、次のような感想が寄せられている。

「夜を徹して、師と個人的にまたグループで語りあかし、精神的成長を得られたように思います。心の交わり、真理の追求、哲学、宗教を語り、考え、日本女子大学のスピリットの源泉、私どもの生涯の指針であったと思います」（二六回、師範家政）

「純粋な気持で本音で話し合えた軽井沢の修養会のお陰で、どんな人も輝く様な魅力をもっていること、ただし付き合ってみなければ分かりにくい魅力もあること、従って取っ付きにくい人を敬遠することの愚かさを知ったこと等記憶に残っています」（二八回、師範家政）

「軽井沢の修養会で将来への自己の自覚と人生行路を思索し、決意する最も良い機会を与えられたと感謝致しております」（三〇回、師範家政）

「食料のない時に無理をして開かれた三泉寮での修養会は、とてもいい思い出となっています。目白に帰れば、また同じクラスの人たちがバラバラに別れることがわかっていましたから、皆心のつながりを得たようでした」（四二回、一類）

しかし、夏期修養会も戦争の影響を免れることはできず、中止のやむなきに致っている。

以上みてきたように、戦時下の特異な状況にあっても、創立当初からひき継がれていた〝自治生活〟の精神が生き続け、卒業後の生活にも影響していた側面を見出すことができる。成瀬仁蔵の教育理念の形が変わってもその精神は問題点を含みながらも生き続けていると言えよう。

表-23　寮経験の有無　(%)

寮経験		総数	なし	あり 1年以内	あり 2年以内	あり 3年以内	あり 4年以内	不明	無答
計		1,537	35.2	6.3	5.5	8.8	41.0	0.6	2.6
学部別	家政	364	29.9	5.5	5.8	5.5	50.5	1.1	1.6
	師範家政	565	28.8	5.7	4.8	6.5	51.5	0.7	1.9
	社会事業	111	39.6	9.0	5.4	32.4	9.0	—	4.5
	国文	284	38.4	6.3	6.3	8.5	36.3	0.4	3.9
	英文	161	59.0	6.8	5.0	4.3	20.5	—	4.3
	高等	26	38.5	11.5	11.5	34.6	3.8	—	—
	本科	26	42.3	11.5	3.8	11.5	30.8	—	—
時期別	前期	599	30.9	6.0	5.8	7.8	45.2	1.0	3.3
	中期	396	39.6	5.6	5.6	6.6	41.2	—	1.5
	後期	542	36.7	7.2	5.0	11.6	36.2	1.0	2.6

(注)　社会事業学部（三類）の場合，26回～33回生までは4年制であったが，33回生から43回生は3年制となった。高等学部も3年制である。

(五)　寮教育

寮教育は学校教育の一要素として、また成瀬校長の教育理念実現の場として、創立当初からきわめて重視され、学生の精神生活・自治生活の実践の場として大きな役割を荷っていた。この時期においても表-23に示すように六割以上の者が寮生活を経験し、在寮期間も四年と長期にわたっている者が多い。特に家政学部（二類）、師範家政学部（三類）においては寮生活の経験がある者が七割近くに達しているが、これは両学部に地方出身者の割合が比較的多いことと関連している。逆に、東京在住の者が多かった英文学部・高等学部では、寮生活の経験者は少なくなっている（「出身地の項」参照）。

では、寮生活を経験した者たちは当時の寮教育をどのように受けとめ、現在どのような感懐を持っているのであろうか。その声を拾ってみよう。

「一人娘で育ちましたので、寮生活は苦しいこともありましたが、共同生活の楽しさもあり、人との調和が大切なことを学びました」（二六回）

「節句・七夕・クリスマスなど四季折り折りの行事、会食などがあり、趣味豊かに皆で智恵を出し合って楽しみました」（二七回）

「北は北海道、南は沖縄、全国から集った方々と生活し話題も豊富に視野も広がりました。四年間の寮生活が無かったら、学生生活の意味も半減していると思います」(二八回)、「四年間、生活をともにした同期生とは学科の違いを越えて卒業後の五十年間絶えることなく回覧ノートをまわし続けており、また年一回ともに旅行するなど、今でも親しく付合える友を得られたことを感謝している」(二九回)、「沢山の人達と起居をともにし、団体生活の制約の中で自分のあり方を考えると共に、それぞれの人達の生きざま、考え方を教えられ私の人格形成に役立ったと今でも感謝している」(三〇回)、「初めて家を離れ、いろいろな性格の方に出合ったが、その時の交わりを通して学んだことが結婚後夫の親せきや友人との交流、地域社会での生活でどれほど役に立ったかわからない」(三一回)、「はじめて親元を離れ、大勢の人の中で生活し、親べったりの生き方を反省させられた」(三二回)、「核家族の中で甘やかされて生活してきた人間にとって、共同生活の場が与えられ、集団の中で自己を知る良い機会になった」(三三回)

「人と人とのコミュニケーション、生活のリズム、共同生活のルール等を身をもって経験し、修得したことが、子どもの教育・職業生活等に非後に役立った」(三三回)、「規則正しい生活の中に自然と自分を律し、他の人々との調和をもっていくことは、自分を見直すよい機会となった」(三四回)、「学年末になると寮生全体でディナーの会をし、料理をする学年とウェイターになる学年を別けて楽しい集まりをもちました」(三五回)、「実践倫理で教えられた三大綱領のまさに実践の場だったと思っております」(三六回)、「鐘で起き、鐘で終わる一日の充実した経験は私の一生を通じて得た最高の宝でした」(三七回)

「上級生一人、下級生一人が一ケ月交替で寮監先生のお世話、来客の接待など、寮全体の運営をまかせられる寮の主婦の役目〝お主婦さま〟をつとめ責任を感じはりきったものです。家庭生活のマネージメント、人への配慮等を学びました」(三八回)、「台湾・満州・朝鮮・ハワイ・ロスアンゼルス等から来られた方々など、国際色豊かでした。風雲急を告げる頃、中国人の黄さんの帰国をみんなで送ったこともありました」(三九回)、「戦争中で物資は少なく、食事

は粗末だったが、人との協調性・自主性を学び、実践的家庭管理を身につけたと思います」（四〇回）、「私の寮は二世の方が多く、風俗・習慣の違い等がありましたが、外地から入学した方々は概して開放的で、それぞれ個性的な話が面白かった。開戦布告で経済封鎖され帰国できなくなった寮生の収入を得るためかけ廻って仕事を探したこともありました」（四一回）、「入寮した十二月に大東亜戦争が起り、後半は燈下管制の下で勉強したり、雑炊を啜ったりの状態でしたが、共同体としてお互いに寒さときびしさと、ひもじさを分ち合ったことは一生の思い出となりました」（四二回）、「戦時下の不自由な中にも同世代の者同士、苦楽を共にし心を打割ってつき合った生活は何にもまして貴重なもので、今でもその当時の人々と他では持ち得ない友情・交際を続けております」（四三回）

特に寮監との出合いについては、「大岡蔦枝先生の厳しいけれどあたたかい人格にふれ幸せであった」「淀野先生の小笠原流礼法の厳しい躾は学生時代には苦情の種にもなりましたが、今にして思えば行儀、作法、言葉づかい等、朝から夜までしっかり教えていただいて田舎出の私にはよい勉強になり、先生との出合いは生涯心に残っております」「ミス・フィリップス（外寮）が寮監で、イギリス式のきびしい生活を受けましたが、反面実にこまやかに行きとどいた心づかいをしていただき、皆ほんとうの姉妹のようでした。朝夕の礼拝、週一回の聖書研究、日曜日には全員で目白教会の礼拝に出席するなど宗教生活の基礎を養っていただきました。今でも五月十二日は当時の寮生たちが集まり先生をしのぶ会を開いています」「出野柳先生の厳しい躾に入学当初はとまどいましたが、自分を律するものは規則ではなく自分自身であることを学んだことは得がたい経験でした」「戦後の混乱期にも子どもの教育に信念をもって当ってこられたのも、藤田貞先生の精神教育のおかげと思っております」「二年生の五月から八月までの長い病院生活（腸チフス）の間、一日もかかさずあの物資不足の時代にパンやジャムを持って見舞って下さった藤原千代先生の温情、ひとりひとりに目の届くやさしさがどんなに心の支えになったことか、今でも一年半ごとに先生を中心に全国の仲間が集まって会を持っています」等々、その教育に感謝し師弟の結びつきの強さを語る声も多い。

反面、「六帖に三人といった過密状態でプライバシーが保てなかった」「自分を抑えることで個性を生かす芽がそがれたのは残念だった」「共同生活の楽しさはあったが常に他人を意識する生活で窮屈であった」「文通届や外出するにも寮監の印がいるなど籠の鳥、もっと自由があってもよかったと思う」「起床・就寝の時間が厳守され、勉強時間が制限されて困った」といった批判も出されている。

しかし一面では、「どうしてもみたい映画があったが門限の関係で無理、駄々をこねてとうとう先生を説きふせ、他の寮の方々が眺める中を寮生の半分ぐらいが先生とともに夕食もそこそこに勇んで映画見物に行ったことがありました。あとで寮監先生が寮監長からお叱りを受けられたということを何年も経ってから後輩からきかされました」「試験の前夜、消燈時間後布団をかぶり懐中電燈のあかりで油汗を流しながら勉強し、苦労の甲斐あって九十点を獲得、寮友に祝福されました」「学期末には寮全体の反省会があり、電燈を消して一人宛の発表がありますが、長時間に及ぶので中には高いびきで寝ている人もあり緊張の中にもユーモアがありました」といった生活も展開している。

また、「寮生三十数人のこじんまりとした寮で家庭的なあたたかさがありました。学年・学部混在して生活をともにする中で、休日には上級生にすすめられ、よく美術館・絵画展を見に行きました。読書については国文学部の人たちのよきアドバイスがあり、人生観・恋愛論をたたかわせました」「戦争中でしたが、讃美歌を歌ったり、自由時間には数々のレコードをききました。クラシックからポピュラー等に親しみを感じ、今日に至るまで影響があります」といった雰囲気もあったのである。「四年間の学生生活で一番の収穫は寮生活でした」と述懐している者もあるように、寮生活の経験は若い時代の人間形成に大きく影響し、今もその生活をなつかしむ者が多い。

(六) 学校行事

昭和前期においても大正期同様、運動会・文芸会・研究発表会・展覧会・講演会・音楽会等の諸行事があり、自治

生活の一環として学生たちが企画・運営に当たった。これらの諸行事は「共同奉仕の実践のための機会」として、同時に「発表の教育のための有効な場」として教育上重要な意味をもつものであった（『大正の女子教育』二一一頁参照）。

昭和前期もその初期においては、諸行事も大正期の延長線上にあり、大きな変化はなかったといえよう。当時の卒業生たちには、運動会や女性文化展覧会（昭和三年）に関する思い出を綴った者が比較的多くみられた。しかし昭和十二年の日中戦争を契機に、本学においても戦時色が次第に強まり、西生田における勤労奉仕が始まり、行事面では「山の集い」や「戦時家庭経済展覧会」に代表されるように、国策に沿った戦時色の濃いものが多くなった。だが普段の学園生活はこの時期さほど大きな変化はなく、家政学部では家政学研究会・児童問題研究会・大陸生活研究会の開催、国文学部では国文学研究会・関西への修学旅行の継続、英文学部では英文学研究会が開かれ、シェークスピア劇の上演なども行われ、その他各学部で各種のグループ・クラブ活動があり、従来からの自治活動も活発に行われていたようである（『図説日本女子大学の八十年』参照）。

だが昭和十六年に日本女子大学校報国団が結成され、同年十二月に太平洋戦争に突入するや、学園の戦時体制化は徹底強化され、平常の勤労奉仕活動の他に、戦時色の濃い様々な研究と展覧会・講演会などを教員の指導や桜楓会員の助力を得て行った。その後学徒動員も徹底化し、学業がほとんどストップする戦争末期には、本来の学校行事もほとんど存在しなかった。

では昭和前期の主な行事について、時期的に早いものから取り上げてみよう。

。運　動　会

運動会は、日本女子大学校開校の明治三十四年の十月に第一回が挙行されて以来、毎年開催され、本学最大の行事として昭和前期まで継続されてきた。いうまでもなく、成瀬校長の女子教育における体育重視の主張のもとに本学では体育教育が重視されたが、運動会もその精神のあらわれであった。東都の名物ともなった運動会では、常にきまっ

た競技を行うのではなく、年々新しい出し物が考案・演出され、幼稚園から大学まで学園全体が参加した。同時に当日のお弁当や料理などをはじめ、運動会の準備にも教職員・学生生徒が一致協力し、夜を徹してこれに当たった。

本調査では学校行事中、運動会の思い出を綴る者が最も多く、それぞれの持ち場での活躍、運動会の呼物であった日本式バスケットボールの人気あるいはプロミネードの練習の様子等が生き生きと描かれている。

「運動会は本当に素晴らしい年間行事だったと思います。体育係を中心に全校一体となって〝善学善遊〟の精神の高揚がはかられた」（二七回、師範家政）

「運動会のあり方について批判的になり、四年生の時に長い伝統通りにしなかったところもあるが、今から考えると、あれは日本女子大学学生生活中、成瀬精神の総合的な体験のできる大切なコミニケーションの試練の場であったと思う」（二九回、英文）

「料理係手製のものを夜中に体操場に運びこみ、数を調べつつ窓から雲る月をながめ、明日の晴天を祈った」（三〇回、家政）

「日本女子大独特の運動会、あれもすぐれた精神教育のあらわれでした」（三四回、一類）

などの感想にもみられるように、運動会を単に楽しい思い出としてのみならず、責任と連帯を体験する機会として、その教育的意義を評価する者も少なくない。

しかし昭和前期も後半になると、「運動会にハーケンクロイツの大旗を持って出場した時、変にひっかかりを感じたのを覚えている」（三五回、英文）といった感想にみられるように、運動会にも徐々に時代の影響がみえ始める。その後学園の戦時体制化が強化される中で、昭和十七年頃までかろうじて継続された。

。女性文化展覧会

昭和三年四月二十日から三十日まで、日本女子大学校創立二十五周年記念、高等学部開設、併せて御大典を祝賀し

て、女性文化展覧会が開催された。この展覧会では、日本女子大学校創立二十五年史料を初めとして、世界及び日本の女子高等教育など教育問題の概況・宗教と婦人の問題・婦人参政権運動などの法律と婦人の関係・婦人国際平和運動の状況・社会施設と婦人の活動・欧米の芸術・欧米の文学・我が国の文学・著名な女性科学者の紹介・婦人と経済の問題と多方面にわたって展示・発表が行われた。入場者はざっと三万人、大好評であった。「女性文化展覧会では全学あげて十日間位だったか授業なし。全員参加で行われ、夜を徹してやった」（二六回、師範家政）、「全校あげて二年がかりだったそうです。女性文化のあらゆる面を包含した研究・調査の結果が発表され、皇后陛下の行啓もありました。係組織がフルに活用され、展覧会期間中の学園は見事に展開されました」（二七回、師範家政）などといった思い出のように、全学が一丸となって取り組んだ様子がうかがえる。

。山　の　集　い

戦時期における本学行事の代表的なものの一つに、山の集いがある。本学でも次第に戦時色が強まった昭和十三年十一月、従来の運動会と勤労奉仕ならびに西生田への移転運動との三つが一つになった、第一回「山の集い」が西生田の地で挙行された。

プログラムは、第一部が運動競技（午前十時より十一時半まで）で、開会の辞・君が代斉唱・国旗掲揚・宮城遙拝に始まり、会長挨拶の後、1女子青年体操（高等女学校）、2ボール体操（大学部一年有志）、3紅白リレー（幼・小・女・大選手）、4建国体操（小学校）、5アマゾン（体操）（大学部有志）、6日本式バスケットボール（大学部有志）、7愛国行進曲（幼・小・女）の競技が行われた。昼食（第二部）をはさんで、第三部は敷地案内及び勤労作業（午後一時より二時二十分まで）で勤労作業種目は、1芝まき、2草とり、3大根引き、4開墾並にさやえんどうまき、5堆肥づくり、6蓮とり、7芋堀り並に苞つくり、8薪たばね、9ベンチ製作、10松笠ひろい（幼稚園）、11ハイキングの十一種目で、それぞれわかれて参加した。第四部はコーラス並に行進（午後二時二十分より三時まで）で、皇軍祝勝の行進（大学部一・

二・三年）と愛国行進曲・大日本の歌・日本青年の歌のコーラスで終わりとなっている。

このように、全体的に当時の社会情勢を反映して国家的色彩の濃い内容となっている。だが、当時の『家庭週報』の学生欄には、第一回「山の集い」を迎えるに当たって「過日私達は最善を尽せと教えられました。最もよき機会が今与えられたのです。始めての催し故に色々と不備な点もある事と思いますが、西生田の地に我等の楽園、理想の花園を作り上げようとしている私達の意気を御覧になって下さい。紅葉の美しさは眼を奪うものがあるでしょう。しかし更に美しいものは大地をしっかりと踏んだ学生の頼もしい姿であらせたいものです」（『図説日本女子大学の八十年』）という記事が掲載されている。こうした記事からは、少なくとも「山の集い」が始まったばかりの頃は、これに取り組む学生たちには国家的な意識よりはむしろ、西生田の地に女子総合大学を実現しようとする意気込みの方が強かったものと推察される。

「山の集い」はその後も同じようなプログラムで、昭和十七年頃まで続けられた。

。戦時家庭経済展覧会

戦時家庭経済展覧会は、前述の「山の集い」とともに戦時期の本学行事を代表するものである。国民生活・経済への戦争の影響が深刻さを増した昭和十三年十二月一日より七日まで、家政学部を中心に、大蔵省・商工省・文部省・厚生省・朝日新聞社・桜楓会の後援により、戦時家庭経済展覧会を日本橋三越本店にて開催した。

展覧会では、たとえば月収八十円前後の生活を標準に、食物費・住居費・被服費・教化費・家事運用費・常備費の六項目にわけ、非常時の家庭予算の立て方、その工夫を詳細に実物を作り、図解し、立体的に発表している。展覧会の会場の一角には「家庭経済相談所」が設けられ相談にも応じた。この展覧会の内容は、『戦時家庭経済読本』、『戦時家庭経済料理』の二つのパンフレットにまとめられ販売された。

展覧会はその後、仙台・大阪・京都・名古屋・福岡・札幌など全国十三の都市で開催され、好評を博した。

翌昭和十四年六月には、いわゆる「百億貯蓄運動」に際し、大蔵省の求めに応じて、戦時家計・生活刷新相談所を東京のデパート（九か所）で開き、同時に学生の脚本・作画による「大人紙芝居」を実演した。紙芝居の内容は、戦時家庭予算・国策線上の衣類・戦時営養方針曲・我が家の修理行進・燃料戦時譜・戦時家庭宝さがし（廃品回収）などである。

その後も国策に沿った催しが多く、行事、さらに学生生活全体に戦時色が一段と濃くなっていった。

。勤　労　奉　仕

昭和十二年の日中戦争の勃発により、国民総力・共同奉仕の建前から、学校における学生生徒の勤労奉仕が生まれ、十三年の夏ごろからほとんど各学校で行われることになった。本学では西生田移転運動と時を同じくしたため、勤労奉仕はそのまま西生田の広大な土地の開発事業と化した。また、勤労奉仕による秋の収穫は、量としては取るに足りないものであっても、その実践的教育効果は本学の創立精神をますます具体化するものとなった。

「勤労奉仕と称して西生田に度々通い、草刈や畑作りをしました」（三七回、国文）

「西生田に敷地を得た当初のことで、くわをかついで耕し、落花生・里芋等農耕にいそしんだことが忘れられない」（三八回、英文）

「昭和十五年五月十四日、皇族方を西生田移転地にお迎えした時の感激が忘れられません。その頃私達は勤労奉仕に汗を流しており、時には肉体労働に順応できず、拒否したい気持になったことも覚えています」（三九回、一類）

こうした感想にもみられるように、当時の勤労奉仕作業は肉体的には決して楽なものではなかったにもかかわらず、何十年も経た今日では懐かしい思い出として記している者が多い。

昭和十七年の西生田校の開校後は、それまでの西生田校地を中心とした勤労奉仕はより広げられ、地元部落の農繁期託児所の開設等は戦時下の銃後の農村の援助として報国団活動に組み入れられることとなった。

。太平洋戦争

昭和十六年十二月八日、いよいよ太平洋戦争に突入した。すでに自治生活面では報国団体制がとられ、国家総力戦態勢に即応する集団活動を行っており、戦争突入により学園全体に戦時色が濃厚になっていった。昭和十八年六月に「学徒勤労動員体制確立要綱」が閣議決定され、同年九月には「女子勤労動員促進ニ関スル件」が発令され、さらに翌十九年二月の「決戦非常措置要綱」の閣議決定により、勤労動員が徹底強化された。

本学でもこの「決戦非常措置要綱」に基づき、昭和十九年四月に第一次の出動動員命令が、六月には第二次の動員命令が下り、学業はほとんどストップし、動員生活にあけくれる毎日となった。

「大学のキャンパスで日米開戦を知りました。その後は戦時体制に巻き込まれた学生生活でした。エプロンモンペを急いで作り、それを着て何度防空演習をしたことか」（四〇回、一類）

「三年生の時に第二次世界大戦が始まり、身の引締るような感動を覚えたのを思い出します。しかし、その後の学校生活は防空演習や西生田農園の勤労奉仕等が多くなり、つまらないものになりましたが、かえってよく勉強し、本を読みました」（四〇回、二類）

「戦争の真最中、昭和十八年十月一日の卒業でした。日本女子大の学生生活は戦争への協力ということを抜きにしては考えられません。防空訓練・救急訓練など、今思えば戦争の善し悪しは別にして、懐かしく思い出されます」（四一回、一類）

「勤労奉仕・防空演習等々、そのこと自体はあの当時止むを得ぬことであったとはいえ、それをお祭の如く来校者に供覧するということには抵抗を感じた」（四一回、二類）

「一年の心理学の授業半ばに講堂に集合、日米戦争開始の詔勅をきき、午後全員寮に帰り、無言の静かな不安の一日をすごしました。十日間に渉る凸版工場での勤労奉仕、軍人による教練、B29の空襲等、戦争に関係したつらい思い

出が多い」（四一回、三類）

「私の在学した三年半、我が国は既に太平洋戦争に突入し、内外の情勢は極めて厳しいものがあり、衣・食に亙ってはかなり窮乏をつげておりました。日々生死を直視するという極めて緊張した中におりましたが、反面日々を充実して、学生生活にも奉仕活動にも青春を燃焼させていたと思います」（四二回、二類）

「既に太平洋戦争が始まってからの入学でしたので、すべて戦争とかかわった思い出ばかりです。学徒出陣を見送ったこと、動員生活など。動員生活では、学校では得られぬ貴重な体験をいたしました」（四三回、二類）

太平洋戦争突入後の学生生活は、まさに戦時下の生活である。防空演習・勤労奉仕・教練さらには勤労動員・学徒出陣の見送り等つらく厳しい思い出や体験が綴られているが、それらの中にも、厳しい体験を糧として、精一杯に生活していった様子がうかがわれる。

卒業後の生活

一　卒業後の進路

昭和前期に高等教育を修了した女性は、どのような進路をとって社会に踏み出したのであろうか。

(一) 本学卒業生の卒業後の進路

本学卒業生を対象とした本調査の結果を、昭和四十五年に当研究所が実施した「大正期の本学卒業生に対する調査報告」(女子教育研究双書五、第二章「大正期の卒業生の卒業後の生活」)と比較しながら検討をすすめていきたい。

表-24「昭和前期の卒業直後の進路」と表-25「大正期の卒業直後の進路」とを比較してわかることは次のような点である。で

。卒業後も勉学を続けた者の比率が、昭和期には低い(昭和期二・九%、大正期一〇・三%)。

。就職した者は、昭和期の後期を除くと、大正期の方が比率が高い(昭和前期・中期三二・六%、大正期四五・八%)。

。社会活動に参加した者の比率も大正期の方が高い(昭和前期〇・八%、大正期四・九%)。

。だからといって「けいこごと」に専念した者が大正期より増えているわけではなく(当然ながら特に後期には激減する)、

表-24　昭和前期の卒業直後の進路（時期別・学部別）　(%)

		総数	勉学	職業	社会活動	けいこごと	家業	家事	結婚	その他不明	無答
合計		1,537*	2.9	40.6	0.8	11.3	1.6	6.9	25.9	1.0	9.0
時期別	前期	547**	2.0	30.0	1.5	15.5	1.1	8.2	30.5	1.1	10.1
	中期	396	3.5	36.3	0.5	15.6	1.3	7.8	24.4	0.8	9.6
	後期	542	2.4	55.4	0.4	4.2	2.2	5.2	22.1	0.7	7.4
学部別	家政	364	1.1	23.9	1.1	14.8	1.4	10.4	34.9	1.1	11.3
	師範家政	565	1.4	49.9	0.4	10.1	1.1	6.7	23.0	0.8	6.7
	社会事業	111	7.2	48.6	2.7	3.6	4.5	5.4	18.9	0.9	8.1
	国文	284	2.8	42.6	0.7	12.0	2.5	4.6	25.0	1.1	8.8
	英文	161	6.2	39.8	0.6	13.0	—	5.6	21.7	0.6	12.4
	高等	26	15.4	19.2	3.8	7.7	3.8	3.8	26.9	7.6	11.5
	本科	26	11.5	42.3	—	7.7	—	3.8	26.9	—	7.7

*　総数（全体合計）の中には高等科，本科の各26名を含む。

**　前期547名の中には高等科，本科の各26名を含まない。

表-25　大正期の卒業直後の進路（時期別・学部別）　(%)(M. A.)

		実数	学勉	職業	社会活動	けいこごと	家業	家事	結婚	不明
合計		648	10.3	45.8	4.9	14.7	2.3	17.9	11.3	8.8
時期別	大正前期	93	17.2	43.0	4.3	17.2	3.2	21.5	14.0	7.5
	大正中期	185	13.5	49.2	4.3	6.5	1.1	13.0	11.4	10.8
	大正後期	370	7.0	43.2	5.4	18.1	2.7	19.5	10.5	8.1
学部別	家政学部	235	10.6	28.5	5.1	22.6	3.0	26.4	14.0	5.5
	家政理学部	227	9.3	61.7	5.3	10.1	2.2	11.9	10.6	8.4
	社会事業学部	30	16.7	53.3	3.3	6.7	—	10.0	13.3	6.7
	国文学部	84	4.8	57.1	6.0	15.3	3.6	11.9	8.3	13.1
	英文学部	72	16.7	36.1	2.8	6.7	—	19.4	6.9	16.7

（資料）『大正の女子教育』女子教育研究双書五（国土社）p. 244 より引用。

「家事に従事」したり「家事を助ける」といった者の比率もむしろ大いに減少している。

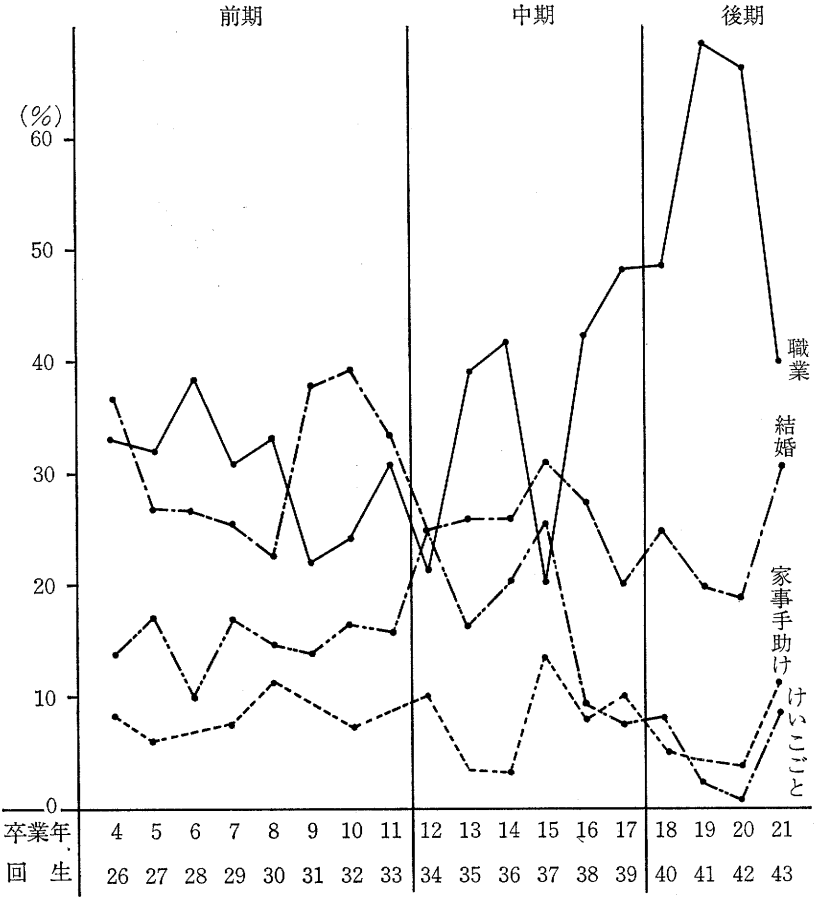
。それでは、大正期よりも昭和期において卒業後の進路としてより多く選択された方向はどこかといえば、それは「結婚」であった。高等教育を修了した女子の進路として、大正期では平均して一一・三%であるのに、昭和前期では、「結婚」と記した者が二五・九%にのぼっている（この数字の差に関連しては、「第二部　卒業後の生活　一　結婚の状況」を参照されたい）。

本調査の対象である昭和前期を、昭和四年卒業～昭和十一年卒業までを前期とし、中期を昭和十二年～昭和十六年までに区切り、後期が太平洋戦争中の昭和十七年卒業より敗戦直後の昭和二十年九月卒業までとしているが、これらの時期は、日本が軍国主義化・右傾化の傾向を強めていった時代である。前期は特に昭和二年の金融恐慌や昭和四年の糸価暴落・世界恐慌などと、男子の大学卒業者たちも、「大学は出たけれど」の「大学卒業即失業」といわれた経済不況の時期にあたる。また中期は、日華事変の関連により軍需景気がおこり、昭和十三年には国家総動員法が成立し、軍事一色のファシズム体制が確立された。後期には太平洋戦争に突入、極端な物資不足・学校の軍需工場化・空襲・敗戦と破局へ突き進んだのである。このように後期の戦争中はまさに非常時であるが、この昭和前期を全体として眺めるとき、前期ではやや大正期の名残が見られるというものの、先述のとおり、高等教育を修了した女子大卒業生が、社会にその技能や学識を活かして活動のできる場の余裕が失われていき、早婚の奨励が政府により行われ、「産めよ殖やせよ」の時代の背景もあって、卒業後「ほどなく結婚」の率を押し上げたことも推測できる。

しかし、戦争への突入が、かつてないほどの職場への否応なしの進出となった様子が、卒業年別に進路の推移を示した図-1から窺える。

大正期の卒業生の卒業後の進路の分析では、卒業時期による差よりも卒業学部による差が顕著にみられた。今回の昭和前期の卒業生では学部別にどのような差がみられるだろうか。前掲の表-24と表-25の下半部に、学部別の進路の

図-1　卒業直後の進路（卒業年別）



状況をまとめてある。大正期では特に学部別の実数に差があるため（たとえば社会事業学部は三十名と少ない）論じにくいのであるが、大正期の卒業生の卒業後の進路と、昭和に入ってからとで、学部別の傾向はほとんど大差のないものとなっている。すなわち、家政学部は家庭生活志向であり（結婚三四・九％、家事手助け一〇・四％で合計四五・三％にのぼる）、師範家政、社会事業、国文の三学部は職業生活志向が多く、それぞれほぼ五〇％から四〇数％の比率を示している。逆に見れば、家政学部の職業への進路をとる者は少なく、約二四％であり、師範家政・国文で卒業後ほどなく結婚の進路をとった者は同様に少なく、二三％～二五％とほぼ同率となっている。社会事業学部では更に結婚の比率は低まり二〇％未満である。大正期ではこの両者の中間に英文学部が位置し、やや保守的色彩を感じさえしたが、昭和前期はむしろ大正期の国文科の革新性に近く、戦時下での英文学部専攻者の傾向が、大正期とやや異なっていたことを推測させる。

(二) 一般専門学校の女子の卒業生の進路

前節において、日本女子大学の卒業者が卒業直後にどのような進路をとって社会に踏み出していったかについてみたのであるが、本節では、昭和前期に他の一般の公・私立専門学校を卒業した人々の進路について、文部省年報より一覧しておこう。

たとえば昭和十二年度（第六五年報）においては、公立専門学校八校の内六校が女子専門学校（昭和十八年度、第七一年報以降は、山口女専が加わり七校となる）であり、私立専門学校は全一〇一校の内四三校が女子卒業生を出した学校数となっている。

したがってこの資料には、いま述べたとおり日本女子大学の卒業生についても含まれている。

さて結果は表-26に示してあるが、「勉学」の欄の（）は内数で、「学術・研究者」であり、これを「勉学」の外数か

表-26　一般専門学校（公立・私立）の女子卒業直後　(%)

		総数	勉学	職業	自営業	不詳	病気又は死亡
合計		50,553	6.8(3.1)	61.8	0.1	31.0	0.3
時期別	前（昭 7～昭 11）	16,246	7.6(3.3)	41.4	0.1	51.6	0.3
	中（昭 12～昭 16）	18,903	5.1(2.0)	58.7	—	35.9	0.3
	後（昭 17～昭 20）	15,404	7.3(3.3)	89.3	—	3.1	0.3

（資料）日本帝国文部省年報より

表-27　一般専門学校（公立・私立）女子の卒業直後　(%)

		実数	官・公吏	学校教員	医師 薬剤師	新聞雑誌記者著述業	銀行員会社員	その他の自由・技術的職業	自営業
合計		31,325	2.1	36.5	24.3	0.2	9.1	27.8	0.1
時期別	前(昭7～昭11)	6,587	1.1	47.4	43.1	0.1	7.5	0.7	0.3
	中(昭12～昭16)	10,968	2.0	39.6	30.0	0.3	8.3	19.8	—
	後(昭17～昭20)	13,770	2.7	28.8	10.6	0.2	10.5	47.2	0.1

（資料）「日本帝国文部省年報」より

ら差し引いた数が、「上級学校（大学・専門学校など）への進学者」ということになる。

われわれの調査における卒業後の進路では、必ずしも上級学校へ進学しなくても、学術的な研究生活を続けた者を含めており、大学助手などとして職業に就いたとみられる場合には教育関係の中に入れてあるので、文部省年報の、「進学」「学術研究者」を合わせて便宜上、「勉学」としてまとめたのであるが、「学術研究者」を就職した者と見做せば、「職業」の比率がその分だけ多くなるわけである。

さらにこの文部省年報の数値は、卒業の翌月末、といった限定された時期での結果であり、本調査では、「卒業なさった直後」と表現し、調査の意図としては、文部省年報と同様の時期を考えていたのであるが、回答者によっては、かなり長い期間を卒業後に経過していることもあって、卒業「直後」の解釈にはさまざまのニュアンスの差があるかと思う。

以上文部省年報と本調査結果を比較して、本学卒業生の「職業」に就く者がやや一般に比して低いこ

とがみてとれるようである。次に職業に就いた場合の職域に関してみると（表-38・40参照）ここでも、一般専門学校に比して、公務関係が多いのをはじめ、偏りなく社会の各領域に職域のひろがりがあったことがわかり、比較すれば恵まれた状況があったといってよいのではないだろうか。本学卒業生の職業は、「三　職業生活」においてさらに述べることにする（表-38・40は二四九・二五〇頁に掲載されている）。

〈注〉明治六年より継続刊行されてきた日本帝国文部省年報は、昭和十三年（第六六年報）以降は、政府の「決戦非常措置要項」により報告事項の停止または簡素化の実施もあり、現実に戦時下には報告資料の収集は困難を極め、調査資料が罹災するなど、年報は未刊のまま終戦を迎えた。終戦後の昭和二十四年より、未刊の年報が遡って逐次刊行されている。

さて、これらの年報を繙くと、昭和三年度（第五六年報）より昭和六年度（第五九年報）までには、一般専門学校の卒業後の進路の資料は記載されておらず、昭和七年（第六〇年報）より記載がはじまっている。そこで、昭和六年度卒業者の昭和七年四月末日現在の状況から卒業後の進路についてのデータを収めることができた（以下各年度ともその前年度卒業者の翌月末現在での状況である）。年報統計の一般専門学校の一般は専門を特定したものではなく、日本女子大学は勿論ここに入っているが、医歯薬系も、芸術系も入っている。

二　家庭生活

(一)　結婚の有無

本調査の対象者においては、その九三・八％までが既婚者である（表-28）。これは大正期の本学卒業生の既婚率九二・九％および戦後の本学卒業生の既婚率九二・七％を共にわずかずつながら上回っている。その背景には様々な形での結婚奨励が行われた戦時下の特殊な状況があったものと考えられる。これを時期別にみると、中期でわずかながら未婚率が高くなっている。とりわけ三九回生（昭和十六年十二月卒業）では九・三％と、回生全体で最も高い未婚率を示している。

既婚者について、夫と同居か別居か、さらには離別か死別かをたずねてみると、「現在夫と同居」している者が六七・八%で最も多く、次いで「夫と死別」した者二七・九%で、「夫と離別」した者および「現在夫と別居」している者は共にごく少数である（表-29）。

また夫と離別または死別した者のうち、その後再婚した者はわずか五・八%にすぎず、再婚していない者が圧倒的に多いが、時期別にみると後期に再婚した者が多くなっている（表-30）。

夫と死別した者について死別の理由をみると、「病気」が八六・六%で最も高く、次いで「戦死（戦病死を含む）」一〇・四%、「事故」一・七%、「戦災」〇・五%となっている。つまり夫と死別した者のほぼ一割が、戦争により夫

表-28　未・既婚　(%)

学部・時期	総数	未婚	既婚	不明	無答
計	1,537	5.7	93.8	0.3	0.1
家政	364	2.5	97.0	0.5	—
師範家政	565	5.3	94.3	0.2	0.2
社会事業	111	11.7	87.4	0.9	—
国文	284	6.7	93.0	—	0.4
英文	161	6.2	93.2	0.6	—
高等	26	3.8	96.2	—	—
本科	26	23.1	76.9	—	—
前期	599	5.3	94.3	0.2	0.2
中期	396	7.1	92.6	0.3	0.3
後期	542	5.2	94.3	0.6	—

表-29　夫と同居・別居・離別・死別　(%)

学部・時期	既婚該当数	同居	別居	離別	死別	不明
計	1,442	67.8	1.0	3.3	27.9	0.1
家政	353	66.3	—	3.1	30.0	—
師範家政	533	73.2	0.9	2.8	23.1	—
社会事業	97	71.1	2.1	2.1	24.7	—
国文	264	61.4	1.5	4.2	32.6	0.4
英文	150	64.7	2.0	3.3	30.0	—
高等	25	48.0	4.0	8.0	40.0	—
本科	20	65.0	—	5.0	30.0	—
前期	565	55.6	0.7	2.3	41.2	0.2
中期	366	69.7	1.1	3.0	26.2	—
後期	511	79.8	1.4	4.5	14.3	—

を失っている。さらにこれを時期別にみると、戦争により夫を失った者は中期でわずかながら多く、とりわけ三七回生では夫と死別した者の三割が戦争により夫を失っている。このように中期で卒業後の家庭生活への戦争の影響が若干強くみられる。

また、本調査対象者の年齢が五十五歳から七十四歳までと、かなりの高年齢者が含まれていることを考えると、この戦争により夫を失った比率は決して低いものとはいえない。

(二) 結婚年齢

表-30　再婚の有無　(%)

学部・時期	離別・死別該当数	再婚した	再婚しない	不明
計	449	5.8	76.4	17.8
家政	119	10.1	68.1	21.8
師範家政	138	3.6	79.7	16.7
社会事業	26	3.8	73.1	23.1
国文	97	4.1	80.4	15.5
英文	50	8.0	78.0	14.0
高等	12	—	91.7	8.3
本科	7	—	71.4	28.6
前期	246	2.4	72.8	24.8
中期	107	7.5	83.2	9.3
後期	96	12.5	78.1	9.4

表-31　死別者内訳　(%)

	死別者該当	病気	戦死	戦災	事故	その他
計	402	86.6	10.4	0.5	1.7	0.7
家政	108	88.0	11.1	—	—	0.9
師範家政	123	86.2	9.8	—	4.1	—
社会事業	24	91.7	8.3	—	—	—
国文	86	81.4	14.0	1.2	1.2	2.3
英文	45	86.7	8.9	2.2	2.2	—
高等	10	100.0	—	—	—	—
本科	6	100.0	—	—	—	—
前期	233	87.1	9.9	0.9	1.7	0.4
中期	96	83.3	12.5	—	3.1	1.0
後期	73	89.0	9.6	—	—	1.4

表-32 結婚年齢 (%)

区分 / 結婚年齢	大正期	昭和前期 既婚者該当	昭和前期 前期	昭和前期 中期	昭和前期 後期
20歳以下	2.8	3.9	2.8	1.6	6.7
21歳	11.9	10.2	8.1	8.5	13.7
22〃	13.2	18.2	16.6	19.9	18.8
23〃	15.4	17.3	19.5	15.8	16.0
24〃	13.9	14.1	14.2	16.1	12.5
25〃	12.1	10.1	9.9	13.4	7.8
26〃	6.8	6.4	6.0	4.9	7.8
27〃	6.8	4.5	5.5	3.6	4.1
28〃	4.0	3.9	4.6	4.1	2.9
29〃	2.3	2.8	2.8	3.0	2.5
30歳以上	10.9	7.0	8.0	7.7	5.5
不明	—	0.3	0.5	—	0.2
無答	1.3	1.4	1.4	1.4	1.4

結婚年齢は表-32のとおりで、既婚者のほぼ七割が、二十一歳から二十五歳にかけて結婚している。最も多数が結婚している年齢は二十二歳で、次いで二十三歳、二十四歳の順である。時期別では後期で結婚年齢が低くなっている点が注目される。

これを大正期の卒業生の結婚年齢（前掲『大正の女子教育』二五〇頁）と比較すると、大正期では最も多数が結婚している年齢は二十三歳で、次いで二十四歳、二十二歳の順であり、三十歳以上で結婚した者も昭和前期より多いなど、全体的に昭和前期の卒業生の結婚年齢の方が若干低くなっている。

では、当時の一般の女性の結婚年齢は何歳ぐらいであったのだろうか。内閣統計局編纂「日本帝国人口動態統計」によれば、大正期では、大正年間を通してその平均初婚年齢が約二十三歳、最頻結婚年齢が二十歳と一定していたのに対し、昭和前期の女子の平均初婚年齢は二十三歳から二十五歳へと中期から後期にかけて徐々に高まり、さらに実際に最も多数が結婚している年齢も、二十歳から二十四歳へと後期になるほど高くなっている（表-33）。これは、一般的には人的資源確保のための女子に対する早期結婚の奨励も戦時動員とは両立しがたい状況であったことを示すものといえる。

このような一般の傾向に対して、本学の卒業生の結婚年齢は後期で逆に低くなっており、同じ戦時下にあって異なる状況を呈している。その理由としては、一つには後期の繰り上げ卒業の影響が考えられるが、後期に学生数が急増し、逆に退学者が減少している点にもいえるように、苛酷な動員から逃れるためであったとも考えられる。同時に、

それが可能であった本学卒業生のめぐまれた社会階層がうかがえるのである。

表-33　平均初婚年齢および最頻結婚年齢

年次	平均初婚年齢	最頻年齢（順位別）		
		第1位	第2位	第3位
大正15年 昭和1年	23.1歳	20歳	21歳	22歳
2	23.1	20	21	19
3	23.1	20	21	19
4	23.2	20	21	22
5	23.2	20	21	22
6	23.3	20	21	22
7	23.4	21	20	22
8	23.6	21	22	20
9	23.7	22	21	20
10	23.8	21	22	23
11	23.9	22	21	23
12	24.2	22	21	23
13	24.4	22	23	21
14	24.5	22	23	21
15	24.6	22	23	21
16	24.3	22	21	23
17	25.3	23	24	22
18	25.0	24	23	22
22	22.9	22	21	23
23	23.0	22	21	23

昭和19年～21年は資料がないため省略した。22年以降は満年齢である。（厚生省編「人口動態統計」および内閣統計局編「日本帝国人口動態統計」より）

(三) 配偶者

結婚時の配偶者の主な職業は、表-34の通りで事務的業務が最も多く、次いで官吏、医師、大学教員、軍人、中学校・女学校・高等学校教員、旧専門学校・旧高等学校教員が続いている。これを同じく大正期の卒業生の配偶者の職業（前掲『大正の女子教育』二五一頁）と比較すると、上位六位までの職業に関しては三位と四位が入れかわっただけで、同じ職種によって占められており、いずれも大正期同様、高い社会階層であることがわかる。

なお配偶者が軍人であった者は、時期別にみると後期に最も多くなっているが、後期は太平洋戦争突入後の国家総力戦態勢にあったのであり、当然の結果ともいえる。

次に配偶者の職業と父親の職業の関連をみてみると、先に述べた通り、父親の職業で最も多いのは、配偶者の場合

表-34　配偶者の職業　(%)

職業＼時期	既婚者該当	前期	中期	後期
事務的業務	37.9	35.9	39.3	38.9
官吏	14.7	15.4	15.0	13.7
医師	12.8	11.7	15.3	12.1
大学教員	6.5	5.5	6.3	7.8
軍人	6.0	4.2	5.7	8.0
中学・高校教員	2.6	4.1	2.2	1.2
旧専門・旧高校教員	2.4	1.8	1.4	3.9
出版・放送関係	2.1	3.4	1.4	1.4
研究員	1.8	2.3	1.1	1.8

表-35　子どもの数　(%)

子どもの数＼時期	既婚者該当	前期	中期	後期
子どもなし	9.1	9.6	9.6	8.2
1　人	14.1	11.9	11.7	18.4
2　人	31.8	19.3	30.3	46.6
3　人	24.1	22.1	31.4	21.1
4　人	12.7	20.4	12.0	4.7
5　人	5.1	9.9	3.6	1.0
6　人	1.9	4.2	0.8	—
7人以上	0.8	2.1	—	—
無　答	0.3	0.5	0.5	—

表-36　子どもの数の推移　(%)

子どもの数＼区分	大正の卒業生	昭和前期の卒業生	戦後の卒業生
子どもなし	9.3	9.1	15.4
1　人	12.5	14.1	28.4
2　人	17.3	31.8	45.7
3　人	18.4	24.1	9.8
4　人	16.4	12.7	—
5　人	11.6	5.1	0.7
6　人	3.7	1.9	—
7人以上	3.1	0.8	—
無　答	1.7	0.3	—

同様、事務的業務であり、次いで医師・管理的職業・官吏・会社経営の順となっており、配偶者の職業と父親の職業はかなり似かよった傾向を示している。

(四) 子　ど　も

人的資源の確保のために早期結婚が奨励され、多子多産が褒賞された戦時期から、社会情勢が大きく変化した戦後にかけて、本学の卒業生は何人ぐらいの子どもをもったのであろうか。

全般的な傾向をみると、二人の子どもをもった者が最も多く、次いで三人・一人・四人の順で、二人か三人の子どもをもった者が既婚者の半数以上を占めている。これを時期別にみると前期の卒業生に子どもの数が最も多く、中期から後期にかけて子どもの数は急速に減少している（表-35）。これは、前述のような戦時下の多子多産の奨励策にもかかわらず、戦争の激化の中でかえって子どもの数が減少したことを示しており興味深い。加えて戦後の社会情勢の変化がさらに大きく子どもの数を減少させたと推察される。

次に、昭和前期の卒業生の子どもの数を他の時期の卒業生の子どもの数と比較してみると、昭和前期の卒業生の子どもの数は、二人か一人の子どもをもつ者が既婚者の七割以上を占める戦後の卒業生よりは明らかに多いものの、三人・二人・四人・さらには五人以上の子持ちもかなりあった大正期の卒業生よりは減少している（表-36）。しかし前述のように、昭和前期もその前期と後期では子どもの状況はかな

表-37　現在の生活形態

学部・時期	総数	単身	夫婦のみ	家族・親族と同居	家族・親族以外と同居	ホームなどの施設	その他	不明	無答
計	1,537	14.2	37.6	44.0	1.2	0.3	1.7	0.5	0.5
家政	364	12.9	39.8	44.0	0.8	—	1.6	0.5	0.3
師範家政	565	11.5	40.4	44.4	0.9	0.2	1.6	0.4	0.7
社会事業	111	17.1	32.4	40.5	3.6	0.9	2.7	1.8	0.9
国文	284	17.6	31.0	48.2	0.7	0.4	1.8	—	0.4
英文	161	14.9	39.1	42.9	—	—	1.2	1.2	0.6
高等	26	26.9	38.5	23.1	11.5	—	—	—	—
本科	26	23.1	30.8	34.6	3.8	3.8	3.8	—	—
前期	599	22.4	34.4	39.1	1.2	0.3	2.0	0.3	0.3
中期	396	12.1	40.2	43.2	1.3	0.3	1.8	0.3	1.0
後期	542	6.6	39.3	50.2	1.1	0.2	1.3	0.9	0.4

り異なり、前期は大正期とほぼ似た傾向にあるが、後期では戦後の卒業生に近くなっている。

(五) 現在の生活形態

未婚・既婚を問わず、昭和前期の卒業生たちは現在どのような生活形態をとっているのであろうか。

全体としては「家族・親族と同居」が四四・〇%で最も多く、次いで「夫婦のみ」三七・六%、「単身」一四・二%と続き、それ以外の生活形態は少ない（表-37）。これを学部別にみると、調査対象者は少ないが、高等学部および本科に「単身」が多く、逆に「家族・親族と同居」が少なくなっている。これは高等学部に夫と離別・死別した者が多く、本科では未婚率が高いことなどによるものと考えられる。次に時期別にみると、前期に「単身」が最も多く、時期が進むにつれ「単身」が減り、「家族・親族と同居」する者が増加している。これには年齢的なものが大きく影響しているものと考えられる。

三　職業生活

本学の昭和前期の卒業者で、卒業直後に職業生活に入った者は、前節で概観したとおり前期・中期では三〇%、三六%であるが、後期には戦争により極めて多くの者が職業に就くことを余儀なくされた。

本節では、まず卒業直後の職種がどのようなものであったかを調べ、さらにその後、戦後の長い混乱期も経た現在までに、どのように職業生活が経験されてきたか、調査結果を検討し、戦後の新しい時代への対応をみよう。

(一)　卒業直後の職業

卒業直後に就職した者について、その職種につき大きく八領域にまとめたのが表-38である。表-39は大正期における該当の資料である（領域の分類は実情の変化に伴い、同じにはなっていない）。

大正期では、高女教員をはじめ、本学の助手や寮監、幼・小教員といった教育関係への就職で七七%を占め、その他桜楓会を含めると八〇%が学校関係への就職となっており、それ以外の分野に就職した者はごく僅かにすぎなかった。しかし、前期・中期・後期と、時期を経てくるにつれ、職域が拡大していっている。昭和期においては、表-38に示されるとおり、教育関係全体で四三%となり、いわゆる事務的職種やタイピスト・図書館司書、出版・放送関係を含む書記的・技能的領域に二二%、大学・研究所関係が一二%あるほか、後期の戦時中には当然ながら徴用が多くなっている。徴用された仕事の内容は多様である。

学部別では、師範家政がやはり教員になっている率が高く、いわゆる事務的領域（書記的・技能的職業）にはあまり進出していないことがわかる。しかし、どの学部に関しても戦時体制下の社会情勢の変化につれて、卒業後に職業戦

表-38　卒業直後の職業

(%)

		実数	経営・管理	公務関係	自由・専門的	書記的技能的	教育関係	福祉・保健	商業・自営業	徴用	その他不明
合計		649	0.2	5.6	11.7	21.9	42.7	3.2	1.1	12.5	1.1
時期別	前期	186	—	5.9	11.3	21.0	53.2	7.0	1.6	—	—
	中期	150	—	4.7	14.7	26.0	46.0	4.0	0.7	2.0	2.0
	後期	313	0.3	6.1	10.5	20.4	34.8	0.6	1.0	24.9	1.3
学部別	家政	90	—	4.4	16.7	23.3	25.6	3.3	1.1	24.4	1.1
	師範家政	290	0.3	2.6	16.7	9.3	56.6	3.4	0.7	9.7	1.0
	社会事業	58	—	20.7	10.3	19.0	15.5	12.1	1.7	20.7	—
	国文	129	—	2.3	3.1	37.2	45.7	—	2.3	9.3	—
	英文	67	—	16.4	3.0	44.8	23.9	—	—	6.0	4.5
	高等学部	5	—	—	—	40.0	60.0	—	—	—	—
	本科	11	—	—	36.4	27.3	27.3	9.1	—	—	—

表-39　大正期の卒業直後の職業

(%)

		実数	団体役員	公務関係	出版関係・マスコミ・記者	会社員	研究員大学助手	高女教員	幼・小教員	その他教員寮監	桜楓会	栄養士	無答
	合計	281	0.4	5.7	4.3	3.9	7.1	57.7	5.7	6.4	3.2	0.7	5.0
時期別	大正前期	36	—	—	—	2.8	8.3	69.5	—	5.6	2.8	—	11.1
	大正中期	94	—	2.1	4.3	3.2	8.5	57.4	4.3	5.3	6.4	—	8.5
	大正後期	151	0.7	9.3	5.3	4.6	6.0	55.0	7.9	7.3	1.3	1.3	1.3
学部別	家政学部	64	—	9.4	1.5	4.7	6.3	35.9	12.5	9.4	10.9	3.1	6.3
	家政理学部	132	—	0.8	0.8	2.3	9.1	71.2	2.3	5.3	1.5	—	6.8
	社会事業学部	16	—	43.8	6.3	12.5	—	6.3	18.8	12.5	—	—	—
	国文学部	45	—	4.4	15.6	2.2	2.2	66.7	4.4	2.2	—	—	2.2
	英文学部	24	4.2	—	8.3	8.3	12.5	58.3	—	8.3	—	—	—

(資料)　『大正期の女子教育』P247表16　卒業生の就職の職種分より引用

表-40　卒業直後の職種（細分類）

		実数	%
合計		624	100.0
	経営・管理的職業	1	0.2
	公務員	37	5,7
自由・専門	大学・専門学校教員	34	5.2
	研究員	41	6.3
	宗教関係	1	0.2
書記・技能	翻訳・通訳	7	1.1
	出版・放送関係	39	6.0
	図書館司書	14	2.2
	タイピスト・秘書	13	2.0
	一般事務	66	10.7
教育	幼稚園教諭・保母	12	1.8
	小学校教諭	14	2.2
	高女教員	232	35.7
	その他各種学校など	19	2.9
福利	福祉関係	7	1.1
	保健関係	1	0.2
	栄養士	13	2.0
	商業	1	0.8
	製造業	2	0.3
	徴用(軍関係)	48	7.4
	〃（官公庁）	9	1.4
	〃（一般企業）	20	3.7
	その他不明	10	1.5

線に駆り立てられた者には、大正期ではみられなかったさまざまな、とはいってもそれは軍需的・国家総動員体制の中でのことではあるが、職業が拡げられていたことは確かである。表-38をさらに細分類したのが表-40である。この表-40をみると大正期の卒業生が本学の助手や研究室の手伝いや、寮監といった母校の関連する場所に進路をとる者が少なくなかった状況と比べると、昭和前期の状況が相当に多様化していることがわかる。それは女子大卒業者の最大の進路であった高女教員の比率の推移がその状況を示す一例となると思うが、大正期全期で高女教員に進路をとった者が五七・七%もあるのに、昭和前期の全期では高女教員となった者は三五・七%と全体の中で占める比率は低くなっており、それだけ他の領域に進出した比率が高いことがわかる（表-40）。

(二)　現在までの職業経験

前節において卒業直後に職業をもった者についての職種を一覧したが、本節では、それから現在までの生活の中でどのように職業生活を経験してきたかを概観する。

まず卒業時期別・学部別に職業経験の有無を示したのが表-41である。

表-41　職業経験の有無（時期別・学部別）　(%)

		総数	現職あり 継続	現職あり 中断	過去にあり	アルバイト内職のみあり	全くない	不明無答
合計		1,537	5.6	14.5	43.1	5.5	19.5	10.8
時期別	前期	599	4.5	9.3	41.4	5.5	22.9	16.3
	中期	396	5.3	13.6	42.7	6.8	20.7	10.9
	後期	542	7.0	20.8	45.4	4.4	14.9	7.4
学部別	家政学部	364	2.5	10.4	34.6	5.8	29.4	17.3
	師範家政	565	6.4	17.3	44.8	4.4	18.9	8.2
	社会事業	111	11.7	12.6	48.6	2.7	12.6	11.7
	国文学部	284	7.0	13.4	47.5	6.0	14.8	11.3
	英文学部	161	3.7	18.0	43.5	9.3	12.4	13.0
	高等学部	26	—	15.4	42.3	7.7	15.4	19.2
	本科	26	7.7	7.7	53.8	3.8	23.1	3.8

太平洋戦争の前・戦中・戦後を通して現在まで、三七～五四年の長きにわたる学校卒業後の職業である。空襲罹災・疎開・夫や兄弟の戦死・引き揚げ・農地解放・インフレ・預金封鎖・食糧難など生活難に遭遇し、それに対処する柱となり、戦後の急激な価値観の変動、与えられた参政権、やがて朝鮮動乱による特需ブームで急速な社会・経済情勢の変化を体験し、高度経済成長は神武景気・岩戸景気とよばれるなど、生活状況は急転回をしてきたのである。

このような社会環境の中で、高等教育修了までをほぼ軍国主義教育一色の中で過ごして来たといってよい昭和前期の卒業生たちは、どのように対応し、生活してきたのであろうか。

このような情勢の中で、何らかの職業経験を持った者は、全体の約七〇%であり、全く持たなかった者が約二〇%、残り一〇%は無答又は不明の者である。

学部別にみると、家政学部では全く職業を持たなかったとする者が三〇%に近く、他に比べて多くなっている。卒業時期別には前期の卒業生の約二三%は職業経験を持たない。

現職に就いている比率も、家政学部は最も低く約一三%であり、社会事業学部・師範家政学部の「現職あり」は、それぞれ約二四%で四人に一人が現職をもっている。社会事業学部と英文学部で

は、「職業経験なし」と答えた者は一二・五%だから、八人に一人ということになる。

教職の免許状をもつ師範家政学部で、職業を持ったことがない、という者が一八・九%と約二割近くにのぼっていることはやや意外である。

卒業時期別にみると、戦争中の卒業の後期の者にはやはり前・中期に比して職業経験がないという者は少なくなっている。

この結果は、卒業直後の進路と同様の傾向を示している（前掲表-24「卒業直後の進路」参照）。

本調査の対象である昭和前期の卒業者は、すでに卒業後二分の一世紀から三分の一世紀を経過し、かなりの高齢者も混じることを考えると、現職の有無を問うことは当を得ない。また現職があっても中断期間の長い場合もあろうし、現職がなくても、長い勤続年数を既に勤め上げた定年退職後の場合もある。

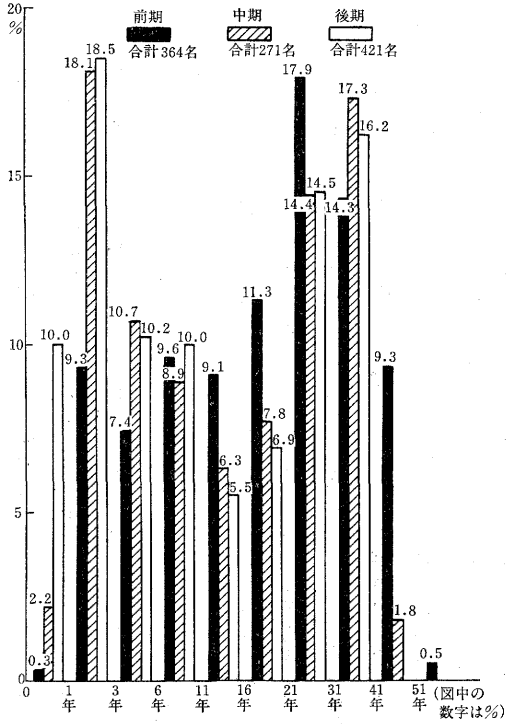
次に、表-42と図-2で勤続年数について検討しよう。時期別にみると、勤続年数一年未満や一年から三年未満という短い職業経験の比率が高いのは、後期の卒業者である。後期の二八・五%は三年未満で職業生活を終えてしまっている。前期では三年未満は合計して九・六%と一割に満たないし、中期では二〇・三%と約二割である。後期の卒業生は、学生時代から動員され、強制的に軍需関係で労働をさせられた経験があり、卒業後も、結婚して家庭に入る場合を除いては職業を持つことが当然視された社会環境の中で、希望しない者が駆り立てられていた状況があるから、その社会的な圧力から解き放たれるや、退職したという者も多いかと推測される。後期の職業経験ある者の五〇%は十年以内の勤続年数で離職していることになる。中期の勤続年数の中央値は勤続十六年以上二十年未満の所にあたるし、前期の勤続年数の中央値が二十一年以上三十年未満のところにあたるところからみても、後期の卒業生の勤続年数は短いことがわかる（もっとも、四十一年以上の永年勤続者には後期卒業生がいないことは、卒業年から四十一年以上経過していないのであるから当然のことである。同様に中期は五十一年以上にはならない）。

表-42　勤　続　年　数

(%)

学部別＼合計	実数	1年未満	1～2	3～5	6～10	11～15	16～20	21～30	31～40	41～50	51年以上	不明
合計	1,056	4.6	15.2	9.4	9.6	6.9	8.6	15.6	15.8	3.7	0.2	10.4
家政学部	194	7.2	14.9	8.8	7.7	7.2	10.8	16.0	11.9	2.1	0.5	12.9
師範家政学部	412	4.6	19.2	9.2	9.7	4.9	8.0	15.3	17.0	3.9	0.2	8.0
社会事業学部	84	8.3	17.9	16.7	7.1	4.8	6.0	14.3	15.5	4.8	—	4.8
国文学部	210	2.9	12.9	10.0	10.0	7.1	7.6	17.1	16.2	3.8	—	12.4
英文学部	120	2.5	8.3	5.8	13.3	11.7	10.0	13.3	17.5	2.5	—	15.0
高等学部	17	—	5.9	5.9	5.9	35.3	—	23.5	5.9	5.9	—	11.8
本　科	19	—	—	5.3	10.5	—	21.1	15.8	26.3	15.8	—	5.3

図-2　卒業の時期別勤続年数



(注) 勤続年数について不明・無答はこの図に示していないので，このヒストグラムは合計しても100%にはならない．

表-43　勤続年数と常勤・非常勤　(%)

勤続年数 ＼	実数	常勤のみ	常勤と非常勤	常勤と非常勤と自営	自営	非常勤のみ	不明無答
合計	1,056	58.4	21.5	1.3	1.3	9.0	8.5
0 ～ 1 年未満	49	98.0	—	—	—	2.0	—
1 ～ 3	161	91.3	2.5	—	—	6.2	—
3 ～ 6	99	78.8	9.1	—	—	9.1	—
6 ～ 11	101	65.3	18.8	1.0	2.0	12.9	—
11 ～ 16	73	47.9	34.2	—	—	17.8	—
16 ～ 21	91	42.9	34.1	2.2	2.2	18.7	—
21 ～ 31	165	50.9	36.4	1.2	3.0	8.5	—
31 ～ 41	167	55.1	30.5	4.2	1.8	6.6	1.8
41 ～ 51	39	43.6	46.2	2.6	2.6	5.1	—
51 年 以 上	2	—	50.0	50.0	—	—	—
不　明	81	6.2	—	—	—	—	93.8
無　答	28	21.4	32.1	—	3.6	17.9	25.0

学部別に勤続年数の中央値をみると、家政学部・師範家政学部・国文学部・英文学部の四学部において、勤続十六～二十年の段階にあたるのに対して、社会事業学部のみが丁度勤続十年と十一年以上の間、即ち十年にあたるところにあって、勤続年数が他学部よりも短い者の多いことがわかる。現段階では、何故そのような現象を生じているのかははっきりわからないのであるが、戦中から戦後にかけて、福祉関係部門の社会的整備が遅れ、職域が開拓されにくかったのか、あるいは、その職域の仕事の負担の重さが継続を困難にさせる状況にあったのか、推量の域を出ない。

卒業後、職業生活はどのようにして続けられてきたのか。家庭生活との両立、社会における受け入れ体制の不備、その他さまざまな困難な状況の中で、戦前・戦中・戦後の激動の時代に、高等教育を修了している女性としての職業経歴はどのように形成されてきたのか。その一端にふれる一助として、常勤の職業と非常勤の職業とが、職業経歴の上でどのように組み合わされているかについて、タイプ別に分類し、勤続年数の長さと何らかの関連があるかを検討しよう（表-43参照）。

勤続年数が三年以下というような場合には、ほとんど常勤のみであり（九〇%以上）、十年以下の勤務の場合も常勤勤務が六五～八〇%近くを占めるが、十一年以上と長くなるにつれて、表-43に示すとおり、

非常勤勤務もその勤務期間中に含まれる者がふえてきている。

このように勤務形態を変えながら勤続していくというのは、激動の社会背景の中で、多くが子どもを産み育て、家庭の主婦としての役割を荷いつつ、職業生活と両立させるというライフサイクル上での必要な形であったのか、あるいは、就職難で安定した職を得にくい状況からやむを得ず非常勤の職に就いたのかは、数字の上からは不明であるが、恐らくどちらの状況もあったことと推測される。

このようにしてみると、本調査の対象者のうちで職業経験のある者一、〇五六名が、実にさまざまな経過を辿りながら、二十年、三十年、四十年と、職業生活をもち、恐らくは経済的自立も達成し、また家族をはじめ社会にも貢献してきたと考えられる。非常勤の業務のみに携わった者は全体で九%いる。

次に、常勤勤務の場合の職種と、非常勤での勤務の職種にわけて、どのような仕事に就いているのか職域のひろが

表-44　職業領域のひろがり

	常勤の職種		非常勤の職種	
	実数	%	実数	%
	872	100.0	336	100.0
会社経営	10	1.1	1	0.3
その他の管理職	11	1.3	2	0.6
公務関係	67	7.7	5	1.5
議　員	3	0.3	—	—
家裁調停員	—	—	45	13.4
大学・短大教員	66	7.6	31	9.2
研究員	31	3.6	1	0.3
小説・随筆家	—	—	2	0.6
俳　優	—	—	1	0.3
一般事務	149	17.1	27	8.0
技　師	4	0.5	1	0.3
タイピスト・秘書	17	1.9	3	0.9
図書館司書	11	1.3	4	1.2
出版・放送	48	4.6	9	2.7
翻訳・通訳	13	1.5	4	1.2
幼稚園教諭・保母	11	1.3	3	0.9
小学校教員	19	2.2	—	—
中・高教員(含高女)	335	38.4	91	27.1
各種学校・塾教師	10	1.1	23	6.8
けいこごと師範	—	—	19	5.7
その他教育関係	17	1.9	10	3.0
ケースワーカー	3	0.3	12	3.6
社会福祉司	3	0.3	—	—
施設指導員	6	0.7	2	0.6
保健婦	2	0.2	—	—
栄養士	15	1.7	3	0.9
和・洋裁	1	0.1	5	1.5
商　業	14	1.6	6	1.8
農林業	1	0.1	—	—
製造業	2	0.2	—	—
その他・不明	12	1.4	33	9.8

りについてみたのが、表-44である。

この数値は常勤で職業を持った場合、転職している者においては、最も長期間従事していた職種をその個人の常勤の職種とし、同様に非常勤で職業を持った場合、いくつかの種類の非常勤での職種の内、最も長く従事していたものを一つだけとりあげて数えてある。

したがって、ある個人が、非常勤で仕事をしているうちに、それが常勤に変わったというような場合、たとえば中学の非常勤講師をしていたが、やがて常勤の教員になったという時は常勤と非常勤でそれぞれ、中学教員として数えられている。逆に、多くの職種をいろいろと変わってきたような場合、それがすべて常勤であれば、その中で最長期間の職種を一つだけとりあげて、その個人の経験した職業ということで数えてある。しかしこの場合もたとえば大学教員の場合など、助教授の期間の方が教授になってからよりも長い、というような場合でも当然「教授」としてとっている。このように、その個人の職業生活でその個人を代表できるような職業をできるだけとりあげ、機械的に就業期間の長短でとりあげるようなことはされていない。

表-44は、このような常勤一職種・非常勤一職種と制限した結果を示しているのにも拘わらず、常勤にしろ、非常勤にしろさまざまな職業領域への展開が認められ、それらがほとんどいずれの職種においても、高等教育修了によって付与された資格や免許を要する職業であったり、相当高度の知識・技能・判断力などの学識を要する職業であることがわかる。

四　社会活動

前節においては、卒業後の職業経験について検討したが、本節では職業生活以外の社会活動の参加状況および活動

表-45　社会活動参加状況　(%)

		総数	現在活動している	過去に活動した経験あり	経験なし	不明	無答
計		1,537	13.2	27.4	40.1	0.4	18.9
学部別	家政	364	8.8	28.3	39.8	—	23.1
	師範家政	565	14.5	28.3	40.7	0.5	15.9
	社会事業	111	18.9	28.8	31.5	—	20.7
	国文	284	13.4	26.8	40.5	0.7	18.7
	英文	161	14.9	23.6	42.2	—	19.3
	高等	26	7.7	23.1	42.3	3.8	23.1
	本科	26	15.4	23.1	46.2	—	15.4
時期別	前期	599	12.9	31.7	34.1	0.3	21.0
	中期	396	11.6	23.2	41.9	—	23.2
	後期	542	14.8	25.6	45.4	0.7	13.5

団体の種類についてみていくことにする。

ここでは、社会活動を、地域団体・有志団体・社会福祉団体・その他(宗教団体・職域団体)に大別し、これらの活動への参加の有無及び活動の種類について尋ねている。太平洋戦争を境として、活動団体の種類も当然異なることが予想されるので、考察にあたっては、太平洋戦争以前を「戦前」、以後を「戦後」、現在活動しているものを「現在」に分類して検討した。

(一)　社会活動参加状況

まず、社会活動参加状況についてみると、「現在活動している」者は一三・二%、「現在は活動していないが、過去に活動した経験がある」者は二七・四%と約四割の者が何らかの活動に参加した経験を持っている(表-45参照)。

学部別にみると、現在活動している者は、社会事業・本科・英文・師範家政学部等で多く、過去に活動した経験がある者は、社会事業・師範家政・家政学部等でやや多くなっている。

活動団体の種類では、戦前では地域婦人団体が最も多く、なかでも大日本連合婦人会が多い。次いで愛国婦人会・国防婦人会・女子青年団等となっている。有志団体では、YWCA(キリスト教女子青年会)・新婦

人協会・大政翼賛会・日赤篤志看護婦人会・ＷＩＬＰＦ（婦人国際平和自由連盟）等多彩である。社会福祉団体では日赤奉仕団、宗教団体ではキリスト教会・仏教婦人会等が挙げられている。

戦後では、圧倒的に地域婦人会・自治会婦人部等の地域婦人団体、小・中・高校ＰＴＡ役員を挙げる者が多い。いずれも会長・副会長等の要職に就いた経験を持つ者である。有志団体では、大学婦人協会が群を抜いており、私立校ＰＴＡ役員・ＷＩＬＰＦ・ＹＷＣＡ等がこれに続いている。その他、婦人有権者同盟・友の会・日本子どもを守る会・ガールスカウト・婦人科学者の会・主婦連合会・全国家庭科協会・新日本婦人の会・体育振興会等ヴァラィティに富んでいる。社会福祉団体では、日赤奉仕団・母子福祉協議会、宗教団体では、キリスト教会、職域団体では教職員組合等が主なものである。同窓会では桜楓会（本学卒業生）の役員が多い。また、趣味・学習サークル等の委員であった者もかなりある。

現在活動を続けている者では、大学婦人協会・地域婦人会・ＷＩＬＰＦ・ＹＷＣＡ・自治会・日赤奉仕団・更生保護婦人会・社会福祉協議会・教職員組合・キリスト教会・仏教関係の団体（禅会・立正校正会・創価学会）・桜楓会等の同窓会、各種学会の理事・役員が代表的なものである。その他、婦人有権者同盟・ガールスカウト・ライオネスクラブ・ユネスコ協会・新日本婦人の会・日本子どもを守る会・国際婦人教育振興会・日本国際連合婦人会・図書館友の会・主婦連合会・家庭科男女共修を進める会・社会教育全国協議会・青少年育成国民会議・草の実会・母親大会連絡会・働く母の会・交通安全母の会・全国里親会・国際ソロプチミスト・母子福祉協議会等多岐にわたっている。また、病院ボランティア・盲人福祉活動・いのちの電話等各種のボランティアグループで活動している者、趣味・学習グループ、各種研究会の講師・世話役等を引き受けている者も多い。その他学校法人の理事・評議員等の役職に就いている者もある。

表-46　公職参加状況　(%)

		総数	現在就いている	過去に就いたことあり	経験なし	不明	無答
計		1,537	7.6	6.8	64.4	0.5	20.6
学部別	家政	364	7.1	6.9	61.0	0.3	24.7
	師範家政	565	8.3	5.8	67.8	0.5	17.5
	社会事業	111	10.8	12.6	55.0	—	21.6
	国文	284	7.7	7.7	64.8	0.7	19.0
	英文	161	3.1	2.5	68.3	0.6	25.5
	高等	26	7.7	11.5	53.8	3.8	23.1
	本科	26	11.5	15.4	61.5	—	11.5
時期別	前期	599	8.3	12.0	57.1	0.5	22.0
	中期	396	7.1	3.3	65.2	—	24.5
	後期	542	7.2	3.7	72.0	0.9	16.2

(二) 公職参加状況

上記の活動以外に、国および地方自治体の議員・各種審議会委員・教育委員・人権擁護委員・家裁調停委員・民生委員等各種の公職に就いている者はどのくらいあるのであろうか。次に、公職への参加状況についてみると、現在就いている者は七・六%、過去に就いたことのある者は六・八%である。学部別の傾向をみると、現在就いている者、過去に就いたことのある者ともに、社会事業学部がそれぞれ一〇・八%、一二・六%と最も多く、本科・高等学部がこれに続いている（表-46参照）。

公職の種類では、戦前では、民生委員・保護司・教育委員・社会教育委員・家事科視学員等の役名が挙がっている。

戦後になるとその活動範囲も広がり、家裁調停委員・民生委員・教育委員・保護司・人権擁護委員等を初めとして、文部省・労働省・厚生省・通産省・農林省・郵政省・環境庁等国政レベルの各種審議会委員・地方自治体関係の各種委員を経験した者がかなりみられる。また国および地方自治体議員の経験者もある。

現在就いている者になると、その範囲は更に広がり、上記の役職の他に、家裁参与員・婦人少年室協助員・児童青少年関係の各種委員・各種相談員等が挙がっている。

以上、社会活動の参加状況について、その概況をみたのであるが、こ

表-47 生きがい (%)

	総数	研究・学習	芸術・芸能・趣味	旅行・スポーツ	社会活動	職業生活	家庭・家族	精神的なもの	その他	生きがいなし	不明	無答
計	1,537	16.7	29.0	5.2	5.5	6.2	19.2	7.7	2.2	0.5	4.2	3.6
家政	364	12.1	30.5	6.6	5.5	5.2	22.8	7.7	1.9	0.3	3.3	4.1
師範家政	565	14.2	29.7	4.8	5.5	6.7	21.6	6.4	2.7	0.4	4.2	3.9
社会事業	111	10.8	19.8	6.3	12.6	8.1	18.0	13.5	2.7	0.9	2.7	4.5
国文	284	24.3	33.8	3.2	3.5	6.0	10.6	8.5	1.8	0.4	4.9	3.2
英文	161	21.7	22.4	5.0	3.7	6.8	21.7	7.5	1.2	1.2	6.2	2.5
高等	26	26.9	30.8	11.5	—	3.8	3.8	11.5	—	—	7.7	3.8
本科	26	34.6	15.4	7.7	11.5	3.8	15.4	—	7.7	3.8	—	—
前期	599	17.9	29.4	6.3	4.7	3.8	18.4	7.8	1.8	0.7	4.7	4.5
中期	396	14.1	32.1	3.5	4.8	6.1	20.7	7.6	3.0	0.8	4.3	3.0
後期	542	17.2	26.2	5.2	6.8	9.0	19.0	7.6	2.0	0.2	3.7	3.1

れらの結果から戦時下の一時期、戦争への協力を余儀なくされたことがあったとしても、各期を通じ地域に根ざし、生活に根ざした活動が各地で地道に幅広く行われてきたことの一端をうかがい知ることができる。特に、地域婦人団体、公私立小・中・高校のＰＴＡ等の役員として活動してきた者の数の多さ、各種の福祉活動、学習活動に参加してきた者の層の厚さは、本学の教育を特色づけるものと言えるであろう。また、今回の調査対象となった卒業生の一割以上の者が戦後から現在まで、何らかの公職について活動していることにも、社会の一員として、リーダーとしての役割と責任の反映をみる思いがするのである。

五　生きがい

本調査対象者は前述のように、在学中あるいは卒業後に戦争の影響をもろに受け、厳しい状況を体験してきた者たちであるが、戦後三十数年を経た現在、何に最も生きがいを感じて生活をしているのであろうか。

まずはじめに生きがいの有無をみると、「生きがいなし」と答えた者は全体の〇・五％にすぎず、これに無答者を合わせても四％程度で、ほとんどの者が生きがいをもっていることは注目すべきである。

生きがいの内容の全般的な傾向としては、「芸術・芸能・趣味的活動」

が二九・〇%で最も多く、次いで「家庭・家族」一九・二%、「自分に関心のある研究や学習」一六・七%で、以下「精神的なもの（宗教など）」、「職業生活」、「社会活動（団体活動・ボランティア活動など）」、「旅行・スポーツなど」となっている（表-47）。

学部別にみると、社会事業学部に「社会活動」、「職業生活」、「精神的なもの」をあげる者の比率が高く、大学本科に「研究や学習」、「社会活動」をあげる者の比率が高い。このように、学部により生きがいにも多少異なる傾向がみられるが、これは学部の性格によるところが大きいものと推察される。

時期別では、「研究や学習」をあげた者が前期に最も多くみられる。前期に卒業した者たちは今やかなりの高年齢に達した者たちであるが、研究・学習に対する熱意の大きいことがうかがわれる。「社会活動」や「職業生活」をあげる者は後期に最も多い。これは対象者の年齢との関連によるところが大きいが、同時に女性の就労・育児に対する意識の変化も影響しているものと考えられる。

生きがいと「未婚・既婚」との関連をみると、未婚者に「研究や学習」（三〇・七%）、「精神的なもの」（一二・五%）、「職業生活」（一〇・二%）をあげる者の比率が高い。これに対し既婚者では「芸術・芸能・趣味的活動」（二九・九%）、「家庭・家族」（二〇・一%）をあげる者の比率が高く、両者には明らかに異なった傾向が認められる。

また「職業経験」との関連をみると、当然のことながら現在就業している者（「現在まで、継続して就業している者」および「現在就業しているが過去に中断したことがある者」）に「職業生活」および「研究や学習」を生きがいとする者が多く、両者を合わせるとその半数を占める。

さらに「勤務年数」との関連では、勤務年数が「二十一年以上」になると、「職業生活」および「研究や学習」をあげる者の比率が急速に高まってくる。

では、こうした女性の職業継続とも関わる「育児と母親の就労に対する考え方」との関連をみると、「職業生活」

表-48 「生きがい」と「育児と母親の就労」

(%)

育児と母親の就労 / 生きがい	総数	仕事に就くべきでない	就いてよい援助があれば	がいればよいお手伝いさん等	預けて就く専門機関に	その他	不明	無答
合計	1,537	42.1	28.5	8.5	7.3	4.2	1.2	8.1
研究や学習	256	39.5	25.4	9.8	9.0	5.9	0.4	10.2
芸術・芸能・趣味	445	41.8	30.6	9.4	7.0	2.5	1.1	7.6
旅行・スポーツ	80	43.8	20.0	8.8	13.8	2.5	1.3	10.0
社会活動	84	40.5	29.8	13.1	10.7	2.4	1.2	2.4
職業生活	96	29.2	37.5	8.3	7.3	6.3	1.0	10.4
家庭・家族	295	50.5	29.5	6.8	3.7	3.1	1.7	4.7
精神的なもの	118	35.6	32.2	5.1	10.2	7.6	0.8	8.5
その他	34	32.4	26.5	14.7	8.8	8.8	2.9	5.9
生きがいなし	8	50.0	12.5	—	12.5	—	—	25.0
不明	65	46.2	24.6	6.2	4.6	7.7	1.5	9.2
無答	56	48.2	16.1	5.4	1.8	5.4	3.6	19.6

表-49 老後のすごし方

老後のすごし方	実数	%
特に何も考えていない	71	4.3
好きなことをして気楽に過したい	497	30.0
孫の世話や家事を手伝って家族の一員として役立ちたい	138	8.3
けいこごとに専念したい	166	10.0
自分に関心のある勉強や研究をしたい	1,078	65.1
職業をみつけて働きたい	248	15.0
奉仕的な社会活動をしたい	491	29.7
その他	59	3.6
無答	9	0.5
該当者数	1,655	100.0
合計	2,757	166.5

(注) 多答式のため合計は100%を越える。

(資料)『女子の生涯教育』119頁，第30表。

を生きがいとしている者では「乳幼児をもつ母親は仕事に就くべきでない」と考える者の比率が二九・二％と最も低く、これに対して「家庭・家族」を生きがいとしている者では、五〇・五％と最も高くなっている（表-48参照）。このように就労志向の者と家庭志向の者とでは、育児と母親の就労に対する考え方には明らかな違いがみられる。

次に「社会活動・公職経験」との関連をみると、「現在社会活動をしている者」および「現在公職に就いている者」では共に「社会活動」が生きがいの第一位に挙がっており、それぞれの約三割を占めている。

以上のように、現在の生活で何に生きがいを求めているかについては、本学で受けた教育・専攻との関連はもちろんであるが、同時に卒業後の各自の生活経験との関連が深いと思われる。

昭和四十二年に戦後の本学卒業生（昭和二十二年卒業から同四十年卒業まで）を対象として実施した「女子大学卒業生の生活・意見調査」によれば、「老後のすごし方」として「自分に関心のある勉強や研究をしたい」と考えている者が六九％で最も多く、次いで「好きなことをして気楽にすごしたい」、「奉仕的な社会活動をしたい」がともに約三〇％を占め、「孫の世話や家事を手伝って家族の一員として役立ちたい」は八％に留まった（表-49）。

このように戦後の卒業生では、昭和前期の卒業生に比べて家庭や家族中心の生活よりも学習あるいは趣味的活動等といった自分のための生活、自己実現のための活動への関心が一層高まり、同時に社会活動の参加率にみられるように、社会的な関心もさらに広まりをみせている状況がうかがわれる。

昭和五十四年に総理府が実施した「婦人に関する世論調査」によれば、一般女性（五十五歳以上）で生きがいをもっている者は約六〇％であるが、年齢が高まるにつれてその比率は低下している。

生きがいの内容をみると、「子ども・孫」をあげた者が四〇％で最も多く、これに「家庭・家族」、「夫」「家事」等をあげた者を合わせると全体の六〇％以上を占めている。次いで「趣味」「自分の職業」と続き、その他のものは少ない。とりわけ「市民活動・社会奉仕などの社会参加」については、多答式回答にもかかわらず二％程度に留まって

いる。

このような一般女性の傾向に対して、本学卒業生ではほとんどの者が生きがいをもっていることは注目すべきである。また生きがいの内容も「家庭・家族」「職業生活」とならんで、「趣味」「研究・学習」あるいは「社会活動」等の比率が高く、家庭・家族中心の生活だけでなく、自分自身の生活をも重視する傾向がうかがわれる。

六　女子教育の方向

(一) 家庭科共修問題

現在高等学校における「家庭科」の指導についてはさまざまな議論がなされている。「家庭科」の基礎的領域である「家庭一般」という科目が、現行では女子のみ必修（四単位）と定められている（それに対応する男子の教科は「体育」である）。

この「家庭一般」の内容は、文部省の指導要領によれば、「衣食住及び保育などに関する基礎的知識と技術を家庭経営の立場から体験的・総合的に習得させ、家庭生活を合理的に営み、その充実向上を図る能力と実践的態度を育てる」というものである。

本調査では、この文部省の指導要領に明記されている「家庭一般」の科目内容を掲げ、このような「家庭一般」をどのような方法で履習させるのが適当と考えるかについて問うたので、その結果を報告する（図-3～図-8参照）。まず、図-3は全体についての比率であり、全体の六五％は男女が同じ扱いを受けることを是、としている。二五％は女子に男子よりも多くの「家庭一般」についての学習をすべきであると考えている。残りの一〇％は無回答であった。

つぎに出身の学部別にこの結果をみると、僅かではあるが、学部による差がみられる。

「家庭科」の履習に対する意識が、家政学部・師範家政学部と、他の社会事業・国文・英文などの学部出身者との間でやや異なる様子が図-3～8のグラフから見てとれる。具体的に指摘すると、それは、家庭科教育が現行で「女子のみ必修」とされているのに対して、この「女子のみ必修」の選択肢を選んでいる比率をみていくことでわかるわけである。これ以外の選択肢には、何らかの現状よりの改変の意図が含まれるのであって、女子が「必修」で家庭科を学習することを是とするのであっても、同時に男子にも「必修」で、あるいは「選択」ででも学習させようとする他の選択肢とは異なった意味合いがあることは当然である。図の4～6で、「女子のみ必修」の比率をみると、家政・師範家政学部ではいずれも二五%、約四分の一にあたり、国文学部が一六%、社会事業学部と英文学部とが、一一～一三%と減少していく。

図-3　高校「家庭一般」の履習（全数）

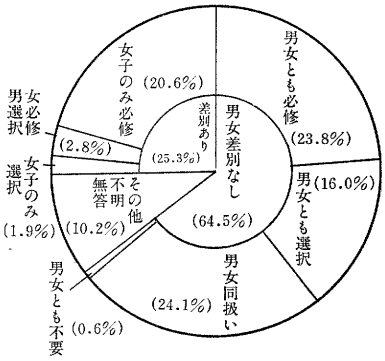


図-4　高校「一般家庭」の履習（家政学部）

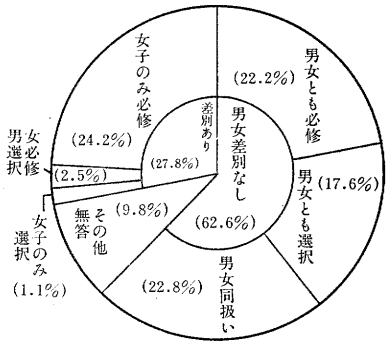


図-7　高校「家庭一般」の履習（国文学部）

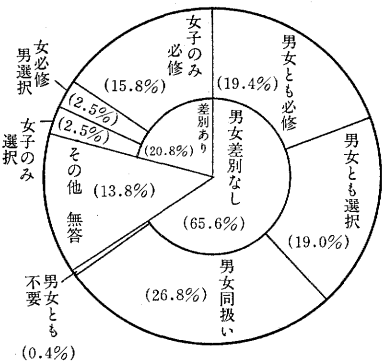


図-5　高校「家庭一般」の履習（師範家政学部）

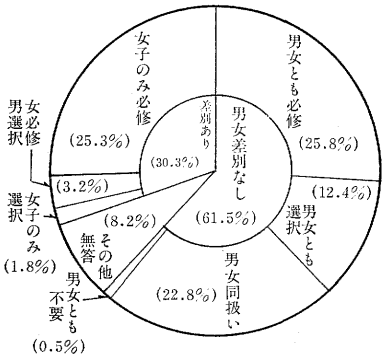


図-8　高校「家庭一般」の履習（英文学部）

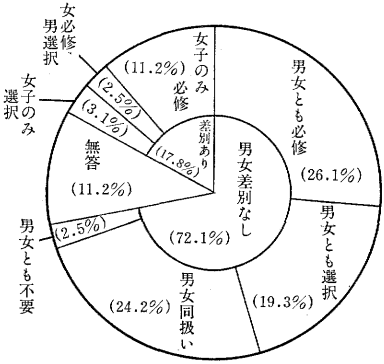
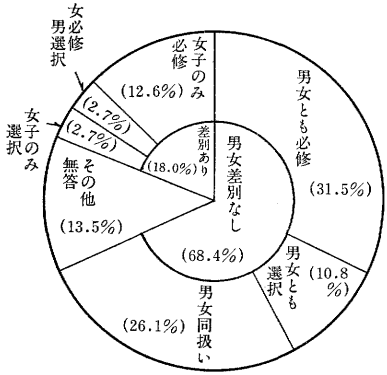


図-6　高校「家庭一般」の履習（社会事業学部）

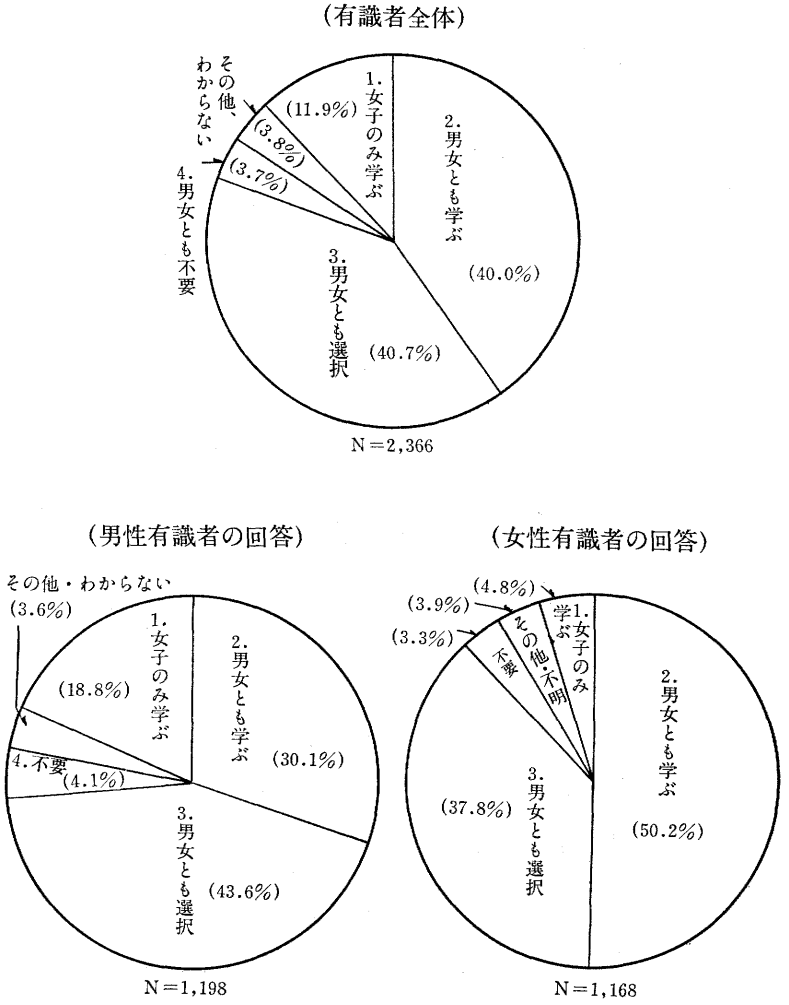


それでは「男子に必修」で家庭科教育を施そうとする回答についてみていくならば、最もそれの高いのは社会事業学部であって三二％と三分の一近くがそのように考えていることになり、英文学部と師範学政学部がいずれも二六％前後と四分の一の比率を示している。ここで最も低率は、国文学部であって二〇％に満たず、家政学部がそれに次いで二二％となっている（これは「男女とも必修」を選択した人の比率であるが、他には「男子にも必修」を意味する選択肢はないわけである）。

〈注〉この問題について、一九七七年十一月に内閣総理大臣官房婦人問題担当室の実施した「婦人問題に関する有識者調査」の中に、該当する調査項目があるので結果を参照してみる（なお有識者の構成と回答者数についてはグラフを参照）。設問の趣旨は本調査とほぼ同じで「現在、高等学校において女子は家庭科が必修科目となっていますが、これからの高校での家庭科教育についてはどのように思いますか」となっており、選択肢は、本調査より若干少なく、1家庭生活についての知識や技術を身につけるため女子だけ学ぶ。2家庭生活についての知識や技術を身につけるため男女とも学ぶ。3高校での家庭科を学ぶかどうかは男女とも本人の選択にまかせる。4男女とも高校で家庭科を学ぶ必要はない。5その他。6わからない。となっている。1、2は設問全体からみて、明示されてはいないが必修をさすと解釈できる。この結果も、本調査の結果と照合しやすくするために、円グラフに示したのが、図-9～10である。全回答者での結果と、男女別にしたものの総合結果が図-9である。有識者全体では、男女ともに必修又は選択でという共修論（等しい取り扱いによる）が八〇％で、「女子のみ必修」は一二％である。「女子のみ必修」が一二％、という比率だけを抜き出すと、社会事業学部や英文学部のそれと近いが、先述のとおり、選択肢が若干異ることを考慮せねばならず、また、有識者調査結果が、男性回答と女性回答との間で相当の開きのあることから、直ちにこの率のみで云々することは妥当ではない。女性有識者では、「女子のみ学ぶ」ことを是とする比率は五％にも満たないのである。

本学卒業生の結果と対比して興味のあるのは、次の男女別・職域別の有識者の回答状況である（図-10参照）。すなわち、本学卒業生の回答結果は、全体として男性有識者の回答に近く、しかも、男性の中でも、大学教員、文芸・著述家、主要労組役員などとではなく、法律家・医師と社会事業学部・英文学部が近く、管理的公務員や報道関係者と国文学部が近く、さらに大企業の役職者などの傾向と家政学部・師範家政学部の回答傾向が近いように見受けられる。

図-9・1　高校家庭科教育について



(資料)「婦人問題に関する有識者調査」より(総理府婦人問題担当室調査), 1977年11月実施。

図-9・2　高校家庭科教育について（つづき）

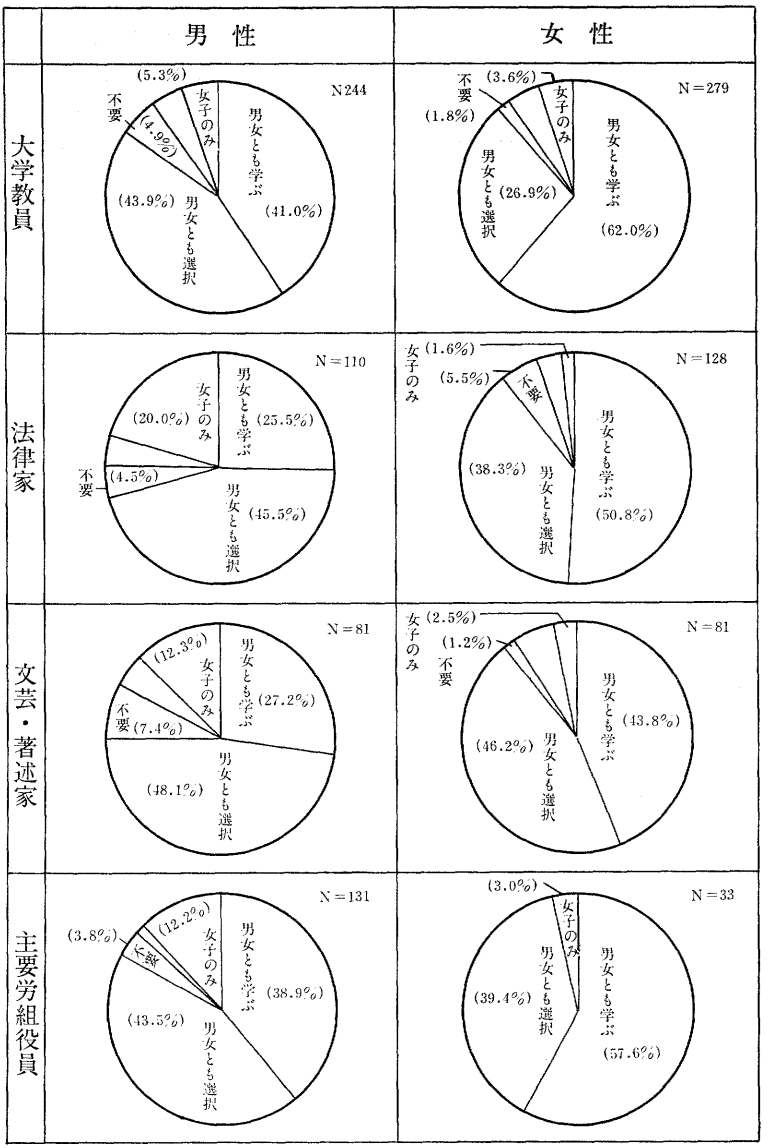
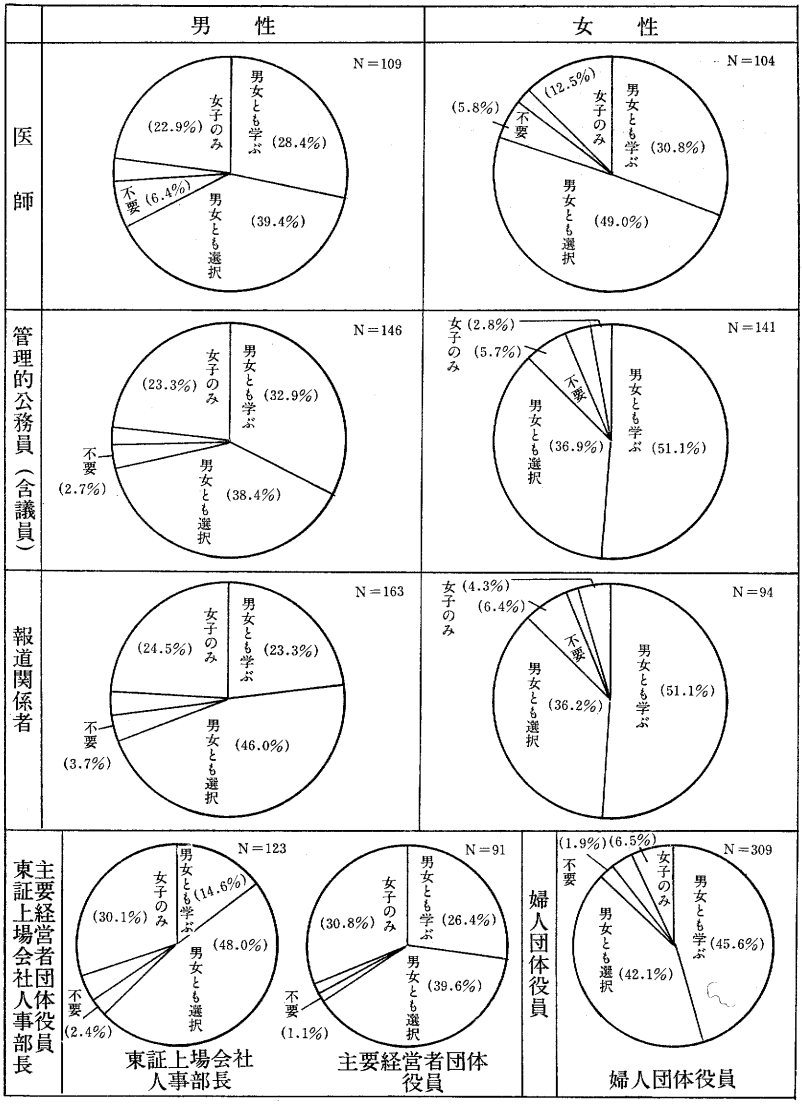


図-9・3　高校家庭科教育について（つづき）



高校家庭科教育の取り扱いをめぐっては、男女の性別役割を社会的にどのように受けとめるのかと直接・間接に連ってくる問題であると考えられる。

そこで、この問題と、夫と妻の家庭生活における家事労働に対する考え方や、乳幼児をもつ母親の就労に関する考え方との関連について調査結果をみていくことにする。

まず、「夫が日常の家事（炊事・掃除・洗濯など）を行うことについて」全体では、

1、妻の役割だから手を出すものではない（五・三%）。

2、おもに妻の役割だが夫が手伝っても差し支えない（五一・八%）。

3、妻だけの役割とせず、夫が手伝うのはよいことである（二八・〇%）。

4、夫と妻の共同の役割であって夫も分担すべきである（六・四%）。

となっている。

これと高校家庭科教育問題への回答とをクロス集計した計果が表-50である。

「家事は妻の役割、夫は手を出すものではない」という選択肢に回答した人々（八一名）が、女子に家庭科教育を、と考えることは当然と思われる。しかし、これらの人々のうち「女子のみ必修」「女子に必修・男女

表-50 「夫の家事労働」と「家庭科教育」

(%)

家庭科教育 / (妻の)夫の家事労働に対する意見	総数	女子のみ必修	男子選択女子必修	女子のみ選択	男女とも必修	男女とも選択	男女同扱い	男女とも不要	無答不明その他
合計	1,537	20.6	2.8	1.9	23.8	16.0	24.1	0.5	10.2
夫は手を出すものではない	81	43.2	2.5	4.9	17.3	12.3	14.8	—	4.9
手伝っても差し支えない	796	28.3	3.9	2.1	22.2	17.6	21.9	0.5	3.5
手伝うのはよいこと	431	10.7	1.4	1.4	30.9	16.0	33.9	0.9	5.0
夫は家事を分担すべき	98	5.1	2.0	—	35.7	16.3	31.6	—	9.2
その他・不明・無答	131	4.6	1.5	1.5	8.4	6.1	—	—	72.5

は選択」「女子のみ選択」と女子により多くの家庭科教育をと答えた人は合計五一％と約半数であって、「男女必修」「男女とも選択」「男女同扱」を合わせて四五％となり、大差ない比率を示している。これは、現実の回答者の家庭生活では「妻の役割で夫は手を出さないもの」であっても将来の若い世代では変わっていくだろうという意向を表明した人が半数近くにのぼったのだと解される。なお、「夫自身が、家事は妻の役割であって手を出すものではないと考えている」と回答した人は全体の約一八％（二七五名）にのぼり、「夫自身が、家事は共同の役割で分担すべきと考えている」と回答している人は二・二％（三四名）しかいないことと考え合わせてみるとき、このような了解が可能となるであろう。

全体の五二％と最も回答の多い「家事はおもに妻の役割だが、夫が手伝ってもさしつかえない」とする人々では、その約三分の一が「女子のみ必修」「女子のみ選択」として、女子に家庭科教育がより必要と考えているが、六二％の人は、「男女とも必修」「男女とも選択」「同じ扱い」を考えており、一方、四名の人は「不要」と答えている。「妻だけの役割としない」「分担すべき」は合わせて五二九名、三四％である。これらの人々では当然「男女とも必修」「男女とも選択」「同じ扱い」が増え、八二％に達する。しかし、女子により多くの家庭科教育を必要と考える人も一二％ほどであった。

乳幼児をもつ母親が、育児を他人に委ねて仕事をもつことについては、従来、子どもの人格発達に及ぼす母性の重要性を強調する立場からは好ましくない影響を懸念する声が高く、また他方、女性の社会的進出を望ましいと考える立場からは、適当な母性の代理者、又は保育に関する専門機関に領けて、仕事に就くことが是とされる。

本調査の結果でも、学齢に達しない乳幼児をもつ母親が仕事をもつことについての考えを問うたところ、四二％が「仕事に就くべきでない」と回答し、四四％が「家族の援助」や、「お手伝いさん」あるいは「保育所」などに託しても「差し支えない」と回答している。

さてこの育児観と、家庭科教育に対する考え方とはどのように関連しているであろうか。クロス集計の結果は表-51のとおりである。「乳幼児期は母親の手で育てるべきである」と考える人では、女子により多くの家庭科教育を課すべきと思う人の比率は高く、「女子のみ必修」は、三二%で、約三分の一である。それに対し「親族の手があれば」と譲歩する立場では約二五%と四分の一になり、「手伝いの人などで担当者が得られれば」という人では「女子のみ必修」が一五%と減り、さらに「保育の専門施設を利用して、就労してよい」という立場をとる場合には、一〇%以下が、「女子のみ必修」を唱えるだけとなる。

このように、高校での家庭科教育の問題をめぐって、家庭内での夫と妻の役割認識のちがいや、乳幼児をもつ母親の就労についての考え方のちがいが、浮き彫りにされてくるのは興味深く思われる。

(二) 今後の女子教育

前節では、家庭科共修の問題についてみたのであるが、ここでは、今後の女子教育についての意見を要約してみよう。

全般的な傾向としては、「女子ということにこだわらず、人間としてどのように生きるかを教育することが大切である」「いつの時代でも変わることのない信念を持った人間として、情操・知性ともに豊かに育て

表-51 「育児と母親の就労」と「家庭科教育」

(%)

育児と母親の就労＼家庭科教育	総数	男女別扱い			男女に等しい扱い				
		必修女子のみ	選択女子のみ	男子選択女子必修	男女必修	男女選択	男女同扱	不要男女とも	無答不明その他
合計	1,537	20.6	1.9	2.8	23.8	16.0	24.1	0.5	10.2
母親が育て仕事に就くべきではない	647	28.3	2.3	4.0	24.9	14.5	21.5	0.5	3.9
親族の援助があればよい	438	21.5	2.3	2.3	23.5	20.1	26.9	1.5	3.0
保育担当者がいればよい	131	13.7	0.8	2.3	26.7	20.6	29.8	—	4.6
保育の専門機関等を利用してよい	112	8.9	—	—	36.6	9.8	29.3	—	5.4
その他・不明・無答	209	5.7	1.4	2.4	12.4	12.4	14.8	—	51.2

ること」「女子を教育するのでなく、人間として、自分は何の能力があるのか、何が好きなのかをよくみつめ、それを伸ばすような教育がよい」「男女がどのように協調して、一個の人間として生きるのか、そのためには社会はどうあるべきか、広い視野で女子教育を考えたい」といった意見に代表されるように、まず人間として教育をすることが必要であるといった意見が多い。この根底として、「成瀬先生の理想とされた女子をまず〝人として〟教育する女子教育の基本精神は今もなお受け継がれていくべきだと思う」「知・情・意のバランスのとれた教育が望ましい。結局、創立者の打ち立てられた三大綱領に集約される」といった創立者の精神が挙げられている。

また、「自分自身の才能を充分に生かして、一人の人間として存在感のある一生を過せるように指導してほしい」「その人の持ち味を人生の軌道の上で充分に伸展できるような教育を行ってほしい」「女性だから男性だからと肩ひじを張らずに、本人の適性・能力・希望に応じた教育が望ましい」「自由に各自の天分を発揮できるよう個性に応じた教育を希望する」と、個人の適性・能力の伸長、個性の発揮など個を基本とする教育が望まれている。

しかし同時に、「女子には子女を産み育てるという男子にはできない大切な使命のあることを考えて、家事・育児の主導権をにぎるだけの能力を養っておかなくてはならない」「女性であること、将来母となり、家庭を治める立場にあることを自覚せしめる教育がなされねばならないと思う」「男女には、自ら特性の相異があり、男はやはり男らしく、女は女らしくあってこそ、社会の健全な成員といえるのではないか」「女子には将来、結婚・妊娠・出産を通して、家庭に落着くよう、母となる教育が必要である」「女は内にあって家を守るのが本来の役割と思う」「女子・男子それぞれに天分があるはず、女子は女子らしく天分をいかしその任務を果すような教育であってほしい」「男女は同権であっても同種ではない。女の仕事に誇りを持たせてほしい」「女性の特性を発揮できる職場への進出を願っている」「女性らしさ、女性にしかないよさをしっかり身につける教育を希望する」「人間として同権でも、本来の使命は男女で異なる。外にばかり目を向けずに、子どもの教育をしっかりしてほしい」「女子の特色を発揮することこそ

本当の男女同権である」と女子の特性・天分を挙げ、男女の役割の相異を説く意見も目立っている。

反面、「男子・女子の区別は必要ない。お互にあらゆる分野に可能性を求めて進出していくことが望ましい」「男女の区別なく教育してこそはじめて、女子は男子を、男子は女子をよく理解できると思う」「本当の意味の男女平等のためには、男女差のない教育が望ましい。従って女子だけに限定した教育は見直されるべきである」「今後男女平等を図るためには、男女とも同じ教育を実施し、転職の機会、採用後の待遇、教育等をすべて同一にしていくべきである」「家庭生活の重要性は男女に共通に認識される必要がある」「女子教育という考え方は、よかれ悪しかれ差別の思想を内在しているように思われる。創立当時、特に女子教育を叫ばねばならなかった情勢は理解できるが、現在でもなおそこに止まることは、時代の流れに逆行するといわれても抗弁できないのではないか」といった意見もみられる。

これらの意見は、各期、各学部を通じて共通に出されており、時期別・学部別による顕著な差はみられないが全般的な傾向としては、女子の特性・天分を強調する意見は家政学部・師範家政学部に多く、個性の発揮、男女同等の教育を挙げる者は社会事業学部・英文学部にやや多いと言えよう。しかし、女子の特性・天文を説く者も、「育児・家事のみに関心を向けるだけでなく、地域社会の状況・国の動向・世界情勢に目を向け、自分の育児観をもって子育てにあたってほしい」「家を守ることは大切だが、それは人類を守ることと同意義だということを体のどこかで覚えているような人であってもらいたい」といった広い視野に立って女子教育を考えている点が注目される。

また、今後の女子教育の方向として、「これからの女子は、あらゆる面に進出していくべきであり、その実力を養っていかなくてはならない」「伝統的な役割分業にとらわれず、女性の社会参加が十分できるよう自分で判断し行動する力を養ってもらいたい」「決して男性にも自分にも甘えない人間を養成しなくてはならない」「社会人・国際人として活躍しうる素地を養う必要がある」「経済的自立をする上で精神的自立が必要であり、まず女であることに対する甘えをなくさなければならない」「女子であっても社会の一員として、いつでも男子に代って社会で働ける力を身

につけて置くことが必要である」「各自が個性を自由に発揮し、国際的視野に立って、男性と強調していける広い教養をもてるようにすること」といった点が強調されている。

特に女子大学の方向については、「門戸を男性にも開放してほしい」「女子教育の枠を大きく拡げて、一般大学の全領域をも含めることが望まれる」「女子の経済的独立を考えて、専門教育に力をいれるべきである」「男女共学となった現在、女子だけの高等教育に疑問を持つ」「男女共学の中で、お互いが尊敬し合いながら協同の生活責任者として収入も、生活のための労力も負担し合うべきであると考えるので、女子だけの教育は不自然であると思う」「伝統を大切に、それにプラスして新時代の感覚をもった社会人を養成すること」「生涯教育としての女子教育を考えその場を提供してほしい」「高齢化社会の中で、何歳になっても聴講生として講義が受けられるような機会を考えてほしい」「婦人問題を取り扱う科ができてもいいのではないか」といった意見が出されている。

本学の教育に対する評価

最後に、この時期に本学に学んだ者たちがその教育をどのように受けとめてきたか、最もよかったと感じた点、また問題があったと感じていた点について概観しまとめとする。

(一) よかった点

前中後期を通して、本学の教育を受けて最もよかった点として、多くの者が共通に挙げているのは、「女性として、母として、人間として、柔軟性のある教育方針がよかった」「婦人としてよりも、まず人間として生きることを教えられた」「狭義の学問だけでなく人間としてのあり方、精神面の訓育を受けられたこと」「知育偏重でなく、人間として如何にあるべきかについて考える機会を与えられたことがその後社会生活に役立った」「勉強したいとだけ思って入学したが、人には人間を高めるということが学問と並行して大切なことであると気づかせられたこと」といった感想にみられるように、人間としての教育、精神面での教育が重視されていたことである。

特に、「成瀬先生の遺訓、信念徹底・自発創生・共同奉仕の精神が私の一生を通じての人生観となった」「成瀬先生の三つの教えを通して、人生の意義について考えさせられたことが七十年近い生活の中でバック・ボーンとして生きている」「三大綱領が知らず知らずのうちに、自分の生活信条の骨子となり、実社会での困難に対処する弾力ある知恵と不屈の精神を与えられた」「信念徹底、自発創生、共同奉仕の三本柱が人生の変化（結婚・満州からの引き揚げ・夫

と死別・職業人としての生活・五人の子どもの養育・現在の独り暮し）に応じて大きな心の支えとなった」「夫なきあと、逆境にあっても強い意志をもって生き抜いてこられた原動力は、母校の精神教育のおかげである」「三大綱領が時を経て心の中に沈み自分自身の生き方そのものを変えていったと思う」「女子大で受けた精神教育が今日までの生活の支えとなり、自信をもって社会生活を送ることができた」といった応答が多くみられた。戦時下においても、「戦争のさなかで、生活は次第に不自由になり、開墾作業・防火訓練等が課せられたが、精神面において、伝統的に自由な空気が流れており、個性が尊重され、比較的束縛の少ない生活が送れたことを感謝している」「学徒出陣を見送り、再三の空襲の体験、学徒動員から終戦を迎え……といった動乱の学生生活の中でも、豊かな青春があり、今になってやはりその間に精神的自立が得られたと思う」といった感想を述べている者もあった。

また、実践倫理・修養会・瞑想会等については、「内面生活の充実を求めて一生努力する機縁を与えられた」「自己反省の機会とその方法を知ることができた」「自分を深くみつめ、内面的なことについて啓発されたことは、女学校だけでは受けられなかったことであり本学の特色だと思う」「客観的に自分をみつめ、自らを律し、考える習慣が得られた」といった点が挙げられている。

クラス会・縦の会（学科の会）・横の会（学年の会）・係の会といった自治生活の面では、「各種の会は当時はむしろわずらわしく感じたが、学科の勉強以上に大事な精神教育の場であったと思う」「友人と十分に討論したことが人生観の確立に役立った」「自分の考えを他人の中で自由に述べることができるようになった」「自分の意見を発表できるよう訓練されたことが社会に出てから役立った」「自分本位だったのが相手の立場になり、大きな目で物事を見、考えられるようになった」「全体の中での自分の役割、位置づけを考えて発言し、行動することができるようになった」「自己中心にならず、他人の意見を聞くことができるようになった」「人と共同し、協調する精神が養われた」といった点が評価されている。

また、寮生活の経験については、「青春時代に両親と離れて寮生活を送ったことは、独立心・責任感・協調性を学ぶ機会となり、人間形成に有意義であった」「寮での共同生活を通して人間関係が訓練された」「人の和の大切さを学ぶことができた」「寮生活で上下の礼儀、人への思いやりを教えられたことが、家庭生活、社会生活における人との交わりに役立った」「躾がゆきとどいており、生活上の訓練がなされた」「何ごとも自分でやるという主体性、自主性が培われた」といった点が強調されている。

これらの自治生活・寮生活の体験を通して「終生の良き友人」「生涯尊敬し、信頼できる友」を得、卒業後、現在に至るまで励まし、慰め合って生活できることを感謝している者も多い。

講義・授業の状況では、「専門の男子校に負けぬ良い先生方の教育が受けられたこと」「東大、慶応、早大等の一流の先生方から講義を受けたこと」「権威ある教授陣で高度の教育を受けたことによって、生涯研究を志向する姿勢を持続できた」「太平洋戦争のさなかであったが、真理・真実に基づいて科学的な講義をしようと努力された教師（主として講師）によって学問研究のあり方を考えさせられた」「専門の学問だけでなく、教育理念、しっかりした人生観を持った教師が居られたことが、自分の人生観に決定的な影響を与えた」「時流に流されず、学問の貴重さ、自我の確立を説く恩師にめぐり合えた」「広い分野にわたった勉強であったので、専門的には浅い面もあったが、学問の基礎を教えられたので、その後、好きな学問を選んで研究することができた」「戦時下のため、専門教育はあまり受けることはできなかったが、学ぶ態度、生き方について先輩である先生方から教えられた」「戦争中にもかかわらず割合自由な勉強ができた」「戦時であったが、広い視野のもとに授業が行われた」「学部を越えて学科を自由に選択できた」「選択科目が豊富であり、家政科に学びつつ美学・ドイツ語等が学べた」「敗戦直前のすべてが閉鎖的、軍国主義一辺倒の中で、最後まで英語・英文学の授業が自由に受けられたことが強く印象に残っている」「戦時中にもかかわらず、語学の楽しさ、英文学の深さ、難解さを学んだ」「敵国のことばといったせまい考えでなく、学問の自由さを

尊ぶ気風があった」といった思い出・感想が寄せられている。その他、講義を通して、「物事を処理する場合、どの分野の問題でも順を追って筋を通して考えていく思考力・判断力を与えられた」「自由に物を考え、何事に対しても自分自身の目で見、意見を持つことができるようになった」「常に学び続けたいとする心、生涯学習する心を養われた」「在学中に学んだことが晩年になってよみがえり、勉強を始めている」等、思考力・判断力が身についた、生涯学習を続けていきたいとする意欲、態度が養われたとする者が多い。

更に、「大学教育を受けて、女学校だけより自分に自信が持てた」「高等教育を受けたという自負が逆境にあって自分を支える力となった」「日本女子大に学んだという誇りがあり、困難にぶつかってもくじけることがなかった」「当時、女性としての最高学府に学んだという自信のようなものが、事にあたって落着きを与えてくれた」「どこへ行っても、日女大の卒業生としてのつながりがあった」「主人の仕事の関係で外地での生活が多かったが、どこに出ても、バックに日本女子大ありという自信で堂々と振舞うことができた」「常に指導者として自信を持つように教育された」「引き揚げ後、初めて教職についたが、いつも母校に対する誇りと責任が自分を支えた」といった高等教育を受けた自負・自信、母校の娘としての誇りと責任が語られている。

これらの点は、昭和前期の卒業生のみでなく大正期に本学で学んだ者たちにおいても共通に評価されている点であり、そこに時代を越えて、被教育者の側からの本学の教育の特色をみることができる（女子教育研究双書五、女子教育研究所編『大正の女子教育』国土社、昭和五十年五月「大正期の本学卒業生に対する調査報告書」の項参照）。

(二) 問題点

しかし反面、問題点としては、次のような点が指摘されている。「基礎教育に重きが置かれ、専門教育という点では中途半端であった」「精神面の教育に重点が置かれすぎ、職業人としての教育が不足していたと思う」「修養生活が

重視され学究的な雰囲気が欠けていた」「学問の追求を目ざして入学した者にとっては、宗教的講話や瞑想の時間が多すぎるように感じられた」「内攻的にすぎ、力がありながらその力を社会的に発揮する面が弱かったと思う」「自分を表に出さず、縁の下の力持ち的存在に片寄りすぎた」「実際の職業生活の中では、奉仕・謙譲等に加えて、いま一歩の強さがほしいと思う」「相手のことを考え、自分にきびしいあまり、積極的に欠ける面がある」「自治生活はあまりに会合が多すぎて勉強時間が少なかった」「クラス会・縦の会・横の会が多く、少々わずらわしい思いがした」「先輩・後輩の間柄において、若い人たちが自由に発言しにくい空気があった」「寮生活はあまりに規則づくめであり、自由がなく、文学志望の人間には苦痛であった」「異性との文通・交際を全く禁止されたので視野が狭くなり、異性を見る目が養われなかった」「画一的であり、没個性的な良妻賢母志向になっていった」「旧来の女子教育から脱して、女性の見立を目ざす創立当初の教育よりも、良家の子女を対象にする良妻賢母型の教育へと変わっていったと感じた」「教職に就く以外には、職業に就く者も少なく、もっと実社会と結びついた問題提起がなされていたら、また違った生き方もできたのではないかと考える」「実生活と遊離し、卒業後、地域の人々から理解されにくかった」「一部の階層に片寄り、閉鎖的・温室的な教育ではなかったかと思う。社会に出てからその点にとまどい、厳しい批判を浴びて鍛え直された」「恵まれた家庭環境で育った方が多く、ぬるま湯にひたっているような感があった」「上流階級に属する子女が多く、社会に出てから言葉づかいが丁寧すぎると批判された」「やや理想に走りすぎ、現実ばなれしていた感があった」「男女同権の自由な発想を早くから学んだので、田舎の生活になじめず苦労した」「自分たちは特別の人間だと折りにふれて思わされることが多かった」「エリート意識から抜け出すのに時間がかかった」「女子の最高学府を出た人間として、世間で過大評価されることが負担になった」等々である。

また、「井の中の蛙であり、大海を知らず、一人よがりの面があった」「自信過剰で内容が伴わなかった」「若い頃は、〝女子大卒〟ということで特別の見方をされたので、自意識過剰であったと思う」「同窓のまとまりはよいのだが、そ

の結果、閉鎖的になりがちであった」といった反省も出されている。

更に、「戦時下、防空訓練・学徒動員等のため、学問をするというよりも、銃後を守る女性としての学校生活であった」といった状況下にあった者たちは、「太平洋戦争の最中にあったので、軍国色が濃く、時代に迎合的であったのを残念に思う」「態勢順応型であり、時代に流されやすかったことを反省している」「軍事教錬・訓練など戦争協力の方向を余儀なくされた。しかし現在、これを批評することは酷だと思う」「愛国史観、大東亜共栄圏の講義などがあり、軍事教訓などは耐えがたくいやであった」「戦時下であり、自ら国を守る意識を高め、実践のための訓練も必要であり、防空訓練に時間をかけるのも当然であると思っていたが、東条勝子夫人を迎えての全学挙げての防空演習の実演と、その時かかった最敬礼の号令には非常な反発を感じ、今なお鮮明に記憶している」といった感想を寄せている者もあった。

また、「太平洋戦争勃発により、工場動員、繰り上げ卒業、物資不足の中で十分な勉強ができなかった」「戦争中の繰り上げ卒業であったため、卒業論文を出すこともなく、学問的な仕上げができなかったことが残念であった」「最終学年は動員により、工場に勤労奉仕に行き勉強が疎略になったことが、いまなお心残りである」「専門の講義がほとんど受けられなかったので、学力が不足している」「戦争が激化した時期の学生生活で、四年の修業年限が三年に短縮されたことは、今考えてもまことに残念であり、学力の不足がいつまでも負い目になっている」といった嘆きを持つ者も後期の卒業生に多い。

「専門教育・研究時間の不足」「職業人としての訓練の不足」「実社会からの遊離」「特権意識」等に対する批判は、大正期の卒業生も同様に指摘している点であり、戦前の本学の教育への受け手の側からの批判として卒直に受け止めなければならないであろう。

より高度の女子高等普通教育の普及を目ざす「女子総合大学」の設立は、成瀬校長の悲願であり、永眠に先立って

もたれた「告別講演」（大正八年一月二十九日）の席上、「設立当初の目的に基づき専門学校の規則を改め、総合大学の組織に進むるの時期に到達せるを信ずるを以て、此の際十年計画を以て之れが実行を策すること」（『日本女子大学四十年史』）と後事を後継者に託されている。これを受けて麻生・井上両校長は女子総合大学の実現に力を注ぎ、高等学部の開部（昭和二年）大学本科の開設（昭和五年）と着々準備が進められた。

一方、文部省教育審議会の高等教育に関する答申（昭和十五年九月）においても、「大学令による女子大学の創設」（教育審議会案中の私立大学・女子大学に関する要綱）が打ち出されており、男子と同様に大学令による女子大学設立が期待されたのであった。しかし学制の刷新は大東亜建設審議会（昭和十七年二月）に引き継がれ、戦時体制の方向が次第に強化されていく中で、この曙光も消え去り、その実現は更に戦争の苦難を経て、戦後の新制大学の発足にまたねばならなかった。そこに時代の制約、この時期の女子教育の限界を見るのである。

おわりに

本研究は、昭和五十六年度、五十七年度文部省科学研究費の助成を受け、一番ケ瀬康子教授（日本女子大学女子教育研究所主事）、中嶌邦教授（前主事）以下、後記の研究所スタッフによる研究組織で行ったものである。

調査の実施に際しては、多数の昭和前期の本学卒業生にご協力いただいたが特に、調査票の作成に当っては、木下けい（二七回、師範家政）、辻キヨ（三一回、家政）、村瀬繁子（三三回、英文）、藤村ジュン（四〇回、国文）、芦田央子（四三回、家政二類）の諸姉にお集まりいただき、多くの示唆を与えられた。また手集計による作業は、昭和前期女子教育研究会のメンバー（本学史学科卒業生）の労に負うところが多い。記して感謝の意を表したい。

今回の調査を通して、戦中・戦後の幾多の難関をくぐり抜け、現在も各方面で幅広く活躍している先輩諸姉のけい

がいに接することができたことは幸であった。そこには、戦時下といった特殊な教育状況のもとで戦時体制への協力を余儀無くさせられながらも、そのことへの反省・批判を通して、なお学びの場として、私学としての主体性を維持したいと願った教官たち、学生たちの姿があったことがうかがわれる。また、まず女子を〝人として〟教育することを願った、創立者成瀬仁蔵の教育理念が困難な状況下でも継承され、卒業後の生活の中で今日に至るまで生かされ、生活の支えになっている側面を読み取ることができるのである。

学園生活の中で織りなされた師との、友との出合い、ふれ合いは、現在の教育に失なわれているものは何かへの問いかけであり、警鐘でもあると思う。アンケートに綴られたこれらの方々の足跡、体験を通しての貴重な意見、母校の将来を思えばこその忌たんのない批判、女子教育への期待等を今後の本学の教育に、また女子教育の方向にどのように反映させ展開していくことができるのか、本研究所の役割、責任の重さを痛感するのである。

＜山本　和代・落合　孝子・真橋美智子・河合　慶子＞

（付録） 昭和前期の本学卒業生に対する調査

日本女子大学女子教育研究所

一，日本女子大学の教育についてお伺いします。

（　　）回生　　現在の年齢（満　　）歳

1）　あなたが本学に在学された当時のことについてお答えください。

A．入学時の（　　）学部・（　　）学科（類）

B．寮について　　1．寮生活したことがある（寮名　　）（在寮期間計　　年）

　　2．寮生活をしたことはない

C．在学期間　　大正（　　）年から昭和（　　）年まで

D．入学時の年齢　　（満　　）歳

2）A．あなたが本学に入学なさったのはどのようなお気持または動機からですか。あなたのお気持に最も近かったもの**二つ以内**で○印をおつけください。

1．専門の勉強をしたかったので
2．女学校だけでは何となく物足りなかったので
3．日本女子大にあこがれて
4．上京したかったので
5．よい先生の教えを受けたかったので
6．精神教育を受けたいと思って
7．精神的自立を得たいと思って
8．何か将来，社会の役に立ちたいと思って
9．卒業後経済的に自立したいと思って
10．資格，免許を取りたいと思って
11．両親のすすめによる
12．教師のすすめによる
13．親戚・知人や先輩に本学で学んだ人がいたので
14．特に動機はなかった
15．その他（具体的に）

B．あなたが入学なさった時の選考方法はどのようなものでしたか。当てはまるものすべてに○印をおつけください。

1．女学校の推薦による　　2．学科試験　　3．面接　　4．作文　　5．その他

3）　あなたが学科（類）をお選びになったのはどのような理由からですか。あなたのお考えに最も近かったもの**一つ**に○印を

おつけください。

1．その分野が好きで専攻したかったので

2．両親その他がその分野なら許してくれたので

3．資格・免許を取得したかったので

4，将来の家庭生活に役立つと思ったので

5，その学科が自分の適性（学力や性格）に合っていると思ったので

6．その他

4）A．ご両親はあなたが本学に入学なさることについてどのようにお考えでしたか。お考えに最も近いと思われる所に○印をつけ，その時のご両親のご意見もあわせてご記入ください。

	積極的に賛成	賛成	賛成も反対もしない	どちらかといえば反対	強く反対
父上					
母上					

父上のご意見（　　）

母上のご意見（　　）

B．ご両親のご職業と最終学歴についてお答えください。

入学当時の父上の職業（　　）　最終学歴（　　）

入学当時までの母上の職業経験　最終学歴（　　）

1．あり　2．なし

ご職業（　　）

5）　あなたの学生生活をふりかえって，次のような面で特に記憶に残っていること，および印象に残っていることをお書きください。

A．実践倫理について

B．講義について

C．クラス会，係，縦の会，修養会について

D．寮生活について

E．そのほか本学での学生生活を通じて思い出に残っていることがありましたらお書きください。

6)　あなたは学生時代にどのような本や雑誌をお読みになりましたか。特に愛読されたものについて，書名，雑誌名をお書きください。

＜書名＞

＜雑誌名＞

7)　あなたは学生時代に何かおけいこごとをなさっていましたか。なさったことがありましたらその種類，または内容についてお書きください。

〈学内（寮を含む）〉

〈学外〉

8)　あなたが日本女子大学の教育をお受けになって最もよかったと感じていらっしゃる点，また問題があると感じていらっしゃる点がありましたらお書きください。

〈よかった点〉

〈問　題　点〉

二，卒業後のご生活についてお伺いします。

1)　ご結婚について該当するものに○印をおつけ下さい。

A．未・既婚について　1．未婚　2．既婚

B．〈Aで2（既婚）に○印をつけた方に〉

Ⅰ　現在夫と同居

Ⅱ　現在夫と別居

Ⅲ　夫と離別　{1．その後再婚した　2．再婚していない}

Ⅳ　夫と死別　a┌1．病気　2．戦死（戦病死を含む）　3．戦災　4．事故┐
　　└5．その他（　　）　　┘

b{6その後再婚した　7．再婚していない}

C．〈Aで2（既婚）に○印をつけた方に〉

1．ご結婚の年齢（　　）歳

2．ご結婚時のご主人の職業（たとえば，官吏，会社員，軍人，医師，大学教官などのように具体的にお書きください。）
（　　）

3．お子さんについて

a　子どもはいない

b　子どもは（　　）人もった　{男（　　）人　女（　　）人}

D．現在のご生活の形態について（未婚の方もお答え下さい。）

1．単身　2．夫婦のみ　3．家族・親族と同居

4．家族・親族以外の者と同居　5．ホームなどの施設

6．その他（　　）

2)　本学を卒業なさった直後，どのような進路をとられましたか。主な進路**一つ**に○印をつけ，その内容などをご記入ください。

1．卒業後もさらに勉学を続けた（内容　　）（所属　　）

2．職業についた（職種　　）（勤務先　　）
3．職業ではないが，社会的な活動をした（内容　　）（所属　　）
4．けいこごとなどの修業をした　（内容や種類　　）
5．家業に従事した　（家業の内容　　）
6．家事の手助けをした
7．卒業後ほどなく結婚した
8．その他（　　）（記入　　）

3）A．あなたは本学を卒業なさってから現在までのご生活の中で，職業を持たれたことがありますか。（この場合の職業とはアルバイトや内職は含みません。）該当するものに○印をおつけください。
1．卒業後，現在までずっと職業を持っている
2．現在持っているが，持っていなかったことがある（中断していたことあり）
3．現在持っていないが，過去には持っていたことがある
4．職業を持ったことはないが，アルバイト・内職など一定の収入を伴う仕事をしたことがある
5．収入を伴う仕事をしたことはない

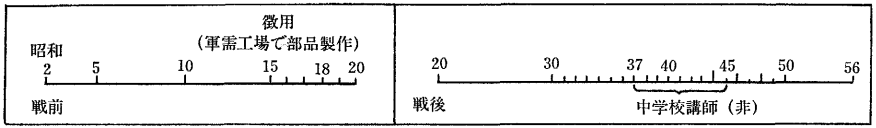
B．〈質問3）Aで 1. 2. 3.（職業をもったことがある）に○印をつけた方に〉
下記についてご記入ください。（主たる職種は小学校教師，雑誌編集など具体的にご記入ください。）

	勤務年数	※主たる職種	就職した理由
1．常勤で	（計　年）	（　　）	（　　）
2．非常勤のみで	（計　年）	（　　）	（　　）

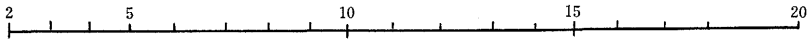
3．勤務の総年数　（常勤と非常勤のみの総計）　（計　年）

C．〈質問3〉Aで 1. 2. 3.（職業をもったことがある）に○印をつけた方に〉
あなたが職業に就かれたのはどの時期ですか。例にならって該当する時期に具体的な職種をご記入ください。非常勤やパートの場合は，職種のあとに（非）又は（パ）とご記入ください。

記入例

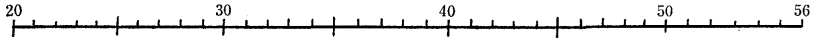


昭和



戦前・常勤勤務年数
計（　　年）
戦前・非常勤勤務年数
計（　　年）

昭和



戦後・常勤勤務年数
計（　　年）
戦後・非常勤勤務年数
計（　　年）

D．〈質問３）Aで 1. 2. 3. 4.（職業をもったことがある，アルバイトや内職など一定の収入を伴う仕事をした）に○印をつけた方に〉
あなたがそれらの職業や仕事を持たれたことと，戦争体験との間に何か関連がありましたらお書きください。

4）A．職業生活以外に各種の団体やグループに所属して活動した経験がおありですか。（戦前の大日本婦人会，戦後の学校ＰＴＡなどのように大部分の者が加盟している場合は特に役員として積極的に活動された場合のみご記入ください。）該当するものに○印をおつけください。

1．現在活動している　　2．現在は活動していないが，過去に活動した経験がある

3．現在も過去も活動した経験はない

B．〈質問４）Aで 1. または 2.（活動している・活動の経験がある）に○印をつけた方に〉
戦前・戦後・現在に分けて，活動された団体またはグループの種類をご記入ください。

団体の種類	戦　　前	戦　　後	現　　在
地域団体	例　大日本連合婦人会	例　地域婦人会会長	例　公立中学校ＰＴＡ副会長
有志団体	例　新婦人協会	例　大学婦人協会	例　日本婦人有権者同盟
社会福祉団体	例　日赤奉仕団	例　日赤奉仕団	例　仏教婦人会
その他 宗教・政治・ 職域団体など	例　仏教婦人会	例　自民党婦人部	例　教職員組合

（注）戦前・戦後・現在を通じて活動なさった場合は，それぞれの欄にご記入ください。

5）A．質問４）の活動以外に何か公職（国および地方自治体の議員および各種審議会委員，教育委員，社会教育委員，家裁調停委員，人権擁護委員，民生委員，保護司，児童委員などに）につかれたことがおありですか。該当するものに○印をおつけください。

１．現在就いている　　２．現在は就いていないが過去に就いたことがある　　３．現在も過去も就いたことがない

B．〈質問５）Aでは 1. または 2.（公職に就いている・就いたことがある）に○印をつけた方に〉

戦前・戦後・現在に分けて，就かれた公職の種類をご記入ください。

公職の種類	戦　前	戦　後	現　在

（注）戦前・戦後・現在を通じて活動なさった場合は，それぞれの欄にご記入ください。

6）A．現在のご生活の中でどのようなことに最も生きがいを感じていらっしゃいますか。下記の中から**一つ**選んで○印をおつけください。

1．自分に関心のある研究や学習　2．芸術・芸能・趣味的活動　3．旅行・スポーツなど
4．社会活動（団体活動・ボランティア活動など）　5．職業生活　6．家庭・家族
7．精神的なもの（宗教など）　8．その他（記入）（　　）

B．お選びになったものについて，具体的な内容をお書きください。

7）A．夫が日常の家事（炊事・掃除・洗濯など）を行なうことについて，次のような考え方がありますがあなたはどのようにお考えですか。（ここで言う日常の家事には妻の病気や出産時の家事は除外してお考えください。）あなたのお考えに最も近いもの**一つ**に○印をおつけ下さい。

1．家事は妻の役割であるから，夫は手を出すものではない
2．家事はおもに妻の役割であるが，夫が手伝ってもさしつかえない
3．家事を妻だけの役割とせず，夫が手伝うのはよいことである
4．家事は夫と妻の共同の役割であるから，夫も分担すべきである

B．またあなたのご主人のお考えはどれに最も近いと思われますか。

1．家事は妻の役割であるから，夫は手を出すものではない
2．家事はおもに妻の役割であるが，夫が手伝ってもさしつかえない
3．家事を妻だけの役割とせず，夫が手伝うのはよいことである
4．家事は夫と妻の共同の役割であるから，夫も分担すべきである

8)　学令に達しない乳幼児の育児（保育）と母親の就労との関係について，あなたのご意見に最も近いもの**一つ**に○印をおつけ下さい。

1．乳幼児の育児は母親にとって重要な仕事だから，なにをおいても母親が育てるべきで，仕事につくべきでない
2．子どもは母親の手だけで育てなくても，父親，祖母，伯・叔母などに育児の援助を受けられれば仕事についてもよい
3．家族・親族以外でも保育を担当してくれる人（お手伝いさん，近所のおばさんなど）がいれば仕事についてもよい
4．子どもの保育は保育所などの専門機関や保育ママなどの保育の専門家を活用して，できだける仕事につく方がよい
5．その他（ご意見がありましたらご自由にお書きください。）

9)　現在，高等学校において「家庭一般」が女子のみ必修になっておりますが，あなたはそのことについてどのようにお考えになりますか。あなたのお考えに最も近いもの**一つ**に○印をおつけ下さい。なお文部省指導要領によれば，「家庭一般」の内容は，下記のように記されています。

〔衣食住及び保育などに関する基礎的な知識と技術を家庭経営の立場から体験的，総合的に習得させ，家庭生活を合理的に営み，その充実向上を図る能力と実践的態度を育てる。〕

1．女子のみ「必修」でよい　　2．男女とも「必修」がよい
3．女子のみ「選択」がよい　　4．男女とも「選択」がよい
5．選択，必修を問わず，男女とも同じ取り扱いにした方がよい
6．男女ともに履修する必要はない
7．その他（ご意見がありましたらご自由にお書きください。）（　　）

10)　今後の女子教育の方向について，あなたがお考えになっていることがありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。おそれいりますが至急ご返送ください。

昭和前期の女子教育

1984年7月25日　初版発行 ©

編　者　日本女子大学女子教育研究所
発行者　長　宗　泰　造
印刷所　株式会社　厚　徳　社
発行所　株式会社　国　土　社

検　印
廃　止

東京都文京区目白台1—17—6
電　話　(943)　3721　(代)
振替口座　東京 6-90631

ISBN4-337-46012-8 C3337 ¥3000E